

館報 2007 56

ANNUAL REPORT

OF BRIDGESTONE MUSEUM OF ART & ISHIBASHI MUSEUM OF ART

石橋財団 ブリヂストン美術館
石橋財団 石橋美術館

館報 2007 56

ANNUAL REPORT

OF BRIDGESTONE MUSEUM OF ART & ISHIBASHI MUSEUM OF ART

石橋財団 ブリヂストン美術館

石橋財団 石橋美術館

館報56号(2007年度)

編集・発行

石橋財団ブリヂストン美術館
〒104-0031 東京都中央区京橋1-10-1

石橋財団石橋美術館
〒839-0862 福岡県久留米市野中町1015

印刷
株式会社昭和堂

2008年12月発行

Annual Report of Bridgestone Museum of Art &
Ishibashi Museum of Art No. 56 (2007)

Edited and published by

Bridgestone Museum of Art, Ishibashi Foundaion
1-10-1, Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo 104-0031, Japan

Ishibashi Museum of Art, Ishibashi Foundation
1015, Nonaka-machi, Kurume-shi, Fukuoka-ken 839-0862, Japan

Printed by
Showado Co., Ltd.

©2008
Bridgestone Museum of Art,
Ishibashi Museum of Art,
Ishibashi Foundation

1	設立趣旨、機構・運営……………	4
	Brief Histories of the Museums, Organization and Management……………	5
2	展覧会	
	• プリヂストン美術館	
	・ 特集展示……………	6
	・ 夏の特別展示……………	8
	・ 拡大常設展……………	10
	• 石橋美術館	
	・ 特別展……………	23
	・ 企画展……………	28
3	教育普及	
	• プリヂストン美術館……………	44
	• 石橋美術館……………	47
4	入場者数……………	51
5	新収蔵作品 New Acquisitions ……	53
6	新収図書……………	88
7	修復記録……………	89
8	作品貸出記録	
	• プリヂストン美術館……………	93
	• 石橋美術館……………	94
9	刊行物一覧……………	96
10	研究報告	
	• 日本におけるピカソの受容と歴史的回顧 — 影響, 批評, 収集の軌跡	
	塚田美香子……………	103
	• 筑後洋画の系譜 補遺	
	植野健造……………	133
11	美術館案内 Guide to the Museums ……	139
12	石橋財団職員……………	140

設立趣旨

ブリヂストン美術館

ブリヂストン美術館は、株式会社ブリヂストンの創業者・石橋正二郎(1889-1976)が多年にわたって蒐集愛蔵した内外の美術品を、社会公共のため、広く一般の鑑賞に供し、文化向上の一端に貢献したいとの趣旨に基づき、1952(昭和27)年1月8日、ブリヂストンビルディング竣工とともに同ビル内に開設されたものである。その後1956(昭和31)年4月に設立された財団法人石橋財団がその経営を継承し、1961(昭和36)年9月には同財団が石橋正二郎から所蔵美術品の寄贈を受けた。なお、2003(平成15)年1月に一階部分の増床工事を行い、ティールームを開設した。

石橋美術館

石橋美術館は、石橋正二郎が1956(昭和31)年4月26日、同社の創立25周年を記念して、社会公共の福祉と文化向上のために、郷土久留米市に寄贈した石橋文化センターの中心施設である。1977(昭和52)年、石橋正二郎の遺族の寄付により増改築が行われ、同年4月以降、久留米市の要請により、石橋財団がその管理運営に当たっている。

なお、本館に付随する別館は、1995(平成7)年1月8日、石橋正二郎によって蒐集された石橋コレクションのうち、書画・陶磁器類を収蔵展示する施設として石橋幹一郎により久留米市に建設寄贈され、一年余の養生期間を経て1996(平成8)年10月17日に開館した。

機構・運営

石橋財団 (2007年12月31日現在)

理事長	石橋 寛						
理事	鶴澤昌和	加嶋昭男	中山 暁	平野 実	加瀬英明	島田紀夫	
監事	亀徳正之	湯淺達祐	滝口勝昭				
評議員	石井公一郎	高橋芳郎	高階秀爾	石樽和夫	遠藤長夫	村上 浩	小林 忠
	石橋知子	水戸岡鋭治					

美術館運営委員会

委員長	石橋 寛					
委員	高階秀爾	富山秀男	小林 忠	島田紀夫	平野 実	中山 暁

寄付助成委員会

委員長	鶴澤昌和				
委員	加嶋昭男	村上 浩	平野 実	島田紀夫	

常務理事 中山 暁

事務局

事務局長 遠藤長夫

ブリヂストン美術館

館長 島田紀夫

石橋美術館

館長 平野 実

Brief Histories of the Museums

Bridgestone Museum of Art

On January 8, 1952, ISHIBASHI Shojiro (1889-1976), the founder of the Bridgestone Corporation, wishing to promote cultural development in Japan, opened to the public a museum of art within the newly-completed Bridgestone Building under the name of the “Bridgestone Gallery”. The works of art, both Japanese and foreign, which he had collected over the years formed the nucleus of the exhibits. In April 1956, the Ishibashi Foundation was established to take over the management of the Gallery, and in September 1961, ISHIBASHI donated the works in the Gallery to the Foundation. In January 1968, the English name was changed from the “Bridgestone Gallery” to the “Bridgestone Museum of Art”. In January 2003, the ground floor was enlarged and a tea room was opened.

Ishibashi Museum of Art

On April 26, 1956, in commemoration of the 25th anniversary of the Bridgestone Corporation, ISHIBASHI Shojiro donated the Ishibashi Cultural Center to his home town of Kurume to render a public service and promote cultural development. The Ishibashi Museum of Art (originally the Ishibashi Art Gallery) is the principal institution in the Center. In 1977, the Museum building was enlarged and renovated, thanks to a contribution from the Ishibashi family, and in April of the same year the city of Kurume entrusted the Ishibashi Foundation with the management of the Museum.

On January 8, 1995, ISHIBASHI Kan'ichiro, son of ISHIBASHI Shojiro donated to the city of Kurume a new museum especially designated to exhibit Shojiro's collection of Asian Arts, such as brush painting, calligraphy, porcelain works. It has been open to the public since October 17, 1996.

Organization and Management

Ishibashi Foundation

(As of December 31, 2007)

President of the Board of Directors		ISHIBASHI Hiroshi		
Directors	UZAWA Masakazu	KASHIMA Akio	NAKAYAMA Akira	HIRANO Minoru
	KASE Hideaki	SHIMADA Norio		
Auditors	KITOKU Masayuki	YUASA Tatsusuke	TAKIGUCHI Katsuaki	
Council Members	ISHII Koichiro	TAKASAKI Yoshiro	TAKASHINA Shuji	ISHIKURE Kazuo
	ENDO Takeo	MURAKAMI Hiroshi	KOBAYASHI Tadashi	ISHIBASHI Tomoko
	MITOOKA Eiji			
Executive Committee of the Museums				
Chairman	ISHIBASHI Hiroshi			
Members	TAKASHINA Shuji	TOMIYAMA Hideo	KOBAYASHI Tadashi	SHIMADA Norio
	HIRANO Minoru	NAKAYAMA Akira		
Program Development Grant Committee				
Chairman	UZAWA Masakazu			
Members	KASHIMA Akio	MURAKAMI Hiroshi	HIRANO Minoru	SHIMADA Norio
Managing Director	NAKAYAMA Akira			
Administration				
Executive Secretary	ENDO Takeo			
Bridgestone Museum of Art				
Director	SHIMADA Norio			
Ishibashi Museum of Art				
Director	HIRANO Minoru			

〈特集展示〉

セザンヌ4つの魅力—人物・静物・風景・水浴

2007年10月6日(土)－11月25日(日)

会場：第2室

主催：石橋財団ブリヂストン美術館

概要：ブリヂストン美術館が所蔵するセザンヌの作品を中心に、「Ⅰ. 自画像と家族の肖像」「Ⅱ. 静物」「Ⅲ. 風景画」「Ⅳ. 水浴図」の4つのテーマに沿って、その魅力を探る。彼が影響を与えたピカソやブラック、安井曾太郎らの作品を加えた全29作品の特集展示。

出品内容：油彩20点、水彩・素描6点(うち1点は表裏を展示)、パステル1点、版画1点 計29点

入場者総数：41,873人(1日平均952人)



展覧会チラシ

出品目録：

Ⅰ 自画像と妻の肖像

1. ボール・セザンヌ《帽子をかぶった自画像》/ 1890-94年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋31
2. ボール・セザンヌ《縞模様の服を着たセザンヌ夫人》/ 1882-85年 / 油彩・カンヴァス / 横浜美術館

Ⅱ 静物画

3. ボール・セザンヌ《鉢と牛乳入れ》/ 1873-77年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋28
4. ボール・セザンヌ《砂糖壺、梨とテーブルクロス》/ 1893-94年 / 油彩・カンヴァス / ポーラ美術館
5. パブロ・ピカソ《ブルゴーニュのマール瓶、グラス、新聞紙》/ 1913年 / 油彩、砂、新聞紙・カンヴァス / 外洋173
6. パブロ・ピカソ《カップとスプーン》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 外洋83
7. ジョルジュ・ブラック《梨と桃》/ 1924年 / 油彩・板 / 外洋86
8. 安井曾太郎《りんご》/ 1942年頃 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋265
9. 梅原龍三郎《静物(りんごと梨)》/ 1917年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋270

Ⅲ 風景画

10. ボール・セザンヌ《曲った木》/ 1888-90年 / 油彩・カンヴァス / 財団法人ひろしま美術館
11. ボール・セザンヌ《サント=ヴィクトワール山とシャトー・ノワール》/ 1904-06年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋32
12. パブロ・ピカソ《生木と枯木のある風景》/ 1919年 / 油彩・カンヴァス / 外洋143
13. 安井曾太郎《初夏(『文藝春秋』1955年6月号表紙絵)》/ 1955年 / 油彩・紙 / 寄託作品
14. 林俊衛《サント=ヴィクトワール》/ 1925-29年頃 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋170

Ⅳ 水浴図

15. ボール・セザンヌ《凭れる裸体》/ 1863-66年頃 / 木炭・紙 / 外洋27

16. ポール・セザンヌ《水浴》/ 1865-70年頃 / 水彩・紙 / 寄託作品
17. ポール・セザンヌ《三人の水浴の女たち》/ 1874-78年頃 / 鉛筆・紙 / 外洋29
18. ポール・セザンヌ《休息する水浴の男たち》/ 1875-77年頃 / インク, 水彩・紙 / 外洋158
19. no.18の裏面 / 外洋 158
20. ポール・セザンヌ《水辺の人物たち》/ 1877年頃 / 鉛筆, 水彩・紙 / 外洋113
21. ポール・セザンヌ《4人の水浴の女たち》/ 1877-78年 / 油彩・カンヴァス / ポーラ美術館
22. ポール・セザンヌ《水浴》/ 1883-87年 / 油彩・カンヴァス / 大原美術館
23. ポール・セザンヌ《水浴群像》/ 1897-1900年頃 / 鉛筆, 水彩・紙 / 外洋30
24. カミーユ・ピサロ《水浴の女》/ 1895年 / リトグラフ / 外版7
25. エドガー・ドガ《浴後》/ 1900年頃 / パステル・紙 / 外洋18
26. ピエール=オーギュスト・ルノワール《水浴の女》/ 1907年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋136
27. ピエール=オーギュスト・ルノワール《すわる水浴の女》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / 外洋34
28. 安井曾太郎《水浴裸婦》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋142
29. 梅原龍三郎《脱衣婦》/ 1912年 / 油彩・カンヴァス / 日洋200

*IMA は、石橋美術館の所蔵であることを示す。

所蔵の表記のない作品は、すべてブリヂストン美術館蔵。

関連事業：

土曜講座「セザンヌ芸術の魅力」→ p.45

ギャラリートーク

広報記録：

新聞・雑誌：

前田恭二「セザンヌ特集 没後100年の余韻」『読売新聞』2007年11月15日朝刊

ルポ「ブリヂストン美術館『セザンヌ4つの魅力展』が開かれるまで」『ミュージアムの仕事』2008年1月25日 p.72-77

Web：

編集部「エクラのNEWS な宝石箱」エクラ[集英社], <http://www.s-woman.net/eclat/jewel/vol5.html>

島田紀夫「セザンヌと彼に魅了された画家たちの29作品」Fuji-tv ART NET, <http://www.fujitv.co.jp/events/art-net/go/518.html>

テレビ・ラジオ：

「セザンヌ4つの魅力展」ポッドキャスト番組「Chocolat」2007年9月8日放送

「新日曜美術館」(アートシーン)NHK 教育テレビ, 2007年10月21日放映



会場風景



会場風景

〈夏の特別展示〉

青木繁と《海の幸》

2007年7月18日(水)－9月30日(日)

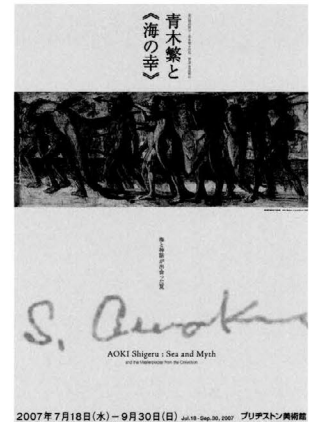
会場：第8室

主催：石橋財団ブリヂストン美術館

概要：《海の幸》のほか、《わだつみのいろこの宮》など、青木繁作品計6点を展示。併設としてコレクションより165点を展示した。

出品内容：油彩6点

入場者総数：32,260人(1日平均489人)



展覧会ポスター

出品目録：

1. 青木繁《輪転》／1903年／油彩・カンヴァス／IMA／日洋90
2. 青木繁《海》／1904年／油彩・板／IMA／日洋94
3. 青木繁《海の幸》／1904年／油彩・カンヴァス／IMA／日洋95
4. 青木繁《海景(布良の海)》／1904年／油彩・カンヴァス／日洋100
5. 青木繁《海》／1904年／油彩・カンヴァス／IMA／日洋498
6. 青木繁《わだつみのいろこの宮》／1907年／油彩・カンヴァス／IMA／日洋104

*IMA は、石橋美術館の所蔵であることを示す。

関連事業：

土曜講座「再考・青木繁」→ p.44

9月12日(水)、バスツアー「《海の幸》を訪ねる旅」をおこなった。(読売旅行社主催)

広報記録：

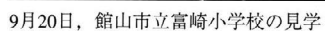
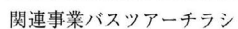
新聞・雑誌：

結城順一「ブリヂストン美術館」『一枚の絵』2007年8月号，p.80-83

川本三郎「私のメディア日記 青木繁と《海の幸》—青木繁6作品」『マンスリーみつびし』2007年9月号，p.17

山下裕二「この一点への旅《海の幸》青木繁」『エクラ』2007年10月号，p.312

「新日曜美術館」(アートシーン)NHK 教育テレビ, 2007年9月9日放映



〈拡大常設展〉

じっと見る—印象派から現代まで

前期：2007年1月2日(火)－4月8日(日)

後期：2007年4月10日(火)－7月16日(月・祝)

会場：全館

主催：石橋財団ブリヂストン美術館

概要：印象派から現代までの作品を中心に、コレクションの多様性と魅力を紹介したもの。西洋美術史の大まかな流れに沿って、作家ごとに作品をまとめて展示した。日本の作家は2部屋にまとめた。

出品内容：前期：絵画129点、彫刻37点、陶器14点 計180点

※期間中2作品の展示替えあり 総展示数182点

後期：絵画128点、彫刻37点、陶器14点 計179点

※15点の作品を前期と入れ替えた。

入場者総数：前期：32,912人(1日平均392人)

後期：28,431人(1日平均334人)

前期展覧会ポスター



後期展覧会ポスター

出品目録：

エントランス

1. クリスチャン・ダニエル・ラウホ《勝利の女神》/ 大理石 / 外彫81

階段

2. アリスティド・マイヨール《欲望》/ 1905-08年 / ブロンズ / 外彫66

彫刻ギャラリー1

3. オーギュスト・ロダン《立てるフォーネス》/ 1884年頃 / 大理石 / 外彫40
4. オーギュスト・ロダン《カミーユ・クロデル》/ 1889年 / ブロンズ / 外彫42 ※後期のみ展示
5. オーギュスト・ロダン《考える人》/ 1902年頃 / ブロンズ / 外彫39 ※前期のみ展示
6. オーギュスト・ロダン《青銅時代》/ 1904年 / ブロンズ / 外彫38 ※前期のみ展示
7. エミール＝アントワヌ・ブールデル《サッフォ》/ 1887年 / ブロンズ / 外彫44 ※後期のみ展示
8. エミール＝アントワヌ・ブールデル《風の中のベートーヴェン》/ 1904-08年 / ブロンズ / 外彫43
9. エミール＝アントワヌ・ブールデル《ペネロペ》/ 1909年 / ブロンズ / 外彫45
10. エミール＝アントワヌ・ブールデル《弓をひくヘラクレス》/ 1909年 / ブロンズ / 外彫46
11. シャルル・デスピオ《アントワネットの顔》/ 1918年 / ブロンズ / 外彫48
12. シャルル・デスピオ《クラ＝クラ》/ 1919年 / ブロンズ / 外彫49

彫刻ギャラリー2

13. コンスタンティン・ブランクーシ《接吻》/ 1907-10年 / 石膏 / 外彫100
14. アレキサンダー・アーキベンコ《ゴンドラの船頭》/ 1914年 / ブロンズ / 外彫86
15. オシップ・ザツキン《母子》/ 1919年 / 着色されたセメント / 外彫54
16. オシップ・ザツキン《三美神》/ 1950年 / ブロンズ / 外彫56
17. オシップ・ザツキン《ボモナ(トルソ)》/ 1951年 / 黒檀 / 外彫55
18. ヘンリー・ムア《横たわる人体》/ 1976年 / ブロンズ / 外彫89
19. マリノ・マリニ《騎手》/ 1952年 / ブロンズ / 外彫70
20. ペリクレ・ファッツィーニ《爽風(B)》/ 1972-73年 / ブロンズ / 外彫88

第3室：古代美術

21. シュメール《女の胸像》/ 紀元前24世紀 / 閃緑石 / 外彫1
22. パルミユラ《人物像》/ 1-2世紀 / 石灰石 / 外彫94
23. エジプト《セクメト神像》/ 紀元前14世紀 / 黒花崗岩 / 外彫64
24. エジプト レリーフ断片《柘榴と葡萄図》/ アマルナ時代(紀元前1360年頃) / 石灰石 / 外彫95
25. エジプト レリーフ断片《アヌビス神礼拝図》/ 紀元前13世紀 / 砂岩 / 外彫7
26. エジプト レリーフ断片《神牛》/ 紀元前1300-1200年 / 石 / 外彫8
27. エジプト《彩色木棺》/ 紀元前13世紀 / 木 / 外彫67
28. エジプト《ホルス神浮彫》/ 紀元前1000-350年 / 大理石 / 外彫5
29. エジプト《聖猫》/ 紀元前950-660年 / ブロンズ / 外彫90
30. ギリシア《獅子頭部》/ 紀元前5世紀 / 大理石 / 外彫13
31. ギリシア《哲人の顔》/ 紀元前4世紀 / 大理石 / 外彫15
32. ギリシア《ヴィーナス》/ ヘレニスティック期(紀元前323-30年) / 大理石 / 外彫14
33. グレコ=ローマン《アテナ頭部》/ 大理石 / 外彫79
34. ギリシア コリントス球形アリュバロス「ルクスス・グループ」(?)《鷺と鶏図》/ 紀元前610-590年 / 陶器182
35. ギリシア アッティカ黒絵式頸部アンフォラ「ブーローニュ441の画家」《ヘラクレスとケルベロス図》/ 紀元前520-510年 / 陶器197
36. ギリシア アッティカ黒絵式オイノコエ《ディオニュソスとマイナス図》/ 紀元前500年頃 / 陶器76
37. ギリシア アッティカ黒絵式レキュトス《ディオニュソス, サテュロスとマイナス図》/ 紀元前490-480年 / 陶器67
38. ギリシア アッティカ黒絵式レキュトス《ディオニュソスとアリアドネ図》/ 紀元前490-480年 / 陶器66
39. ギリシア アッティカ黒絵式レキュトス《ディオニュソスとマイナス図》/ 紀元前490-480年 / 陶器68
40. ギリシア アッティカ赤絵式キュリクス《サテュロス図》/ 紀元前5世紀中頃 / 陶器89
41. ギリシア アッティカ白地レキュトス《墓参図》/ 紀元前425-400年頃 / 陶器71
42. ギリシア アッティカ赤絵式レベス・ガミコス《ニケと女性図》/ 紀元前400-375年頃 / 陶器91
43. ギリシア カンパニア赤絵式魚文皿 / 紀元前375-350年頃 / 陶器42
44. ギリシア カンパニア赤絵式ヒュドリア「ラゲットの画家」《ディオスクーロイ図》/ 紀元前350年頃 / 陶器87
45. ギリシア カンパニア赤絵式ヒュドリア《エロス図》/ 紀元前350-325年頃 / 陶器88
46. ギリシア アプリア赤絵式柱形把手クラテル《男女図》/ 紀元前330年頃 / 陶器92
47. エトルリア 建築装飾フリーズ部分《泉水に向かう二頭の馬》/ 紀元前550-540年 / 彩色テラコッタ / 外彫92
48. ローマ《ヴィーナスの頭部》/ 大理石 / 外彫23

-
49. ローマ モザイク断片《牧神頭部》/ 1世紀 / 陶器114
50. ヘルクラネウム 壁画断片《ディオニュソス図》/ 1世紀 / フレスコ / 外洋2

第1室：伝統から近代へ

51. 三連祭壇画《デシス図》/ 板絵 / 外洋126
52. レンブラント・ファン・レイン《聖書あるいは物語に取材した夜の情景》/ 1626-28年 / 油彩・銅板 / 外洋5
53. アントニー・ヤンスゾーン・ファン・デル・クロース《レイスウェイク城》/ 油彩・板 / 外洋4
54. グレゴリオ・ラッザリーニ《黄金の子牛の礼拝》/ 1700-07年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋127
55. パテル, ジャン=バティスト《水浴》/ 油彩・カンヴァス / 外洋175 ※前期のみ展示
56. トマス・ゲインズバラ《婦人像》/ 油彩・カンヴァス / 外洋176
57. ジャン=オーギュスト=ドミニク・アングル《若い女の頭部》/ 油彩・カンヴァス / 外洋161
58. オノレ・ドーミエ《山中のドン・キホーテ》/ 1850年頃 / 油彩・板 / 外洋171
59. オノレ・ドーミエ《ラタボワール》/ 1850年頃 / ブロンズ / 外彫91
60. オノレ・ドーミエ《誰もまさかおれたちが(『おしゃれ』より)》/ リトグラフ / 外版155-2 ※前期のみ展示
61. オノレ・ドーミエ《ちょ！ネクタイぐらい結べるぞ(『おしゃれ』より)》/ リトグラフ / 外版155-4 ※前期のみ展示
62. オノレ・ドーミエ《犬も猫も壺もどれもこれもかわいい・・・(『陶器マニヤ』より)》/ 1855年 / リトグラフ / 外版158-4 ※後期のみ展示
63. オノレ・ドーミエ《まったく掛け値なしの大傑作だ(『陶器マニヤ』より)》/ 1855年 / リトグラフ / 外版158-6 ※後期のみ展示
64. ジャン=フランソワ・ミレー《乳しほりの女》1854-60年 / 油彩・カンヴァス / 外洋119
65. シャルル=フランソワ・ドービニー《レ・サーブル=ドロンス》/ 油彩・板 / 外洋10
66. ギュスターヴ・クールベ《雪の中を駆ける鹿》/ 1856-57年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋170
67. ギュスターヴ・クールベ《石切り場の雪景色》/ 1870年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋11
68. ジョージ・スミス《婦人像》/ 1866年 / 油彩・板 / 外洋147 ※後期のみ展示

第4室：印象派へのいざない

69. カミーユ・コロー《ヴィル・ダヴレー》/ 1835-40年 / 油彩・カンヴァス / 外洋7
70. カミーユ・コロー《オンフルールのトゥータン農場》/ 1845年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋8
71. カミーユ・コロー《森の中の若い女》/ 1865年 / 油彩・板 / 外洋159
72. ウジェーヌ・ブーダン《トルーヴィル近郊の浜》/ 1865年頃 / 油彩・板 / 外洋172
73. カミーユ・ピサロ《ブージュヴァルのセヌ河》/ 1870年 / 油彩・カンヴァス / 外洋19
74. カミーユ・ピサロ《菜園》/ 1878年 / 油彩・カンヴァス / 外洋20
75. エドゥワール・マネ《オペラ座の仮装舞踏会》/ 1873年 / 油彩・カンヴァス / 外洋14
76. エドゥワール・マネ《自画像》/ 1878-79年 / 油彩・カンヴァス / 外洋121
77. エドガー・ドガ《レオポール・ルヴェールの肖像》/ 1874年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋162
78. アルフレッド・シスレー《森へ行く女たち》/ 1866年 / 油彩・カンヴァス / 外洋25
79. アルフレッド・シスレー《サン=メメス六月の朝》/ 1884年 / 油彩・カンヴァス / 外洋26
80. ピエール=オーギュスト・ルノワール《すわるジョルジェット・シャルパンティエ嬢》/ 1876年 / 油彩・カンヴァス / 外洋169
81. ピエール=オーギュスト・ルノワール《カーニユのテラス》/ 1905年 / 油彩・カンヴァス / 外洋33
82. ピエール=オーギュスト・ルノワール《水浴の女》/ 1907年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋136 ※前期のみ展示

-
83. ピエール=オーギュスト・ルノワール《すわる水浴の女》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / 外洋34
84. ピエール=オーギュスト・ルノワール《花のついた帽子の女》/ 1917年 / 油彩・カンヴァス / 外洋35
85. ピエール=オーギュスト・ルノワール《青帽子の女》/ 1918年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋137 ※
後期のみ展示

第5室：モネからセザンヌ、そして印象派以後

86. ポール・セザンヌ《鉢と牛乳入れ》/ 1873-77年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋28
87. ポール・セザンヌ《帽子をかぶった自画像》/ 1890-94年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋31
88. ポール・セザンヌ《サント=ヴィクトワール山とシャトー・ノワール》/ 1904-06年頃 / 油彩・カン
ヴァス / 外洋32
89. クロード・モネ《アルジャントウイユの洪水》/ 1872-73年 / 油彩・カンヴァス / 外洋21
90. クロード・モネ《アルジャントウイユ》/ 1874年 / 油彩・カンヴァス / 外洋180 ※後期のみ展示
91. クロード・モネ《雨のベリール》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / 外洋164
92. クロード・モネ《睡蓮》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / 外洋22
93. クロード・モネ《睡蓮の池》/ 1907年 / 油彩・カンヴァス / 外洋23
94. クロード・モネ《黄昏、ヴェネツィア》/ 1908年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋24 ※前期のみ展示
95. ポール・ゴーガン《馬の頭部のある静物》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / 外洋168
96. ポール・ゴーガン《ボン=タヴェン付近の風景》/ 1888年 / 油彩・カンヴァス / 外洋37
97. ポール・ゴーガン《乾草》/ 1889年 / 油彩・カンヴァス / 外洋38
98. フィンセント・ファン・ゴッホ《モンマルトルの風車》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / 外洋122
99. ポール・シニャック《コンカルノー港》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 外洋45

第6室：世紀末から20世紀へー内面をみつめる世界

100. オディロン・ルドン《神秘の語らい》/ 油彩・カンヴァス / 外洋178
101. オディロン・ルドン《供物》/ 油彩・厚紙 / 外洋179
102. ピエール・ボナール《灯下》/ 1899年 / 油彩・紙 / 外洋51
103. ピエール・ボナール《桃》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / 外洋52
104. ピエール・ボナール《ヴェルノン付近の風景》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 外洋54
105. ジョルジュ・ルオー《芝居の呼び込み》/ 1906年 / 油彩・紙 / 寄託作品
106. ジョルジュ・ルオー《郊外のキリスト》/ 1920-24年 / 油彩・紙 / 外洋142 ※後期のみ展示
107. ジョルジュ・ルオー《ピエロ》/ 1925年 / 油彩・紙 / 外洋64
108. ジョルジュ・ルオー《赤鼻のクラウン》/ 1925-29年 / 油彩・紙 / 寄託作品
109. ジョルジュ・ルオー《裁判所のキリスト》/ 1935年 / 油彩・紙 / 寄託作品
110. ジョルジュ・ルオー《エルサレム》/ 1953年 / 油彩・紙 / 寄託作品 ※前期のみ展示

第7室：日本の近代絵画1

111. 浅井忠《グレーの洗濯場》/ 1901年 / 油彩・カンヴァス / 日洋290
112. 浅井忠《縫物》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋4
113. 藤島武二《黒扇》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / 日洋26
114. 藤島武二《淡路島遠望》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋47 ※3月27日より展示
115. 藤島武二《東海旭光》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋51 ※3月25日まで展示
116. 岡田三郎助《婦人像》/ 1907年 / 油彩・カンヴァス / 日洋60
117. 山下新太郎《読書》/ 1908年 / 油彩・カンヴァス / 日洋83 ※後期のみ展示
118. 山下新太郎《供物》/ 1915年 / 油彩・カンヴァス / 日洋84
119. 青木繁《天平時代》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋91 ※前期のみ展示

120. 青木繁《海景(布良の海)》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋100

第8室：日本の近代絵画2

121. 川上凉花《麦秋》/ 1919年 / 油彩・カンヴァス / 日洋326 ※後期のみ展示
122. 小出栖重《帽子をかぶった自画像》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / 日洋137
123. 小出栖重《横たわる裸身》/ 1930年 / 油彩・カンヴァス / 日洋140 ※前期のみ展示
124. 安井曾太郎《薔薇》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋143
125. 安井曾太郎《F夫人像》/ 1939年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
126. 安井曾太郎《安倍能成君像》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋217
127. 梅原龍三郎《ナポリよりソレントを望む》/ 1921年 / 油彩・カンヴァス / 日洋271
128. 梅原龍三郎《椿》/ 1944年 / 油彩, 岩絵具・紙 / 日洋272
129. 梅原龍三郎《ノートルダム》/ 1965年 / 油彩・金箔押しした羊皮紙 / 日洋191
130. 国吉康雄《夢》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 日洋304
131. 国吉康雄《横たわる女》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋158 ※前期のみ展示
132. 岸田劉生《街道(銀座風景)》/ 1911年頃 / 油彩・カンヴァス / 前期は第7室に展示 / 日洋228
133. 岸田劉生《冬瓜図》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品 ※後期のみ展示
134. 岡鹿之助《雪の発電所》/ 1956年 / 油彩・カンヴァス / 日洋297
135. 岡鹿之助《望楼》/ 1960年 / 油彩・カンヴァス / 日洋299 ※3月27日より展示
136. 関根正二《子供》/ 1919年 / 油彩・カンヴァス / 日洋178 ※3月25日まで展示
137. 牛島憲之《タンクの道》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋212

第9室：20世紀のさまざまな表現1 マティスとフォーヴィスム〜エコール・ド・パリ

138. アンリ・マティス《コリウール》/ 1905年 / 油彩・厚紙 / 外洋141
139. アンリ・マティス《縞ジャケット》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / 外洋57
140. アンリ・マティス《両腕をあげたオダリスク》/ 1921年 / 油彩・カンヴァスボード / 外洋59
141. アンリ・マティス《樹間の憩い》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
142. アンリ・マティス《ルー川のほとり》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 外洋117
143. アンリ・マティス《オダリスク》/ 1926年 / 油彩・カンヴァス / 外洋60
144. アンリ・マティス《石膏のある静物》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
145. アンリ・マティス《青い胴着の女》/ 1935年 / 油彩・カンヴァス / 外洋62
146. モーリス・ド・ヴラマンク《運河船》/ 1905-06年 / 油彩・カンヴァス / 外洋69
147. ケース・ヴァン・ドンゲン《シャンゼリゼ大通り》/ 1924-25年 / 油彩・カンヴァス / 外洋87
148. アンドレ・ドラン《自画像》/ 油彩・カンヴァス / 寄託作品
149. モーリス・ユトリロ《サン＝ドニ運河》/ 1906-08年 / 油彩・紙 / 外洋77
150. マリー・ローランサン《二人の少女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 外洋72
151. マリー・ローランサン《女と犬》/ 1923年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋186
152. マリー・ローランサン《手鏡を持つ女》/ 1937年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋180 ※前期のみ展示
153. アメデオ・モディリアーニ《若い農夫》/ 1918年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋115 ※後期のみ展示
154. 藤田嗣治《猫のいる静物》/ 1939-40年 / 油彩・カンヴァス / 日洋131 ※後期のみ展示
155. 藤田嗣治《ドルドーニュの家》/ 1940年 / 油彩・カンヴァス / 日洋132 ※前期のみ展示
156. マルク・シャガール《ヴァンスの新月》/ 1955-56年 / グワッシュ・紙 / 外洋90 ※前期のみ展示
157. カイム・スーティン《大きな樹のある南仏風景》/ 1924年 / 油彩・紙 / 外洋114
158. 佐伯祐三《テラスの広告》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 日洋174

第10室：20世紀のさまざまな表現2 ピカソとキュビズム～シュルレアリスム

- 159. アンリ・ルソー 《イヴリー河岸》 / 1907年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋43
- 160. アンリ・ルソー 《牧場》 / 1910年 / 油彩・カンヴァス / 外洋42
- 161. ラウル・デュフィ 《オーケストラ》 / 1942年 / 油彩・カンヴァス / 外洋123
- 162. パブロ・ピカソ 《道化師》 / 1905年 / ブロンズ / 外彫61
- 163. パブロ・ピカソ 《ブルゴーニュのマール瓶, グラス, 新聞紙》 / 1913年 / 油彩, 砂, 新聞紙・カンヴァス / 外洋173
- 164. パブロ・ピカソ 《生木と枯木のある風景》 / 1919年 / 油彩・カンヴァス / 外洋143 ※後期のみ展示
- 165. パブロ・ピカソ 《カップとスプーン》 / 1922年 / 油彩・カンヴァス / 外洋83
- 166. パブロ・ピカソ 《馬》 / 1923年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
- 167. パブロ・ピカソ 《女の顔》 / 1923年 / 油彩, 砂・カンヴァス / 外洋84
- 168. パブロ・ピカソ 《腕を組んですわるサルタンバンク》 / 1923年 / 油彩・カンヴァス / 外洋160
- 169. パブロ・ピカソ 《茄子》 / 1946年 / 油彩, グワッシュ・紙 / 外洋85 ※前期のみ展示
- 170. パブロ・ピカソ 《画家とモデル》 / 1963年 / 油彩・カンヴァス / 外洋144
- 171. ジョルジュ・ブラック 《梨と桃》 / 1924年 / 油彩・カンヴァス / 外洋86
- 172. ジョルジョ・デ・キリコ 《吟遊詩人》 / 油彩・カンヴァス / 外洋91 ※後期のみ展示
- 173. ジョアン・ミロ 《絵画》 / 1927年 / 油彩・カンヴァス / 外洋187
- 174. 古賀春江 《涯しなき逃避》 / 1930年 / 油彩・カンヴァス / 日洋166
- 175. 古賀春江 《感傷の静脈》 / 1931年 / 油彩・カンヴァス / 日洋165 ※前期のみ展示

第2室：抽象への道

- 176. ピート・モンドリアン 《砂丘》 / 1909年 / 油彩, 鉛筆・厚紙 / 外洋203
- 177. パウル・クレー 《島》 / 1932年 / 油彩, 砂を混ぜた石膏・板 / 外洋202
- 178. ハンス・ホフマン 《Push and Pull II》 / 1950年 / 油彩・カンヴァス / 外洋211
- 179. ジャン・フォートリエ 《人質の頭部》 / 1945年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / 外洋188
- 180. ジャン・フォートリエ 《旋回する線》 / 1963年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / 外洋189
- 181. アルベルト・ジャコメッティ 《ディエゴの胸像》 / 1954-55年 / ブロンズ / 外彫75
- 182. ジャン・デュビュッフ 《スカーフを巻くエディット・ボワソナス》 / 1947年 / 油彩・紙 / 外洋192
- 183. ジャン・デュビュッフ 《暴動》 / 1961年 / 油彩・カンヴァス / 外洋193
- 184. 猪熊弦一郎 《Sky Triangle》 / 1968年 / 油彩・カンヴァス / 日洋482
- 185. バーバラ・ヘップワース 《翼のある人物 I》 / 1957年 / 真鍮, 鉄線 / 外彫93
- 186. 斎藤義重 《作品》 / 1961年 / 油彩・合板 / 日洋524
- 187. 斎藤義重 《作品》 / 1965年 / 油彩・合板 / 日洋527
- 188. ジャクソン・ポロック 《Number 2, 1951》 / 1951年 / 油彩・カンヴァス / 外洋209
- 189. モーゲンス・アンデルセン 《コンポジション》 / 1977年 / 油彩・カンヴァス / 外洋155
- 190. ピエール・スラーヂュ 《絵画, 26 May 1969》 / 1969年 / 油彩・カンヴァス / 外洋210
- 191. 菅井汲 《OKA》 / 1961年 / 油彩・カンヴァス / 日洋524
- 192. ザオ・ウーキー 《15.01.61》 / 1961年 / 油彩・カンヴァス / 外洋103
- 193. ザオ・ウーキー 《24.02.70》 / 1970年 / 油彩・カンヴァス / 外洋156
- 194. ザオ・ウーキー 《07.06.85》 / 1985年 / 油彩・カンヴァス / 外洋197
- 195. 田淵安一 《孤独の山 Montagne Solitaire》 / 1956年 / 油彩・カンヴァス / 日洋525
- 196. ピエール・アレシンスキー 《田園の一隅》 / 1951年 / 油彩・カンヴァス / 外洋99
- 197. 堂本尚郎 《連続の溶解9》 / 1964年 / 油彩, アクリル・カンヴァス / 日洋530

広報記録：

新聞・雑誌：

[前期]

島田紀夫「おしえてアートのいろは 認められなかった『印象派』」『朝日新聞』2007年1月11日夕刊

編集部「見逃せない美術展『じっと見る—印象派から現代まで』」『日経おとなのOFF』3月号(通巻66号),
2007年2月1日, p.93

編集部「じっと見る—印象派から現代まで 館蔵の至宝を一堂に」『新美術新聞』2007年3月11日

[後期]

秋山亮太「美の履歴書《グレーの洗濯場》」『朝日新聞』2007年6月13日夕刊

ブリヂストン美術館コレクション展

2007年12月1日(土)－2008年1月27日(日)

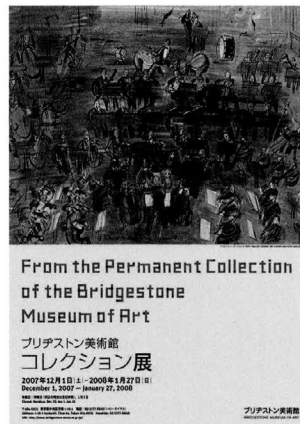
会場：全館

主催：石橋財団ブリヂストン美術館

概要：日本と西洋の近代美術に加えて、今後、より新しい時代の美術も紹介していくブリヂストン美術館のコレクションの特色を反映させた展示。

出品内容：絵画129点、彫刻37点、陶器14点 計180点

入場者総数：21,495人(1日平均439人)



展覧会ポスター

出品目録：

エントランス

1. クリスチャン・ダニエル・ラウホ《勝利の女神》/ 大理石 / 外彫81

階段

2. アリストイド・マイヨール《欲望》/ 1905-08年 / ブロンズ / 外彫66

彫刻ギャラリー1

3. オーギュスト・ロダン《立てるフォーネス》/ 1884年頃 / 大理石 / 外彫40
4. オーギュスト・ロダン《考える人》/ 1902年頃 / ブロンズ / 外彫39
5. オーギュスト・ロダン《青銅時代》/ 1904年 / ブロンズ / 外彫38
6. エミール=アントワヌ・ブールデル《風の中のベートーヴェン》/ 1904-08年 / ブロンズ / 外彫43
7. エミール=アントワヌ・ブールデル《ベネロープ》/ 1909年 / ブロンズ / 外彫45
8. エミール=アントワヌ・ブールデル《弓をひくヘラクレス》/ 1909年 / ブロンズ / 外彫46
9. シャルル・デスピオ《アントワネットの顔》/ 1918年 / ブロンズ / 外彫48
10. シャルル・デスピオ《クラ=クラ》/ 1919年 / ブロンズ / 外彫49

彫刻ギャラリー2

11. コンスタンティン・ブランクーシ《接吻》/ 1907-10年 / 石膏 / 外彫100
12. アレキサンダー・アーキペンコ《ゴンドラの船頭》/ 1914年 / ブロンズ / 外彫86
13. オシップ・ザツキン《母子》/ 1919年 / 着色されたセメント / 外彫54
14. オシップ・ザツキン《三美神》/ 1950年 / ブロンズ / 外彫56
15. オシップ・ザツキン《ボモナ(トルソ)》/ 1951年 / 黒檀 / 外彫55
16. ヘンリー・ムア《横たわる人体》/ 1976年 / ブロンズ / 外彫89
17. マリノ・マリーニ《騎手》/ 1952年 / ブロンズ / 外彫70

-
18. ペリクレ・ファッツイーニ《爽風(B)》/ 1972-73年 / ブロンズ / 外彫88

第3室：古代美術

19. シュメール《女の胸像》/ 紀元前24世紀 / 閃緑石 / 外彫1
20. パルミユラ《人物像》/ 1-2世紀 / 石灰石 / 外彫94
21. エジプト《セクメト神像》/ 紀元前14世紀 / 黒花崗岩 / 外彫64
22. エジプト レリーフ断片《柘榴と葡萄図》/ アマルナ時代(紀元前1360年頃) / 石灰石 / 外彫95
23. エジプト レリーフ断片《アヌビス神礼拝図》/ 紀元前13世紀 / 砂岩 / 外彫7
24. エジプト レリーフ断片《神牛》/ 紀元前1300-1200年 / 石 / 外彫8
25. エジプト《彩色木棺》/ 紀元前13世紀 / 木 / 外彫67
26. エジプト《ホルス神浮彫》/ 紀元前1000-350年 / 大理石 / 外彫5
27. エジプト《聖猫》/ 紀元前950-660年 / ブロンズ / 外彫90
28. ギリシア《獅子頭部》/ 紀元前5世紀 / 大理石 / 外彫13
29. ギリシア《哲人の顔》/ 紀元前4世紀 / 大理石 / 外彫15
30. ギリシア《ヴィーナス》/ ヘレニスティック期(紀元前323-30年) / 大理石 / 外彫14
31. グレコ=ローマン《アテナ頭部》/ 大理石 / 外彫79
32. ギリシア コリントス球形アリュバロス「ルクス・グループ」(?)《鷺と鶏図》/ 紀元前610-590年 / 陶器182
33. ギリシア アッティカ黒絵式頸部アンフォラ「ブーローニュ441の画家」《ヘラクレスとケルベロス図》/ 紀元前520-510年 / 陶器197
34. ギリシア アッティカ黒絵式オイノコエ《ディオニュソスとマイナス図》/ 紀元前500年頃 / 陶器76
35. ギリシア アッティカ黒絵式レキュトス《ディオニュソス, サテュロスとマイナス図》/ 紀元前490-480年 / 陶器67
36. ギリシア アッティカ黒絵式レキュトス《ディオニュソスとアリアドネ図》/ 紀元前490-480年 / 陶器66
37. ギリシア アッティカ黒絵式レキュトス《ディオニュソスとマイナス図》/ 紀元前490-480年 / 陶器68
38. ギリシア アッティカ赤絵式キュリクス《サテュロス図》/ 紀元前5世紀中頃 / 陶器89
39. ギリシア アッティカ白地レキュトス《墓参図》/ 紀元前425-400年頃 / 陶器71
40. ギリシア アッティカ赤絵式レベス・ガミコス《ニケと女性図》/ 紀元前400-375年頃 / 陶器91
41. ギリシア カンパニア赤像式魚文皿 / 紀元前375-350年頃 / 陶器42
42. ギリシア カンパニア赤絵式ヒュドリア「ラゲットの画家」《ディオスクーロイ図》/ 紀元前350年頃 / 陶器87
43. ギリシア カンパニア赤絵式ヒュドリア《エロス図》/ 紀元前350-325年頃 / 陶器88
44. ギリシア アブリア赤絵式柱形把手クラテル《男女図》/ 紀元前330年頃 / 陶器92
45. エトルリア 建築装飾フリーズ部分《泉水に向かう二頭の馬》/ 紀元前550-540年 / 彩色テラコッタ / 外彫92
46. ローマ《ヴィーナスの頭部》/ 大理石 / 外彫23
47. ローマ モザイク断片《牧神頭部》/ 1世紀 / 陶器114
48. ヘルクラネウム 壁画断片《ディオニュソス図》/ 1世紀 / フレスコ / 外洋2

第1室：伝統から近代へ

49. 三連祭壇画《デシス図》/ 板絵 / 外洋126
50. レンブラント・ファン・レイン《聖書あるいは物語に取材した夜の情景》/ 1626-28年 / 油彩・銅板 / 外洋5
51. アントニー・ヤンスゾーン・ファン・デル・クロース《レイスウェイク城》/ 油彩・板 / 外洋4

-
52. ジョージ・スミス《婦人像》/ 1866年 / 油彩・板 / 外洋147
53. トーマス・ゲインズバラ《婦人像》/ 油彩・カンヴァス / 外洋176
54. ジャン=オーギュスト=ドミニク・アングル《若い女の頭部》/ 油彩・カンヴァス / 外洋161
55. グレゴリオ・ラザリーニ《黄金の子牛の礼拝》/ 1700-07年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋127
56. オノレ・ドーミエ《山中のドン・キホーテ》/ 1850年頃 / 油彩・板 / 外洋171
57. オノレ・ドーミエ《ラタポワール》/ 1850年頃 / ブロンズ / 外彫91
58. ジャン=フランソワ・ミレー《乳しほりの女》/ 1854-60年 / 油彩・カンヴァス / 外洋119
59. シャルル=フランソワ・ドービニー《レ・サール=ドロンヌ》/ 油彩・板 / 外洋10
60. ギュスターヴ・クールベ《雪の中を駆ける鹿》/ 1856-57年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋170
61. ギュスターヴ・クールベ《石切り場の雪景色》/ 1870年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋11

第4室：印象派へのいざない

62. カミュー・コロエ《ヴィル・ダヴレー》/ 1835-40年 / 油彩・カンヴァス / 外洋7
63. カミュー・コロエ《オンフルールのトゥータン農場》/ 1845年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋8
64. カミュー・コロエ《森の中の若い女》/ 1865年 / 油彩・板 / 外洋159
65. ウジェーヌ・ブーダン《トルーヴィル近郊の浜》/ 1865年頃 / 油彩・板 / 外洋172
66. カミュー・ピサロ《ブージヴァルのセヌ河》/ 1870年 / 油彩・カンヴァス / 外洋19
67. カミュー・ピサロ《菜園》/ 1878年 / 油彩・カンヴァス / 外洋20
68. エドゥワール・マネ《オペラ座の仮装舞踏会》/ 1873年 / 油彩・カンヴァス / 外洋14
69. エドゥワール・マネ《自画像》/ 1878-79年 / 油彩・カンヴァス / 外洋121
70. エドガー・ドガ《レオポール・ルヴェールの肖像》/ 1874年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋162
71. アルフレッド・シスレー《森へ行く女たち》/ 1866年 / 油彩・カンヴァス / 外洋25
72. アルフレッド・シスレー《サン=マメス六月の朝》/ 1884年 / 油彩・カンヴァス / 外洋26
73. ピエール=オーギュスト・ルノワール《すわるジョルジェット・シャルパンティエ嬢》/ 1876年 / 油彩・カンヴァス / 外洋169
74. ピエール=オーギュスト・ルノワール《カーニユのテラス》/ 1905年 / 油彩・カンヴァス / 外洋33
75. ピエール=オーギュスト・ルノワール《すわる水浴の女》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / 外洋34
76. ピエール=オーギュスト・ルノワール《花のついた帽子の女》/ 1917年 / 油彩・カンヴァス / 外洋35

第5室：モネからセザンヌ、そして印象派以後

77. ポール・セザンヌ《鉢と牛乳入れ》/ 1873-77年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋28
78. ポール・セザンヌ《帽子をかぶった自画像》/ 1890-94年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋31
79. ポール・セザンヌ《サント=ヴィクトワール山とシャトー・ノワール》/ 1904-06年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋32
80. クロード・モネ《アルジャントウイユの洪水》/ 1872-73年 / 油彩・カンヴァス / 外洋21
81. クロード・モネ《雨のベリール》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / 外洋164
82. クロード・モネ《睡蓮》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / 外洋22
83. クロード・モネ《睡蓮の池》/ 1907年 / 油彩・カンヴァス / 外洋23
84. クロード・モネ《黄昏、ヴェネツィア》/ 1908年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋24
85. ポール・ゴーガン《馬の頭部のある静物》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / 外洋168
86. ポール・ゴーガン《ボン=タヴェン付近の風景》/ 1888年 / 油彩・カンヴァス / 外洋37
87. ポール・ゴーガン《乾草》/ 1889年 / 油彩・カンヴァス / 外洋38
88. フィンセント・ファン・ゴッホ《モンマルトルの風車》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / 外洋122
89. ポール・シニャック《コンカルノー港》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 外洋45

第6室：世紀末から20世紀へー内面をみつめる世界

- 90. オディロン・ルドン《神秘の語らい》/ 油彩・カンヴァス / 外洋178
- 91. オディロン・ルドン《供物》/ 油彩・厚紙 / 外洋179
- 92. ピエール・ボナール《灯下》/ 1899年 / 油彩・紙 / 外洋51
- 93. ピエール・ボナール《桃》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / 外洋52
- 94. ピエール・ボナール《ヴェルノン付近の風景》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 外洋54
- 95. ジョルジュ・ルオー《芝居の呼び込み》/ 1906年 / 油彩・紙 / 寄託作品
- 96. ジョルジュ・ルオー《郊外のキリスト》/ 1920-24年 / 油彩・紙 / 外洋142
- 97. ジョルジュ・ルオー《ピエロ》/ 1925年 / 油彩・紙 / 外洋64
- 98. ジョルジュ・ルオー《赤鼻のクラウン》/ 1925-29年 / 油彩・紙 / 寄託作品
- 99. ジョルジュ・ルオー《裁判所のキリスト》/ 1935年 / 油彩・紙 / 寄託作品

第7室：日本の近代絵画1

- 100. 浅井忠《縫物》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋4
- 101. 安井曾太郎《薔薇》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋143
- 102. 安井曾太郎《F夫人像》/ 1939年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
- 103. 安井曾太郎《琴（『文藝春秋』1954年1月号表紙絵）》/ 1953年 / 油彩・紙 / 寄託作品
- 104. 安井曾太郎《庭（『文藝春秋』1955年1月号表紙絵）》/ 1954年 / 油彩・紙 / 寄託作品
- 105. 安井曾太郎《画室の窓（『文藝春秋』1955年12月号表紙絵）》/ 1955年 / 油彩, コラージュ・紙 / 寄託作品
- 106. 安井曾太郎《安倍能成君像》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋217
- 107. 梅原龍三郎《ナポリよりソレントを望む》/ 1921年 / 油彩・カンヴァス / 日洋271
- 108. 梅原龍三郎《ノートルダム》/ 1965年 / 油彩・金箔押しした羊皮紙 / 日洋191

第8室：日本の近代絵画2

- 109. 黒田清輝《ブレハの少女》/ 1891年 / 油彩・カンヴァス / 日洋8
- 110. 黒田清輝《杣》/ 油彩・カンヴァス / 日洋10
- 111. 藤島武二《黒扇》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / 日洋26
- 112. 藤島武二《糸杉(ヴィラ・ファルコニエリ)》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / 日洋27
- 113. 藤島武二《東海旭光》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋31
- 114. 岡田三郎助《臥裸婦》/ 1901年 / 油彩・カンヴァス / 日洋230
- 115. 岡田三郎助《婦人像》/ 1907年 / 油彩・カンヴァス / 日洋60
- 116. 青木繁《海景（布良の海）》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋100
- 117. 青木繁《天平時代》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋91
- 118. 小出栖重《帽子をかぶった自画像》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / 日洋137
- 119. 岸田劉生《街道（銀座風景）》/ 1911年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋228
- 120. 岡鹿之助《雪の発電所》/ 1956 / 油彩・カンヴァス / 日洋297
- 121. 岡鹿之助《望楼》/ 1960年 / 油彩・カンヴァス / 日洋299
- 122. 牛島憲之《タンクの道》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋212

第9室：マティスとフォーヴィスム～エコール・ド・パリ

- 123. アンリ・マティス《画室の裸婦》/ 1899年 / 油彩・紙 / 外洋56
- 124. アンリ・マティス《コリウール》/ 1905年 / 油彩・厚紙 / 外洋141
- 125. アンリ・マティス《縞ジャケット》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / 外洋57
- 126. アンリ・マティス《両腕をあげたオダリスク》/ 1921年 / 油彩・カンヴァスボード / 外洋59

-
127. アンリ・マティス《樹間の憩い》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
 128. アンリ・マティス《ルー川のほとり》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 外洋117
 129. アンリ・マティス《石膏のある静物》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
 130. アンリ・マティス《青い胴着の女》/ 1935年 / 油彩・カンヴァス / 外洋62
 131. モーリス・ド・ヴラマンク《運河船》/ 1905-06年 / 油彩 / カンヴァス / 外洋69
 132. ケース・ヴァン・ドンゲン《シャンゼリゼ大通り》/ 1924-25年 / 油彩・カンヴァス / 外洋87
 133. アンドレ・ドラン《自画像》/ 油彩・カンヴァス / 寄託作品
 134. モーリス・ユトリロ《サン＝ドニ運河》/ 1906-08年 / 油彩・紙 / 外洋77
 135. マリー・ローランサン《二人の少女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 外洋72
 136. マリー・ローランサン《女と犬》/ 1923年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋186
 137. アメデオ・モディリアーニ《若い農夫》/ 1918年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋115
 138. 藤田嗣治《猫のいる静物》/ 1939-40年 / 油彩・カンヴァス / 日洋131
 139. カイム・スーティン《大きな樹のある南仏風景》/ 1924年 / 油彩・紙 / 外洋114
 140. 佐伯祐三《テラスの広告》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 日洋174

第10室：ピカソ〜キュビスムの周辺

141. アンリ・ルソー《イヴリー河岸》/ 1907年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋43
142. アンリ・ルソー《牧場》/ 1910年 / 油彩・カンヴァス / 外洋42
143. ラウル・デュフィ《静物》/ 1915-20年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋73
144. ラウル・デュフィ《オーケストラ》/ 1942年 / 油彩・カンヴァス / 外洋123
145. ラウル・デュフィ《ボワレの服を着たモデルたち, 1923年の競馬場》/ 1943年 / 油彩・カンヴァス / 外洋184
146. パブロ・ピカソ《道化師》/ 1905年 / ブロンズ / 外彫61
147. パブロ・ピカソ《ブルゴーニュのマール瓶, グラス, 新聞紙》/ 1913年 / 油彩, 砂, 新聞紙・カンヴァス / 外洋173
148. パブロ・ピカソ《生木と枯木のある風景》/ 1919年 / 油彩・カンヴァス / 外洋143
149. パブロ・ピカソ《カップとスプーン》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 外洋83
150. パブロ・ピカソ《女の顔》/ 1923年 / 油彩, 砂・カンヴァス / 外洋84
151. パブロ・ピカソ《腕を組んですわるサルタンバンク》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 外洋160
152. パブロ・ピカソ《馬》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
153. パブロ・ピカソ《茄子》/ 1946年 / 油彩, グワッシュ・紙 / 外洋85
154. パブロ・ピカソ《画家とモデル》/ 1963年 / 油彩・カンヴァス / 外洋144
155. ジョルジュ・ブラック《梨と桃》/ 1924年 / 油彩・板 / 外洋86

第2室：20世紀美術のさまざまな動き シュルレアリスム〜抽象美術

156. ピート・モンドリアン《砂丘》/ 1912年 / 油彩, 鉛筆・厚紙 / 外洋203
 157. パウル・クレー《島》/ 1932年 / 油彩, 砂を混ぜた石膏・板 / 外洋202
 158. ハンス・ホフマン《Push and Pull II》/ 1950年 / 油彩・カンヴァス / 外洋211
 159. ジョルジョ・デ・キリコ《吟遊詩人》/ 油彩・カンヴァス / 外洋91
 160. ジョアン・ミロ《絵画》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 外洋187
 161. ジャン・フォートリエ《人質の頭部》/ 1945年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / 外洋188
 162. ジャン・フォートリエ《旋回する線》/ 1963年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / 外洋189
 163. ジャン・デュビュッフェ《スカーフを巻くエディット・ボワソナス》/ 1947年 / 油彩・紙 / 外洋192
 164. ジャン・デュビュッフェ《暴動》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / 外洋193
 165. アルベルト・ジャコメッティ《ディエゴの胸像》/ 1954-55年 / ブロンズ / 外彫75
-

-
166. 猪熊弦一郎《Sky Triangle》/ 1968年 / 油彩・カンヴァス / 日洋482
 167. バーバラ・ハップワース《翼のある人物 I》/ 1957年 / 真鍮, 鉄線 / 外彫93
 168. 斎藤義重《作品》/ 1961年 / 油彩・合板 / 日洋524
 169. 斎藤義重《作品》/ 1965年 / 油彩・合板 / 日洋527
 170. セルジュ・ポリアコフ《コンポジション》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / 外洋215
 171. ジャクソン・ポロック《Number 2, 1951》/ 1951年 / 油彩・カンヴァス / 外洋209
 172. 杉全直《袋を持った空間》/ 1963年 / 油彩・カンヴァス / 日洋541
 173. ピエール・スーラージュ《絵画, 26 May 1969》/ 1969年 / 油彩・カンヴァス / 外洋210
 174. 菅井汲《OKA》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / 日洋526
 175. ザオ・ウーキー《21-Sep-50》/ 1950年 / 油彩・カンヴァスボード / 外洋194
 176. ザオ・ウーキー《15.01.61》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / 外洋103
 177. ザオ・ウーキー《07.06.85》/ 1985年 / 油彩・カンヴァス / 外洋197
 178. 田淵安一《孤独の山 Montagne Solitaire》/ 1956年 / 油彩・カンヴァス / 日洋525
 179. ピエール・アレシンスキー《田園の一隅》/ 1951年 / 油彩・カンヴァス / 外洋99
 180. 堂本尚郎《連続の溶解9》/ 1964年 / 油彩, アクリル・カンヴァス / 日洋530

〈特別展〉

退屈な風景 松本英一郎展

2007年9月24日(月・振休)－11月25日(日)

会場：本館 第1室－第6室

主催：石橋財団石橋美術館 / 西日本新聞社

後援：久留米市 / 久留米市教育委員会 / 財団法人久留米文化振興会

概要：久留米生まれの洋画家・松本英一郎(1932-2001)の回顧展。初期から晩年までの油彩画49点と水彩画16件(うち1件は2点もの、1件は73点もののシリーズ)の計65件(147点)を、5つの時代の章だてに「水彩画」の1章を加えた6章で構成展示した。

出品内容：松本英一郎の油彩画49点、水彩画16件(98点) 計65件(147点)

入場者総数：7,214人(1日平均129人)

展覧会チラシ

出品目録：

第1章 青年期の模索 1950-1964

1. 《風景》 / 1950年頃 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
2. 《風景(高良山麓)》 / 1952年頃 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
3. 《裸婦》 / 1957年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
4. 《敗走者》 / 1958年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
5. 《さらされた牛》 / 1959年 / 油彩・板 / 個人蔵
6. 《土牛》 / 1961年 / 油彩・板 / 府中市美術館
7. 《西方位》 / 1962年 / 油彩・カンヴァス(板貼付) / 個人蔵
8. 《祭典司(後)》 / 1964年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵

第2章 平均的肥満体 1965-1970

9. 《肥満体Ⅱ》 / 1965年 / 油彩・カンヴァス / 府中市美術館
10. 《平均的肥満体02》 / 1966年 / 油彩・カンヴァス / 福岡市美術館
11. 《平均的肥満体 No.5》 / 1966年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
12. 《平均的肥満体 No.9-J》 / 1967年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
13. 《平均的肥満体 No.13》 / 1967年 / 油彩・カンヴァス / 青梅市立美術館
14. 《順風》 / 1969年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
15. 《満帆2》 / 1969年 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
16. 《満帆》 / 1970年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
17. 《満帆・炎上》 / 1970年 / 油彩・カンヴァス / 都城市立美術館

第3章 退屈な風景 1971-1986

18. 《退屈な風景 No.2》 / 1971年 / 油彩・カンヴァス / 熊本県立美術館
19. 《退屈な風景02》 / 1972年 / 油彩・カンヴァス / 多摩美術大学美術館

-
20. 《退屈な風景》 / 1973年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
 21. 《退屈な風景 茶畑》 / 1974年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
 22. 《退屈な風景》 / 1975年 / 油彩・カンヴァス / 東京都現代美術館
 23. 《風景》 / 1978年 / 油彩・カンヴァス / 東京都現代美術館
 24. 《退屈な風景 No.19(浮遊体)》 / 1979年 / 油彩・カンヴァス / 都城市立美術館
 25. 《風景 No.4》 / 1981年 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
 26. 《よう壁のある風景》 / 1982年 / 油彩・カンヴァス / 福岡市美術館
 27. 《退屈な風景》 / 1985年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
 28. 《頂上の風景85》 / 1985年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵

第4章 さくら・うし 1987-1996

29. 《頂上の風景》 / 1987年 / 油彩・カンヴァス / 府中市美術館
30. 《さくら 退屈な風景》 / 1987年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
31. 《さくら-ヒロシマ》 / 1988年 / 油彩・カンヴァス / 広島市現代美術館
32. 《さくら》 / 1988年 / 油彩・カンヴァス / 筑邦銀行
33. 《さくら・うし》 / 1989年・油彩・カンヴァス / 個人蔵
34. 《さくら'89-10》 / 1989年 / 油彩・カンヴァス / 京都国立近代美術館
35. 《さくら・うし》 / 1990年 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
36. 《さくら・うし》 / 1991年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
37. 《さくら・うし・92》 / 1992年 / 油彩・カンヴァス / 都城市立美術館
38. 《さくら・うし93-9》 / 1993年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
39. 《さくら・うし95-1》 / 1995年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
40. 《さくら・うし95-2》 / 1995年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
41. 《花と雲と牛》 / 1996年 / 油彩・カンヴァス / 熊本県立美術館

第5章 花と雲と牛・花あかり 1997-2001

42. 《花と雲と牛》 / 1997年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
43. 《塚の夕暮》 / 1997年 / 油彩・カンヴァス / 熊本県立美術館
44. 《花と雲と牛》 / 1998年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
45. 《花と雲とうし》 / 1998年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
46. 《花と雲と牛》 / 1998年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
47. 《花と雲と牛2》 / 2000年 / 油彩・カンヴァス / 多摩美術大学美術館
48. 《花あかり》 / 2001年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
49. 《花と雲と牛》 / 2001年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵

第6章 水彩画

- 50-1. 《頂上の風景(鍮水風景)'85-11月》 / 1985年 / ペン, インク, 水彩・紙 / 青梅市立美術館
 - 50-2. 《頂上の風景(鍮水風景)'85-12月2日(1)》 / 1985年 / ペン, インク, 水彩・紙 / 青梅市立美術館
 - 50-3. 《頂上の風景(鍮水風景)'85-12月2日(2)》 / 1985年 / ペン, インク, 水彩・紙 / 青梅市立美術館
 - 50-4. 《頂上の風景(鍮水風景)'86-4月》 / 1986年 / ペン, インク, 水彩・紙 / 青梅市立美術館
 - 50-5. 《頂上の風景(鍮水風景)'86-5月16日》 / 1986年 / ペン, インク, 水彩・紙 / 青梅市立美術館
 - 50-6. 《頂上の風景(鍮水風景)'86-5月20日(雨)》 / 1986年 / ペン, インク, 水彩・紙 / 青梅市立美術館
 - 50-7. 《頂上の風景(鍮水風景)'86-7月10日~10月30日》 / 1986年 / ペン, インク, 水彩・紙 / 青梅市立美術館
 - 50-8. 《頂上の風景(鍮水風景)'87-10月》 / 1987年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 青梅市立美術館
-

-
- 50-9. 《頂上の風景(鍮水風景)'88-5月16日》 / 1988年 / ペン, インク, 水彩・紙 / 青梅市立美術館
50-10. 《頂上の風景(鍮水風景)'88-5月18日(土煙起つ)》 / 1988年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 青梅市立美術館
50-11. 《頂上の風景(鍮水風景)'89-1月25日》 / 1989年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 青梅市立美術館
51-1. 《定点スケッチ69》 / 1981年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-2. 《定点スケッチ1》 / 1985年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-3. 《定点スケッチ2》 / 1985年 / 鉛筆, ペン, インク, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-4. 《定点スケッチ3》 / 1985年 / ペン, インク, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-5. 《定点スケッチ4》 / 1985年 / ペン, インク, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-6. 《定点スケッチ5》 / 1987年 / 鉛筆, ペン, インク, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-7. 《定点スケッチ6》 / 1988年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-8. 《定点スケッチ7》 / 1988年 / 鉛筆, 水彩・紙(厚紙) / 多摩美術大学美術館
51-9. 《定点スケッチ8》 / 1988年 / 鉛筆, ペン, インク, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-10. 《定点スケッチ9》 / 1988年 / 鉛筆, ペン, インク, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-11. 《定点スケッチ10》 / 1988年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-12. 《定点スケッチ11》 / 1989年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-13. 《定点スケッチ12》 / 1989年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-14. 《定点スケッチ13》 / 1990年 / パステル, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-15. 《定点スケッチ14》 / 1990年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-16. 《定点スケッチ15》 / 1990年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-17. 《定点スケッチ16》 / 1990年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-18. 《定点スケッチ17》 / 1990年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-19. 《定点スケッチ18》 / 1990年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-20. 《定点スケッチ19》 / 1990年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-21. 《定点スケッチ20》 / 1990年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-22. 《定点スケッチ21》 / 1990年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-23. 《定点スケッチ70》 / 1990年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-24. 《定点スケッチ71》 / 1990年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-25. 《定点スケッチ22》 / 1991年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-26. 《定点スケッチ23》 / 1991年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-27. 《定点スケッチ24》 / 1991年 / 鉛筆, 水彩・紙(厚紙貼付) / 多摩美術大学美術館
51-28. 《定点スケッチ25》 / 1991年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-29. 《定点スケッチ26》 / 1991年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-30. 《定点スケッチ27》 / 1991年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-31. 《定点スケッチ28》 / 1991年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-32. 《定点スケッチ29》 / 1991年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-33. 《定点スケッチ30》 / 1991年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-34. 《定点スケッチ31》 / 1991年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-35. 《定点スケッチ32》 / 1991年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-36. 《定点スケッチ33》 / 1991年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-37. 《定点スケッチ34》 / 1991年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-38. 《定点スケッチ35》 / 1991年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-39. 《定点スケッチ36》 / 1991年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-40. 《定点スケッチ37》 / 1991年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-41. 《定点スケッチ38》 / 1991年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-42. 《定点スケッチ39》 / 1991年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
-

-
- 51-43. 《定点スケッチ40》 / 1991年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-44. 《定点スケッチ41》 / 1991年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-45. 《定点スケッチ42》 / 1991年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-46. 《定点スケッチ43》 / 1991年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-47. 《定点スケッチ44》 / 1992年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-48. 《定点スケッチ45》 / 1992年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-49. 《定点スケッチ46》 / 1992年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-50. 《定点スケッチ47》 / 1992年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-51. 《定点スケッチ48》 / 1992年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-52. 《定点スケッチ49》 / 1992年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-53. 《定点スケッチ50》 / 1992年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-54. 《定点スケッチ51》 / 1992年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-55. 《定点スケッチ52》 / 1992年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-56. 《定点スケッチ53》 / 1992年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-57. 《定点スケッチ54》 / 1992年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-58. 《定点スケッチ55》 / 1992年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-59. 《定点スケッチ56》 / 1992年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-60. 《定点スケッチ57》 / 1992年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-61. 《定点スケッチ58》 / 1992年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-62. 《定点スケッチ59》 / 1992年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-63. 《定点スケッチ60》 / 1992年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-64. 《定点スケッチ61》 / 1992年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-65. 《定点スケッチ62》 / 1992年 / 鉛筆, 水彩・紙(厚紙貼付) / 多摩美術大学美術館
51-66. 《定点スケッチ63》 / 1992年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-67. 《定点スケッチ64》 / 1992年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-68. 《定点スケッチ65》 / 1992年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-69. 《定点スケッチ66》 / 1993年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-70. 《定点スケッチ67》 / 1995年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-71. 《定点スケッチ68》 / 1996年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-72. 《定点スケッチ72》 / 1996年頃 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
51-73. 《定点スケッチ73》 / 1996年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 多摩美術大学美術館
52. 《退屈な風景(中山)》 / 1981年 / 水彩・紙 / 個人蔵
53. 《北野踏切》 / 1986年 / 鉛筆・紙 / 個人蔵
54. 《自画像》 / 1988年 / 水彩・紙 / 個人蔵
55. 《頂上の風景》 / 1988年 / 水彩・紙 / 個人蔵
56. 《さくら・うし》 / 1992年 / 水彩・紙 / 個人蔵
57. 《さくら・うし》 / 1992年 / 水彩・紙 / 個人蔵
58. 《さくら・うし》 / 1992年 / 水彩・紙 / 個人蔵
59. 《さくら・うし》 / 1992年 / 水彩・紙 / 個人蔵
60. 《空路》 / 1993年 / 水彩・紙 / 個人蔵
61. 《さくら・うし》 / 1993年 / 水彩・紙 / 個人蔵
62. 《風景》 / 1995年 / 水彩・紙 / 個人蔵
63. 《さくら・うし》 / 1995年 / 水彩・紙 / 個人蔵
64. 《雑木林・茶畑・飛行船》 / 1997年 / 水彩・紙 / 個人蔵
65. 《引込線 JR 八王子》 / 1994年 / 水彩・紙 / 個人蔵
-

*no.51《定点スケッチ》は一部展示替えを行った。額装された12点については、全期間展示。

額装されていない63点については、3期にわけて展示。第1期9月24日(月)－10月16日(火)、第2期10月17日(水)－11月6日(火)、第3期11月7日(水)－11月25日(日)

関連事業：

美術講座 → p.47

広報記録：

後藤純子「美術館へ行こう 美術館の楽しみ方 特別展案内」『くるめすたいる』第152号
「ひととき『松本英一郎展』を企画した石橋美術館主任学芸員 植野健造さん」『西日本新聞』2007年9月24日筑後版

「松本英一郎さんの回顧展開幕」『西日本新聞』2007年9月25日県総合

「退屈な風景 松本英一郎展から」(上)(中)(下)『西日本新聞』2007年9月25日～27日夕刊

植野健造「退屈な風景 松本英一郎展 『退屈』に包まれている幸福感」『西日本新聞』2007年10月19日

宇田懐「あっけらかんとして 松本英一郎をたどる」(1)～(5)『西日本新聞』2007年10月21日～25日筑後版

「『松本英一郎の原風景は筑後』展覧会記念講演会に70人」『西日本新聞』2007年10月30日筑後版

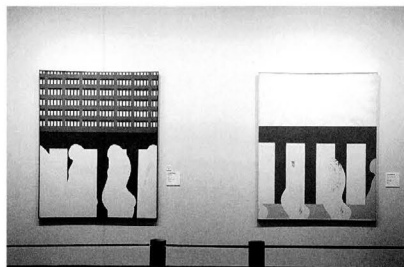
「松本英一郎展 退屈な風景」『新美術新聞』第1135号、2007年11月1日

「美術 批評！ 退屈な風景 松本英一郎展」『朝日新聞』2007年11月2日夕刊

「見に行こう 画風変遷 一生かけ完成」『読売新聞』2007年11月4日

宇田懐「展覧会 退屈な風景—松本英一郎展 底流に流れる筑後の風土」『西日本新聞』2007年11月6日

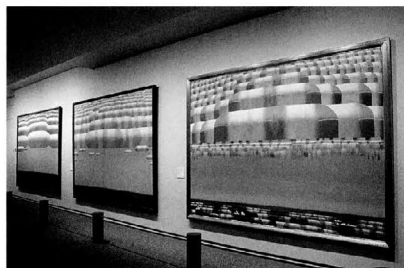
渡辺亮一「土曜文化 松本英一郎回顧展 ユーモアに包んだ社会眼」『毎日新聞』2007年11月10日



会場風景



会場風景



会場風景



会場風景

〈企画展〉

the アーティスト ―絵かきも陶芸家も彫刻家も

2006年12月23日(土)－2007年4月8日(日)

会場：全館

主催：石橋財団石橋美術館

概要：所蔵作品を、改めて作家に注目して紹介。絵画133件、陶磁器15件、彫刻4件の合計152件を展示。現在活躍中の作家の話をきく機会をもうけ、アーティスト・トークを実施。

出品内容：絵画133件、陶磁器15件、彫刻4件 計152件

入場者総数：7,720人(1日平均86人)



展覧会ポスター

出品目録：

1. 山崎朝雲《猪》／ ブロンズ / 日彫13
2. 百武兼行《臥裸婦》／ 1881年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋2
3. 中丸精十郎《瀑》／ 1890年 / 油彩・カンヴァス / 日洋1
4. 原田直次郎《村の風景》／ 油彩・板 / 日洋307
5. 原田直次郎《童女図》／ 1885年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋6
6. 浅井忠《樹下の女》／ 1901年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋291
7. 浅井忠《ヴェネツィア》／ 1902年 / 水彩・紙 / 日洋5
8. 黒田清輝《鉄砲百合》／ 1909年 / 油彩・カンヴァス / 日洋9
9. 黒田清輝《針仕事》／ 1890年 / 油彩・カンヴァス / 日洋7
10. 岡田三郎助《水浴の前》／ 1916年 / 油彩・カンヴァス / 日洋63
11. 岡田三郎助《雪景》／ 1913年 / 油彩・カンヴァス / 日洋61
12. 岡田三郎助《富士山》／ 1918年 / 油彩・板 / 日洋522
13. 和田英作《早春(富士)》／ 1939年 / 油彩・カンヴァス / 日洋66
14. 和田英作《読書》／ 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋64
15. 藤島武二《天平の面影》／ 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋11
16. 藤島武二《自画像》／ 1903年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋12
17. 藤島武二《池畔の女》／ 1908-1909年 / 油彩・紙 / 日洋36
18. 藤島武二《雲(ローマ)》／ 1908-1909年 / 油彩・カンヴァス / 日洋33
19. 藤島武二《糸杉》／ 1908-1909年 / 油彩・カンヴァスボード / 日洋41
20. 藤島武二《五剣山の日の出》／ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋49
21. 藤島武二《蒙古の日の出》／ 1937年 / 油彩・カンヴァス / 日洋56
22. 藤島武二《朝鮮婦人》／ 1914年頃 / 油彩・紙 / 日洋45
23. 藤島武二《朝鮮婦人》／ 1914年頃 / 油彩, パステル・紙 / 日洋45
24. 藤島武二《唐様三部作》／ 1924年 / 中央：水彩, 油彩, パステル, 木炭, チョーク・紙 / 左右：水

- 彩, 油彩・紙 / 日洋45
25. 山下新太郎《ブルターニュの女》/ 1908年 / 油彩・板 / 日洋206
 26. 山下新太郎《ノラ・ファルク嬢》/ 1908年 / 油彩・カンヴァス / 日洋252
 27. 満谷国四郎《ブルターニュ風景》/ 1913年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋68
 28. 満谷国四郎《焦山》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / 日洋70
 29. 吉田博《ウダイプール宮殿》/ 1931年 / 油彩・カンヴァス / 日洋248
 30. 吉田博《風景(ダージリン)》/ 1931年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋249
 31. 青木繁《自画像》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / 日洋87
 32. 青木繁《闇威弥尼》/ 1903年 / 油彩・板 / 日洋89
 33. 青木繁《輪転》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / 日洋90
 34. 青木繁《女の顔》/ 1904年 / 油彩・板(羽子板) / 日洋98
 35. 青木繁《光明皇后》/ 1905年 / 油彩・カンヴァス / 日洋102
 36. 青木繁《海の幸》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋95
 37. 青木繁《海》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋498
 38. 青木繁《海》/ 1904年 / 油彩・板 / 日洋94
 39. 青木繁《木立(森の暮色)》/ 1904年 / 油彩・板 / 日洋97
 40. 青木繁《雪景》/ 1906年 / 油彩・板 / 日洋103
 41. 青木繁《風景》/ 1904年 / 水彩・絹(扇面) / 日洋99
 42. 青木繁《丘に立つ三人》/ 1904年 / 水彩・紙 / 日洋93
 43. 青木繁《水浴》/ 1904年 / 水彩・紙 / 日洋101
 44. 青木繁《わだつみのいろこの宮》/ 1907年 / 油彩・カンヴァス / 日洋104
 45. 青木繁《大穴牟知命》/ 1905年 / 油彩・カンヴァス / 日洋197
 46. 野見山暁治《鉾山から》/ 1984年 / グワッシュ, 油性黒インク・紙 / 日洋521
 47. 野見山暁治《風の便り》/ 1997年 / 油彩・カンヴァス / 日洋520
 48. 豊福知徳《レリーフ 金2》/ 1967年 / ブロンズ / 日彫16
 49. 豊福知徳《透過する立像(白)》/ 1991年 / 木(マホガニー)・彩色 / 日彫19
 50. 豊福知徳《半円柱1》/ 1964年 / ブロンズ / 日彫15
 51. 猪熊弦一郎《犬》/ 1954年 / グワッシュ・墨・紙 / 日洋485
 52. 猪熊弦一郎《犬と猫》/ 1954年 / グワッシュ, ペン, インク, 鉛筆・紙 / 日洋486
 53. 山口長男《累形》/ 1958年 / 油彩・板 / 日洋184
 54. 杉全直《キッコウ》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / 日洋187
 55. 坂本繁二郎《自画鏡像》/ 1929年 / 油彩・紙 / 日洋113
 56. 坂本繁二郎《魚を持ってきた海女》/ 1913年 / 油彩・カンヴァス / 日洋204
 57. 坂本繁二郎《あらしの海》/ 1917年 / 油彩・板 / 日洋110
 58. 坂本繁二郎《静物》/ 1918年 / 油彩・カンヴァス / 日洋194
 59. 坂本繁二郎《牛》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / 日洋301
 60. 坂本繁二郎《パリ郊外》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋192
 61. 坂本繁二郎《少女》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 日洋111
 62. 坂本繁二郎《読書の女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋112
 63. 坂本繁二郎《帽子を持てる女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋195
 64. 坂本繁二郎《鳥》/ 1930年 / 顔彩・紙 / 日洋253
 65. 坂本繁二郎《馬》/ 1948年 / 水彩・紙 / 日洋448
 66. 坂本繁二郎《放牧三馬》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋114
 67. 坂本繁二郎《柿》/ 1944年 / 油彩・カンヴァス / 日洋210
 68. 坂本繁二郎《能面》/ 1954年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品

-
69. 坂本繁二郎《林檎 蜜柑 柿》/ 1958年 / 油彩・カンヴァス / 日洋216
 70. 坂本繁二郎《植木鉢》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
 71. 坂本繁二郎《青木繁歌碑文字図案》/ 1947年 / 紙本墨書 / 日書40
 72. 古賀春江《自画像》/ 1916年 / 水彩・紙 / 日洋322
 73. 古賀春江《地藏尊》/ 1919年 / 水彩・紙 / 日洋315
 74. 古賀春江《無題》/ 1921年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋345
 75. 古賀春江《曲糸につく》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋546
 76. 古賀春江《海水浴の女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋168
 77. 古賀春江《二階より》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
 78. 古賀春江《美しき博覧会》/ 1926年 / 水彩・紙 / 日洋321
 79. 古賀春江《素朴な月夜》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋161
 80. 古賀春江《単純な哀話》/ 1930年 / 油彩・カンヴァス / 日洋162
 81. 古賀春江《鳥籠》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋164
 82. 石井柏亭《傘松(ナポリ風景)》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋109
 83. 青山熊治《男の像》/ 1921年 / 油彩・カンヴァス / 日洋135
 84. 辻永《ハルピンの冬》/ 1917年 / 油彩・カンヴァス / 日洋116
 85. 辻永《フォントネ・オ・ローズの春》/ 1921年 / 油彩・板 / 日洋118
 86. 遠山五郎《婦人読書図》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 日洋146
 87. 伊原宇三郎《アルル風景》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 日洋276
 88. 佐伯祐三《広告貼り》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 日洋176
 89. 佐伯祐三《コルドヌリ(靴屋)》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 日洋173
 90. 荻須高德《巴里風景》/ 1949年 / 水彩, ペン, インク・紙 / 日洋283
 91. 荻須高德《巴里風景》/ 1949年 / 水彩, ペン, インク・紙 / 日洋282
 92. 荻須高德《巴里風景》/ 1949年 / 水彩, ペン, インク・紙 / 日洋284
 93. 荻須高德《巴里風景》/ 1949年 / 水彩, ペン, インク・紙 / 日洋285
 94. 青山義雄《南仏アルプス遠望》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋160
 95. 三岸節子《フランス風景》/ 油彩・カンヴァス / 日洋287
 96. 藤田嗣治《猫》/ 1934年 / 胡粉, 墨, 顔彩・紙 / 日洋262
 97. 藤田嗣治《横たわる女と猫》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋215
 98. 藤田嗣治《カルポーの公園》/ 1940年 / 油彩・カンヴァス / 日洋133
 99. 梅原龍三郎《静物(りんごと梨)》/ 1917年 / 油彩・カンヴァス / 日洋270
 100. 梅原龍三郎《静物(茄子と南瓜)》/ 1951年 / デトランプ・紙 / 日洋273
 101. 安井曾太郎《玉蟲先生像》/ 1934年 / 油彩・カンヴァス / 日洋144
 102. 安井曾太郎《レモンとメロン》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋268
 103. 金山平三《石母田の堤》/ 1952-55年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋121
 104. 金山平三《港》/ 1945-56年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋120
 105. 小杉未醒(放庵)《山幸彦》/ 1917年 / 油彩・カンヴァス / 日洋85
 106. 岸田劉生《画家の妻》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / 日洋229
 107. 岸田劉生《麗子像》/ 1922年 / テンペラ・カンヴァス / 日洋226
 108. 小出梢重《裸婦》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 日洋138
 109. 須田国太郎《禱原風景》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋157
 110. 長谷川利行《裸婦》/ 1938年 / 油彩・カンヴァス / 日洋156
 111. 長谷川利行《動物園風景》/ 1937年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋155
 112. 児島善三郎《海芋とキリン草》/ 1954年 / 油彩・カンヴァス / 日洋203
 113. 牧野虎雄《罌粟》/ 油彩・カンヴァス / 日洋153
-

-
114. 片多徳郎《芙蓉》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / 日洋147
 115. 富岡鉄斎《飲中八仙図》/ 近代 / 紙本着色 / 日書16
 116. 横山大観《旭日青波》/ 近代 / 絹本着色 / 日書72
 117. 川合玉堂《秋郊帰雁》/ 近代 / 紙本墨画淡彩 / 日書77
 118. 筆谷等観《飛瀑双幅》/ 1930年 / 絹本着色 / 日書24
 119. 川端龍子《白梅図》/ 近代 / 紙本金地墨画淡彩 / 日書32
 120. 川端龍子《木菟(竹夜)》/ 近代 / 紙本墨画淡彩 / 日書31
 121. 竹内栖鳳《富嶽図》/ 大正時代末－昭和時代初期 / 絹本着色 / 日書64
 122. 竹内栖鳳《春潮図》/ 大正時代末－昭和時代初期 / 絹本着色 / 日書67
 123. 竹内栖鳳《鯉図》/ 1927-1930年頃 / 絹本着色 / 日書66
 124. 竹内栖鳳《潮汐去来》/ 1927-1930年頃 / 絹本着色 / 日書65
 125. 堅山南風《鯉》/ 近代 / 絹本着色 / 日書35
 126. 徳岡神泉《游鯉》/ 近代 / 紙本着色 / 日書36
 127. 富田溪仙《梅鶴》/ 近代 / 絹本着色 / 日書84
 128. 富田溪仙《手向山春雪図》/ 近代 / 絹本着色 / 日書86
 129. 富田溪仙《宇治》/ 近代 / 絹本着色 / 日書87
 130. 富田溪仙《宮島》/ 近代 / 絹本着色 / 日書85
 131. 近藤浩一路《暁月》/ 1930年頃 / 紙本墨画 / 日書30
 132. 近藤浩一路《暁港(島原港)》/ 1930年 / 紙本墨画 / 日書29
 133. 前田青邨《獅子図》/ 1935年頃 / 紙本金地着色 / 日書39
 134. 前田青邨《紅白梅》/ 1970年頃 / 紙本着色 / 日書38
 135. 前田青邨《風神雷神》/ 1949年頃 / 紙本墨画淡彩 / 日書37
 136. 上村松篁《桜》/ 近代 / 紙本金地着色 / 日書95
 137. 上村松篁《桔梗》/ 近代 / 紙本着色 / 日書96
 138. 有田《色絵菊流水文皿》/ 江戸時代 1660-1670 / 磁器 / 陶器207
 139. 有田《色絵竹梅文竹形水注》/ 江戸時代 1670-1690 / 磁器 / 陶器208
 140. 有田《色絵竹梅虎文六角瓶》/ 江戸時代 1670-1700 / 磁器 / 陶器209
 141. 有田《色絵花鳥文花瓶》/ 江戸時代 1670-1700 / 磁器 / 陶器210
 142. 有田《色絵花鳥文輪花鉢》/ 江戸時代 1670-1700 / 磁器 / 陶器211
 143. 有田《色絵菊鹿文鉢》/ 江戸時代 1670-1690 / 磁器 / 陶器257
 144. 板谷波山《氷華磁葡萄文花瓶》/ 1927-1930年頃 / 磁器 / 陶器194
 145. 北大路魯山人《金襴手花鳥文鉢》/ 1925年 / 磁器 / 陶器216
 146. 富本憲吉《色絵花柳水文指》/ 近代 / 陶器 / 陶器195
 147. 清水六兵衛(6代)《古稀彩桔梗飾皿》/ 1975年 / 陶器 / 陶器220
 148. 清水六兵衛(6代)《銚泐叢花瓶》/ 1974年 / 陶器 / 陶器219
 149. 島岡達三《灰被縄文壺》/ 昭和時代 / 陶器 / 陶器223
 150. 酒井田柿右衛門(14代)《濁手草花文八角蓋物器》/ 昭和時代 / 磁器 / 陶器222
 151. 浅野勝《線文鉢》/ 昭和時代 / 陶器 / 陶器256
 152. 添田和信《白釉花入》/ 昭和時代 / 陶器 / 陶器253

*作品は、すべて石橋美術館蔵。

関連事業：

アーティスト・トーク → p.47

ギャラリートーク

広報記録：

テレビ：「はぴはぴテレビ」(ギャラリー情報)NHK 佐賀放送局, 2007年1月19日放映

the ヌード一人、からだ、カタチ

2007年4月14日(土)ー7月8日(日)

会場：本館

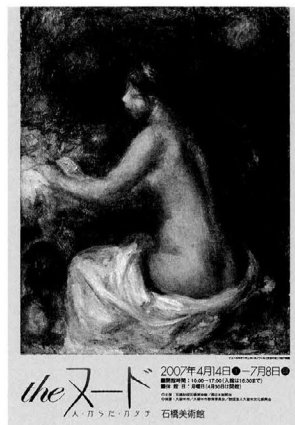
主催：石橋財団石橋美術館 / 西日本新聞社

後援：久留米市 / 久留米市教育委員会 / 財団法人久留米文化振興会

概要：財団所蔵のヌード作品98点を、主題により5つのセクションに分けて構成・展示。ヌード作品をとおり、さまざまな楽しみ方を提案、あわせてヌードの造形の歴史も紹介。

出品内容：油彩37点、水彩・素描14点、彫刻9点、版画38点、計98点

入場者総数：14,382人(1日平均192人)



展覧会チラシ

出品目録：

1 演じるヌード

1. ヤン・ピーテルス・サーンレダム 《『ヴィーナスの星[ホルツィウスに基づく]』》/ エングレーヴィング / BMA / 外版415
2. ジョン・マーチン 《『聖書』楽園追放》/ 1838刊 / メゾチント / BMA / 外版392
3. ジョン・マーチン 《『聖書』アベルの死》/ 1838刊 / メゾチント / BMA / 外版393
4. ピエール・ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ 《女性習作》/ 写真平版・和紙 / BMA / 外版294
5. アンリ・ファンタン=ラトゥール 《聖アントニウスの誘惑》/ リトグラフ / BMA / 外版17
6. イポリュト・プティジャン 《パン4-1 装飾下絵(裸体習作)》/ リトグラフ / BMA / 外版196
7. ヴィルヘルム・フォルツ 《パン2-3 サロメ》/ リトグラフ / BMA / 外版196
8. アドルフ・レオン・ヴィレット 《首を吊ったピエロ》/ 1894年 / リトグラフ / BMA / 外版423
9. ヴィクトール・ブルーヴェ 《阿片》/ 1894年 / リトグラフ、空押し / BMA / 外版212
10. エミール=アントワヌ・ブールデル 《レダと白鳥》/ 水彩、ペン、インク / BMA / 外洋48
11. オットー・エックマン 《パン5-4 春訪れなば》/ リトグラフ / BMA / 外版196
12. 岡田三郎助 《臥裸婦》/ 1901年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋230
13. 青木繁 《輪転》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / 日洋90
14. 青木繁 《天平時代》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋91
15. 青木繁 《狂女》/ 1906年 / 水彩・紙 / 日洋381
16. 青木繁 《春》/ 1908年 / 水彩・布(襖布) / 日洋106
17. 青木繁 《秋》/ 1908年 / 水彩・布(襖布) / 日洋107
18. 戸張孤雁 《曇り》/ 1917年 / ブロンズ / 日彫1
19. 北川民次 《ざくろを持つ女》/ 1954年 / リトグラフ / 日版122
20. 古賀春江 《鳥籠》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋164
21. 古賀春江 《〈檻〉(『東京バック』裏表紙)のためのスケッチ》/ 1929年 / 水彩・紙 / 日洋365
22. 古賀春江 《巖しき伝統》/ 1931年 / 油彩・カンヴァス / 日洋163

-
23. ヘンリー・ムア《『生誕80年記念版画集』荒れ模様の空の下に横たわる人体》/ 1975年 / リトグラフ / BMA / 外版275
24. マリノ・マリーニ《ボモナ習作》/ 石版 / BMA / 外版160
25. マリノ・マリーニ《ボモナ習作》/ 石版 / BMA / 外版160

(踊るヌード)

26. エドガー・ドガ《右手で右足を持つ踊り子》/ ブロンズ / BMA / 外彫37
27. ヴィルヘルム・フォルツ《パン4-2 ニンフの行進と踊り》/ リトグラフ / BMA / 外版196
28. 長谷川栄作《黎明の舞》/ ブロンズ / 日彫12
29. 古賀春江《デッサン》/ 1931年頃 / 鉛筆・紙 / 日洋368
30. 海老原喜之助《裸体》/ リトグラフ / 日版133
31. ペリクレ・ファッツィーニ《馬上に立つ裸婦》/ ブロンズ / BMA / 外彫87
32. アンリ・エラン《パン3-4 戯れる人魚》/ 木版, リトグラフ / BMA / 外版196

2 英雄

33. オーギュスト・ロダン《青銅時代》/ ブロンズ / BMA / 外彫38
34. オーギュスト・ロダン《考える人》/ ブロンズ / BMA / 外彫39
35. エミール=アントワース・ブールデル《傷つける精を運ぶケンタウロス》/ 水彩, ペン, インク・紙 / BMA / 外洋49
36. エミール=アントワース・ブールデル《クロノス》/ 1921年 / グワッシュ, インク・紙 / BMA / 外洋124
37. エルンスト=モーリッツ・ガイガー《パン1-2 巨人》/ エッチング / BMA / 外版196
38. マックス・ピーチュマン《パン2-2 ケンタウロスのカップル》/ エッチング / BMA / 外版196
39. パブロ・ピカソ《三人の裸婦と笛を吹くサテュロス》/ 1932年 / ドライポイント / BMA / 外版71
40. パブロ・ピカソ《娘を襲うミノタウロス》/ 1933年 / エッチング / BMA / 外版107
41. パブロ・ピカソ《瀕死のミノタウロス》/ 1933年 / エッチング / BMA / 外版108
42. 青木繁《海の幸》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋95
43. 青木繁《大穴牟知命》/ 1905年 / 油彩・カンヴァス / 日洋197
44. 青木繁《わだつみのいるこの宮》/ 1907年 / 油彩・カンヴァス / 日洋104
45. 北村西望《月昇る》/ ブロンズ / 日彫11

3 生活のなかの裸婦

(水浴, 入浴)

46. ジャン=バティスト・パテル《水浴》/ 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋175
47. ウィリアム・ホガース《トルコ風呂》/ エングレーヴィング / BMA / 外版366
48. カミーユ・ピサロ《水浴の女たち》/ リトグラフ / BMA / 外版7
49. ピエール=オーギュスト・ルノワール《水浴の女》/ 1907年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋136
50. マックス・リーバーマン《パン3-2 水浴の若者たち》/ エッチング / BMA / 外版196
51. ポール=アルベール・ベナール《水浴》/ エッチング, アクアチント / BMA / 外版26
52. アンデルス・ツォルン《浅瀬》/ 1912年 / エッチング / BMA / 外版223
53. フェリックス・ヴァロットン《入浴》/ 木版 / BMA / 外版52
54. 藤島武二《池畔の女》/ 1908-09年 / 油彩・紙 / 日洋36
55. 岡田三郎助《髪梳く女》/ 1915年 / 油彩・カンヴァス / 日洋62
56. 岡田三郎助《水浴の前》/ 1916年 / 油彩・カンヴァス / 日洋63
57. 満谷国四郎《脱衣》/ 1926年 / 油彩・カンヴァス / 日洋233

-
58. 安井曾太郎《水浴裸婦》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / 日洋142
59. 梅原龍三郎《脱衣婦》/ 1912年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋200
60. 岸田劉生《裸婦》/ 1913年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋205
61. 勝間田武夫《ルノワール《横たわる水浴の女たち》の模写》/ 油彩・カンヴァス / 日洋395
62. 高田力蔵《アングル《泉》の模写》/ 1938年 / 油彩・カンヴァス / 日洋407

(化粧)

63. ギュスターヴ・モロー《化粧》/ 1885-90年頃 / グワッシュ、水彩・紙 / BMA / 外洋120
64. アンリ・マティス《リュリュと犬》/ 1931年 / ペン、インク・紙 / BMA / 外洋61
65. ジュール・ヴァン・ド・レーヌ《鏡の前》/ 1952年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋153
66. 清水多嘉示《衣裳室》/ 1926年 / 油彩・板 / 日洋472

(寝室)

67. エドゥアール・マネ《横たわるオダリスク》/ エッチング、アクアティント / BMA / 外版9
68. エドゥアール・マネ《オランピア》/ エッチング、アクアティント / BMA / 外版11
69. ポール・ゴーガン《マナオ・トゥパバウ(死霊が見ている)》/ 1894年 / リトグラフ / BMA / 外版222
70. カール・ケッピン《パン3-4 すわる裸婦》/ エッチング / BMA / 外版196
71. 藤田嗣治《二人の裸婦》/ 1927年 / エッチング・絹 / 日版2
72. 藤田嗣治《裸婦》/ 1949年 / 墨・紙 / 日洋128

4 アトリエの裸婦

73. 百武兼行《臥裸婦》/ 1881年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋2
74. アンリ=バトリス・ディヨン《アトリエの情景》/ リトグラフ / BMA / 外版308
75. アリストティ・ド・マイヨール《裸婦》/ ブロンズ / BMA / 外彫65
76. 藤島武二《臥裸婦素描》/ 1906-07年 / 鉛筆・紙 / BMA / 日洋19
77. アンリ・マティス《横たわる裸婦》/ 1919年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋58
78. 満谷国四郎《裸婦》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 日洋69
79. 満谷国四郎《裸婦》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 日洋232
80. 和田英作《チューリップ》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 日洋65
81. 山下新太郎《シュザンヌ》/ 1909年 / 油彩・カンヴァス / 日洋211
82. 金山平三《習作・女》/ 1915-34年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋222
83. 小出栖重《裸婦》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 日洋138
84. 小出栖重《裸婦素描》/ 1926年 / コンテ・紙 / 日洋139
85. 小出栖重《横たわる裸身》/ 1930年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋140
86. 国吉康雄《横たわる女》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋158
87. 長谷川利行《裸婦》/ 1938年 / 油彩・カンヴァス / 日洋156
88. 児島善三郎《立つ》/ 1928年 / 油彩・カンヴァス / 日洋495
89. 伊原宇三郎《椅子によれる》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋277
90. 田中繁吉《裸婦》/ 版画 / 日版124
91. 山本豊市《若い女》/ 1956年 / 乾漆 / 日彫3

(ヌードの衝撃)

92. ジョルジュ・ピゴー《日本の女》/ 油彩・カンヴァス / 外洋111
93. 黒田清輝《針仕事》/ 1890年 / 油彩・カンヴァス / 日洋7

※以上2点は参考出品

5 群像

94. 川口軌外《群像》/ 1954年 / リトグラフ / 日版112
95. 伊原宇三郎《七人の裸婦》/ リトグラフ / 日版119
96. 古賀春江《海女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋169
97. 井上三綱《裸婦群像》/ 1955年 / 石膏, 水彩・紙 / 日洋334
98. 猪熊弦一郎《裸婦と猫たち》/ 1954年 / リトグラフ / BMA / 日版128

コレクション(造形)

1. 坂田一男《エスキース》/ 1953年 / 油彩・板 / 日洋179
2. 豊田勝秋《春日》/ 1930年 / ブロンズ / 雑46
3. 豊田勝秋《鑄銅花さし》/ 1931年 / 鑄銅 / 雑47
4. 山口長男《累形》/ 1958年 / 油彩・板 / 日洋184
5. 杉全直《キッコウ》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / 日洋187
6. 野見山暁治《風の便り》/ 1997年 / 油彩・カンヴァス / 日洋520
7. 豊福知徳《透過する立像(白)》/ 1991年 / 木(マホガニー)・彩色 / 日彫19
8. 豊福知徳《半円柱1》/ 1964年 / ブロンズ / 日彫15
9. 豊福知徳《レリーフ 金2》/ 1967年 / ブロンズ / 日彫16

コレクション(日本近代洋画選)

10. 中丸精十郎《瀑》/ 1890年 / 油彩・カンヴァス / 日洋1
11. 藤島武二《チョチャラ》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / 日洋25
12. 藤島武二《屋島よりの遠望》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋50
13. 満谷国四郎《坐婦》/ 1913年 / 油彩・カンヴァス / 日洋67
14. 和田英作《読書》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋64
15. 青木繁《自画像》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / 日洋87
16. 青木繁《海》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋498
17. 青木繁《光明皇后》/ 1905年 / 油彩・カンヴァス / 日洋102
18. 坂本繁二郎《牛》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / 日洋301
19. 坂本繁二郎《パリ郊外》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋192
20. 坂本繁二郎《自像》/ 1923-30年 / 油彩・カンヴァス / 日洋300
21. 坂本繁二郎《放牧三馬》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋114
22. 坂本繁二郎《柿》/ 1944年 / 油彩・カンヴァス / 日洋210
23. 藤田嗣治《横たわる女と猫》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋215
24. 安井曾太郎《玉蟲先生像》/ 1934年 / 油彩・カンヴァス / 日洋144
25. 安井曾太郎《レモンとメロン》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋268
26. 岸田劉生《麗子像》/ 1922年 / テンペラ・カンヴァス / 日洋226
27. 児島善三郎《トレド風景》/ 1928年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋159
28. 古賀春江《素朴な月夜》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋161
29. 古賀春江《単純な哀話》/ 1930年 / 油彩・カンヴァス / 日洋162
30. 佐伯祐三《コルドヌリ(靴屋)》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 日洋173
31. 佐伯祐三《広告貼り》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 日洋176

コレクション(オリエントの陶器)

- 32. 《白搔落象文鉢》 / セルジューク朝 11-12世紀 / 陶器 / 陶器117
- 33. 《ラスター彩人物文鉢》 / 13世紀 / 陶器 / 陶器119
- 34. 《ラスター彩幾何文鉢》 / 13世紀 / 陶器 / 陶器121
- 35. 《藍釉黒彩花鳥文鉢》 / 13世紀 / 陶器 / 陶器122
- 36. 《多彩釉刻線文鉢》 / 9-10世紀 / 陶器 / 陶器124
- 37. 《白地藍黒彩花文鉢》 / 13世紀 / 陶器 / 陶器129
- 38. 《青緑釉黒彩花文把手付壺》 / 13世紀 / 陶器 / 陶器141
- 39. 《青緑釉黒彩蔓草文八耳壺》 / 13-14世紀 / 陶器 / 陶器146
- 40. 《白地多彩人物花鳥文タイル》 / カージャール朝? 19-20世紀? / 陶器 / 陶器201
- 41. 《白地多彩人物草花文タイル》 / カージャール朝 19世紀 / 陶器 / 陶器202
- 42. 《青緑釉藍黒彩花瓶》 / セルジューク朝 13世紀 / 陶器 / 陶器205
- 43. 《白地多彩人物文鉢》 / 13世紀 / 陶器 / 陶器206
- 44. 《動物幾何文嘴形注口把手付壺》 / シアルクⅣ期 紀元前1千年紀 / 土器 / 陶器115
- 45. 《白地多彩鳥文鉢》 / 10-11世紀 / 陶器 / 陶器116
- 46. 《白地多彩人物文鉢》 / 13世紀? / 陶器 / 陶器125
- 47. 《嘴形注口把手付壺》 / シアルクⅥ期 紀元前1千年紀 / 土器 / 陶器180
- 48. 《ラスター彩草花文輪花鉢》 / イル・ハーン朝 13世紀後半 / 陶器 / 陶器181

*BMA は、ブリヂストン美術館の所蔵であることを示す。

所蔵の表記のない作品は、すべて石橋美術館蔵。

関連事業：

美術講座 → p.47

ギャラリートーク

広報記録：

新聞・雑誌：

森山秀子「the ヌード展から 人・からだ・カタチ1-5」『西日本新聞』夕刊，2007年4月16日，17日，19日，20日，21日

森山秀子「よかなび九州」『西日本新聞』2007年5月12日

「the ヌード展を見て1-5」『西日本新聞』筑後版，2007年5月29日，30日，31日，6月1日，2日

渡辺亮一「ときめきアート」『毎日新聞』夕刊，2007年6月5日

平間理香「よかなび九州」『西日本新聞』2007年6月9日

中村共子「美術・批評！模倣脱した日本の美探る」『朝日新聞』夕刊，2007年6月22日

テレビ：

「はぴはぴテレビ」(ギャラリー情報)NHK 佐賀放送局，2007年4月18日放送

コレクションによる旅—美術街道十三次

2007年7月15日(日)－9月17日(月・祝)

会場：本館，別館

主催：石橋財団石橋美術館 / TVQ 九州放送

後援：久留米市 / 久留米市教育委員会 / 財団法人久留米文化振興会

概要：所蔵作品(一部ブリヂストン美術館蔵)が作られた時代や場所に注目し、来館者に13とおりの仮想の旅を体験してもらおうという試み。

出品内容：油彩96点，水彩・スケッチ26点，書画10点，陶器・ガラス25点，その他2点，計159点

入場者総数：8,206人(1日平均141人)



展覧会チラシ

出品目録：

一 自然ワールド1

1. 中丸精十郎《瀑》/ 1890年 / 油彩・カンヴァス / 日洋1
2. 原田直次郎《村の風景》/ 油彩・板 / 日洋307
3. 藤島武二《屋島よりの遠望》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋50
4. 満谷国四郎《瀬戸内海風景》/ 1928年 / 油彩・カンヴァス / 日洋234
5. 和田英作《早春(富士)》/ 1939年 / 油彩・カンヴァス / 日洋66
6. 吉田博《上高地》/ 1927年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋250
7. 吉田博《奔流》/ 1936年 / 油彩・カンヴァス / 日洋82
8. 青木繁《月下滞船図》/ 1908年 / 油彩・カンヴァス / 日洋105
9. 石井柏亭《ソレント》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋108
10. 坂本繁二郎《あらしの海》/ 1917年 / 油彩・板 / 日洋110
11. 金山平三《田沢の春》/ 1941年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋119
12. 金山平三《石母田の堤》/ 1952-55年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋121
13. 高島野十郎《ベニスの昼》/ 1930-33年頃 / 油彩・カンヴァスボード / 日洋467

十三 不思議ワールド

14. 古賀春江《素朴な月夜》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋161
15. 古賀春江《単純な哀話》/ 1930年 / 油彩・カンヴァス / 日洋162

二 自然ワールド2

16. 藤島武二《糸杉》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァスボード / 日洋41
17. 藤島武二《五剣山の日の出》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋49
18. 藤島武二《蒙古の日の出》/ 1937年 / 油彩・カンヴァス / 日洋56
19. 青木繁《木立(森の暮色)》/ 1904年 / 油彩・板 / 日洋97

-
20. 坂本繁二郎《牛》/ 1919-65年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
 21. 坂本繁二郎《放牧三馬》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋114
 22. 牧野虎雄《罌粟》/ 油彩・カンヴァス / 日洋153
 23. 牧野虎雄《ひまわり》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋198
 24. 伊東静尾《土(A)》/ 1961年 / 油彩・板 / 日洋341
 25. 伊東静尾《土》/ 1961年 / 油彩・板 / 日洋342
 26. 猪熊弦一郎《樹と山》/ 1945年 / 油彩・カンヴァス / 日洋183

十三 不思議ワールド

27. 近藤弘明《寂光》/ 1965年 / 紙本着色 / 日書41

三 旅のスケッチ

28. 中沢弘光《ヴェネツィア》/ 1922年 / 水彩, チョーク・紙 / 日洋73
29. 中沢弘光《ミラノ》/ 1922年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 日洋74
30. 中沢弘光《ローマ》/ 1922年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 日洋75
31. 中沢弘光《ヴェネツィア》/ 1922年 / 水彩・紙 / 日洋76
32. 中沢弘光《コロombo》/ 1922年 / 水彩・紙 / 日洋77
33. 中沢弘光《ナポリ》/ 1922年 / 水彩・紙 / 日洋78
34. 中沢弘光《プリュージュ》/ 1922年 / 水彩・紙 / 日洋79
35. 中沢弘光《ピサ》/ 1922年 / 水彩・紙 / 日洋80
36. 青木繁《車中風景》/ 1902年 / 鉛筆, 淡彩・紙 / 日洋496
37. 青木繁《神塞妙義》/ 1902年 / 鉛筆, 淡彩・紙 / 日洋507
38. 青木繁《碓氷川礮》/ 1902年 / 鉛筆, 淡彩・紙 / 日洋508
39. 青木繁《汗の妙義山スケッチ行》/ 1902年 / 鉛筆, 淡彩・紙 / 寄託作品
40. 青木繁《麓より妙義山を望む》/ 1902年 / 鉛筆・紙 / 寄託作品
41. 青木繁《中小坂村》/ 1902年 / 鉛筆, 淡彩・紙 / 寄託作品
42. 青木繁《スケッチする男》/ 1902年 / 鉛筆・紙 / 寄託作品
43. 青木繁《山上のスケッチ》/ 1902年 / 鉛筆・紙 / 寄託作品
44. 青木繁《妙義山金洞第一石門》/ 1902年 / 鉛筆, 淡彩・紙 / 寄託作品
45. 青木繁《風景》/ 1910年 / 鉛筆, 淡彩・紙 / 日洋447
46. 松田諦晶《伯耆大山》/ 1943年 / 油彩・カンヴァス / 日洋344
47. 安井曾太郎《湯河原風景》/ 水彩, 鉛筆・紙 / 日洋461
48. 安井曾太郎《上高地風景》/ 水彩, 鉛筆・紙 / 日洋462
49. 安井曾太郎《風景素描》/ 鉛筆・紙 / 日洋463
50. 古賀春江《柳川風景》/ 1914年 / 水彩・紙 / 日洋523
51. 古賀春江《二階より》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品

※その他、松田諦晶と古賀春江のスケッチブック各4点

四 イスパニア

52. 《ラスター彩草花文皿》/ 16世紀? / 陶器 / 陶器152
53. 《ラスター彩草花文皿》/ 16世紀? / 陶器 / 陶器154
54. 《ラスター彩蔓草文四耳壺》/ 16世紀? / 陶器 / 陶器155
55. 《ラスター彩花文皿》/ 17世紀? / 陶器 / 陶器156
56. 《ラスター彩花文皿》/ 17世紀? / 陶器 / 陶器157
57. 《ラスター彩花文皿》/ 17世紀? / 陶器 / 陶器158

-
58. 《ラスター彩蔓草文瓶》 / 17世紀? / 陶器 / 陶器160
59. 《ラスター彩蔓草鳥文把手付瓶》 / 17世紀? / 陶器 / 陶器161
60. 山下新太郎《ベラスケス〈王妃マリアーナ・デ・アウストリア〉の模写》 / 1907年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋392
61. 児島善三郎《トレド風景》 / 1928年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋159

五 古代ワールド

62. 《ボンベイ壁画断片》 / 1世紀 / フレスコ / 外洋1
63. 藤島武二《天平の面影》 / 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋11
64. 藤島武二《ボンベイ壁画模写》 / 1908年 / 油彩・板 / 日洋43
65. 藤島武二《ボンベイ壁画模写》 / 1908年 / 油彩・カンヴァスボード / 日洋44
66. 藤島武二《ボンベイ》 / 1908-09年 / 油彩・板 / 日洋28
67. 小杉未醒(放庵)《山幸彦》 / 1917年 / 油彩・カンヴァス / 日洋85
68. 小杉未醒《戊辰秋日》 / 1928年 / 油彩・カンヴァス / 日洋545
69. 青木繁《天平時代》 / 1904年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋91
70. 青木繁《光明皇后》 / 1905年 / 油彩・カンヴァス / 日洋102
71. 青木繁《大穴牟知命》 / 1905年 / 油彩・カンヴァス / 日洋197
72. 高田力蔵《アテネのエレクトイオン》 / 1938年 / 油彩・カンヴァス / 日洋385
73. 高田力蔵《パルテノンの午後》 / 1939年 / 油彩・カンヴァス / 日洋386
74. 高田力蔵《回想のアクロポリス》 / 1939年 / 油彩・カンヴァス / 日洋387

六 フランス

75. 岡田三郎助《薔薇の少女》 / 1901年 / 油彩 / 日洋231
76. 山下新太郎《ブルターニュの女》 / 1908年 / 油彩・板 / 日洋206
77. 坂本繁二郎《パリ郊外》 / 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋192
78. 坂本繁二郎《帽子を持てる女》 / 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋195
79. 辻永《春(パリ郊外)》 / 1921年 / 油彩・カンヴァス / 日洋117
80. 辻永《フォントネ・オ・ローズの春》 / 1921年 / 油彩・板 / 日洋118
81. 藤田嗣治《カルポーの公園》 / 1940年 / 油彩・カンヴァス / 日洋133
82. 平賀亀祐《アペリチフの時間》 / 1928年 / 油彩・カンヴァス / 日洋150
83. 平賀亀祐《古い巴里の街角》 / 1954年 / 油彩・カンヴァス / 日洋151
84. 伊原宇三郎《アルル風景》 / 1925年 / 油彩・カンヴァス / 日洋276
85. 林倭衛《フランス風景》 / 1924-25年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋171
86. 佐伯祐三《コルドヌリ(靴屋)》 / 1925年 / 油彩・カンヴァス / 日洋173
87. 佐伯祐三《広告貼り》 / 1927年 / 油彩・カンヴァス / 日洋176
88. 荻須高德《プロヴァンのフォンテーヌ広場》 / 1940年 / 油彩・カンヴァス / 日洋280
89. 荻須高德《角の居酒屋》 / 1940年 / 油彩・カンヴァス / 日洋281
90. 青山義雄《南仏アルプス遠望》 / 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋160
91. 高田力蔵《エトルタの断崖》 / 1939年 / 油彩・カンヴァス / 日洋182
92. 高田力蔵《雨後のサン=メス》 / 1967年 / 油彩・カンヴァス / 日洋209
93. 三岸節子《フランス風景》 / 油彩・カンヴァス / 日洋287

七 グレー村

94. 浅井忠《グレーの洗濯場》 / 1901年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋290
95. 浅井忠《グレーの古橋》 / 1901年 / 水彩・紙 / BMA / 日洋292
-

-
96. 浅井忠《樹下の女》/ 1901年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋291
97. 浅井忠《グレーの橋》/ 1902年 / 水彩・紙 / BMA / 日洋3
98. 黒田清輝《針仕事》/ 1890年 / 油彩・カンヴァス / 日洋7
99. 和田英作《読書》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋64
100. 山下新太郎《グレーのホテルの女》/ 1908年 / 油彩・板 / 日洋417
101. 安井曾太郎《風景》/ 1911年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋459
102. 安井曾太郎《水車小屋》/ 1911年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋460

十三 不思議ワールド

103. 佐藤敬《作品》/ 1957年 / 油彩・カンヴァス / 日洋490

八 ルーヴル美術館

104. 山下新太郎《ヴェラスケス〈マルガリータ王女〉の模写》/ 1907年 / 油彩・カンヴァス / 日洋391
105. 鱸利彦《コロロ〈モルトフォンテーヌの思い出〉の模写》/ 1930年 / 油彩・カンヴァス / 日洋394
106. 勝間田武夫《ルノワール〈横たわる水浴の女たち〉の模写》/ 油彩・カンヴァス / 日洋395
107. 高田力蔵《アングル〈泉〉の模写》/ 1938年 / 油彩・カンヴァス / 日洋407
108. 高田力蔵《ミレー〈落穂拾い〉の模写》/ 1958年 / 油彩・カンヴァス / 日洋408
109. 高田力蔵《ピラミッド広場に於て》/ 1981年 / 油彩・カンヴァス / 日洋479
110. 島村三七雄《ティツィアーノ〈聖母子と聖ステパノ、聖ヒエロニムス、聖マウリティウス〉の模写》/
1936年 / 油彩・カンヴァス / 日洋410
111. 島村三七雄《ルノワール〈ムーラン・ド・ラ・ギャレット〉の模写》/ 油彩・カンヴァス / 日洋411

十三 不思議ワールド

112. 平野遼《朝》/ 1991年 / 油彩・カンヴァス / 日洋532

九 ルノワールへの旅

113. ピエール＝オーギュスト・ルノワール《水浴の女》/ 1907年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋136
114. 満谷国四郎《坐婦》/ 油彩・カンヴァス / 1913年 / 日洋67
115. 満谷国四郎《ブルターニュ風景》/ 1913年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋68
116. 山下新太郎《ノラ・ファルク嬢》/ 1908年 / 油彩・カンヴァス / 日洋252
117. 山下新太郎《シュザンヌ》/ 1909年 / 油彩・カンヴァス / 日洋211
118. 山下新太郎《端午》/ 1915年 / 油彩・カンヴァス / 日洋423
119. 山下新太郎《金閣寺林泉》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 日洋214
120. 青山熊治《男の像》/ 1921年 / 油彩・カンヴァス / 日洋135
121. 青山熊治《静物》/ 1931年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋136
122. 遠山五郎《婦人読書図》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 日洋146
123. 梅原龍三郎《林檎園》/ 1909年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋464
124. 安井曾太郎《水浴裸婦》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / 日洋142
125. 梅原龍三郎《脱衣婦》/ 1912年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋200
126. 梅原龍三郎《静物(りんごと梨)》/ 1917年 / 油彩・カンヴァス / 日洋270
127. 梅原龍三郎《桜島》/ 1935年 / 油彩・紙 / 日洋274
128. 梅原龍三郎《静物(茄子と南瓜)》/ 1951年 / デトランプ・紙 / 日洋273

十三 不思議ワールド

129. 野見山暁治《風の便り》/ 1997年 / 油彩・カンヴァス / 日洋520
-

十 江戸ワールド

- 130. 中村芳中《四季草花図扇面貼交屏風》/ 19世紀初頭 / 紙本著色 / 日書105
- 131. 狩野周信《琴高仙人図》/ 17世紀末-18世紀初頭 / 絹本墨画 / 日書51
- 132. 尾形乾山《不二図》/ 18世紀前半 / 紙本著色 / 日書50
- 133. 狩野方信《竹林七賢人図屏風》/ 18世紀前半 / 紙本墨画 / 日書53
- 134. 円山応挙《波に鴨図襖》/ 18世紀後半 / 紙本墨画淡彩 / 日書43
- 135. 青木木米《秋溪渡橋》/ 19世紀初頭 / 紙本墨画淡彩 / 日書55
- 136. 鈴木其一《富士筑波山図屏風》/ 19世紀前半 / 紙本金地著色 / 日書106
- 137. 池田孤邨《青楓紅楓図屏風》/ 19世紀前半 / 紙本金地著色 / 日書57

十一 中国

- 138. 《三彩馬》/ 唐時代 / 陶器 / 陶器198
- 139. 《塼》/ 漢時代 / 煉瓦 / 陶器226
- 140. 《白磁龍耳瓶》/ 唐時代 7-8世紀 / 磁器 / 陶器228
- 141. 《加彩婦人俑》/ 唐時代 8世紀 / 陶器 / 陶器231
- 142. 《緑釉万年壺》/ 唐時代 8世紀 / 陶器 / 陶器232
- 143. 《白地黒搔落牡丹文花瓶》/ 宋時代 11-12世紀 / 磁器 / 陶器189
- 144. 満谷国四郎《焦山》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / 日洋70
- 145. 辻永《ハルピンの冬》/ 1917年 / 油彩・カンヴァス / 日洋116
- 146. 前田青邨《支那風景》/ 紙本淡彩 / 日書93
- 147. 安井曾太郎《北京風景》/ 1944年 / 鉛筆, パステル, 水彩・紙 / 日洋266
- 148. 安井曾太郎《北京風景》/ 1944年頃 / 水彩・紙 / 日洋267

十二 オリエント

- 149. 《五角小瓶》/ ローマ帝国 3世紀後半-4世紀 / ガラス / 雑50
- 150. 《突起文瓶》/ ローマ帝国 3世紀 / ガラス / 雑51
- 151. 《貼付紐文広口瓶》/ ローマ帝国 4世紀前半 / ガラス / 雑52
- 152. 《貼付紐文広口瓶》/ ローマ帝国 4世紀前半 / ガラス / 雑53
- 153. 《梨形瓶》/ ローマ帝国 1世紀後半 / ガラス / 雑54
- 154. 《円形切子碗》/ サーサーン朝 6世紀前半 / ガラス / 雑17
- 155. 《貼付幾何文長杯》/ パルティア朝またはサーサーン朝 2-3世紀 / ガラス / 雑18
- 156. 《突起文括碗》/ ローマ帝国 3世紀中葉-後半 / ガラス / 雑19
- 157. 《梨形長頸瓶》/ ローマ帝国 1世紀中葉 / ガラス / 雑21
- 158. 《貼付線文鼓形把手付瓶》/ ガズニ朝 10世紀末 / ガラス / 雑22
- 159. 《大皿》/ 4世紀 / ガラス / 雑27

*BMA は、ブリヂストン美術館の所蔵であることを示す。

所蔵の表記のない作品は、すべて石橋美術館蔵。

関連事業：

美術講座 → p.47

ギャラリートーク

広報記録：

新聞・雑誌：

「感動 MUSEUM 美術館・博物館」『西日本新聞』2007年6月30日

「ミュージアム コレクションによる旅 美術街道十三次」『ふくぎんよか余暇くらぶ』2007年7月13日

「世界旅行気分楽しんで 石橋美術館『コレクションによる旅』展」『西日本新聞』筑後版，2007年7月19日

白石知子「く見に行こう」コレクションによる旅 美術街道十三次」『読売新聞』2007年8月5日

テレビ：

「はぴはぴテレビ」（ギャラリー情報）NHK 佐賀，2007年8月22日放送

〈土曜講座〉

土曜日 14:00-16:00 ホール

通算回数 月 日 講座題目

講師

《最近の海外美術展事情》

企画＝島田紀夫

- | | | | |
|------|------------|---------------------------------------------|------|
| 2077 | 2007年2月10日 | モネ《睡蓮》とエコール・ド・パリ—オランジュリー美術館のリニューアル・オープン | 島田紀夫 |
| 2078 | 2月17日 | プロヴァンスのセザンヌ—没後100年記念大回顧展—エクス・ダ・グラネ美術館 | 島田紀夫 |
| 2079 | 2月24日 | セザンヌからピカソへ—アヴァンギャルドのパトロン・画商ヴォラール—メトロポリタン美術館 | 島田紀夫 |

《地中海を旅する人々》

企画＝高山 博氏(東京大学教授, 地中海学会)

- | | | | |
|------|------------|-----------------------------|------------------|
| 2080 | 2007年3月31日 | サンティアゴ巡礼 | 福井千春氏(中央大学教授) |
| 2081 | 4月7日 | 古来, 旅人はシチリアをめざす | 武谷なおみ氏(大阪芸術大学教授) |
| 2082 | 4月14日 | 戦争と平和の旅人—カエサルとハドリアヌス | 本村凌二氏(東京大学教授) |
| 2083 | 4月21日 | 旅をするスペインと旅をされるスペイン | 清水憲男氏(上智大学教授) |
| 2084 | 4月28日 | 12世紀地中海横断—異文化圏を旅したイブン・ジュバイル | 高山 博氏 |
| 2085 | 5月5日 | 歴史家ヘロドトスの旅 | 櫻井万里子氏(東京大学名誉教授) |

《江戸東京・美術散歩》

企画＝貝塚 健

- | | | | |
|------|------------|----------------------|--------------------------|
| 2086 | 2007年5月19日 | 英一蝶—元禄江戸の風流画家 | 小林 忠氏(学習院大学教授, 千葉市美術館館長) |
| 2087 | 5月26日 | 鈴木其一—江戸中橋生まれの琳派絵師 | 平間理香 |
| 2088 | 6月2日 | 東京駅の建築家—辰野金吾 | 東 秀紀氏(清泉女学院大学教授) |
| 2089 | 6月9日 | 竹久夢二と港屋絵草紙店, 日本橋京橋界隈 | 石川桂子氏(竹久夢二美術館学芸員) |
| 2090 | 6月16日 | 木村荘八—“東京まみれの江戸っ子”画家 | 田中 淳氏(東京文化財研究所企画情報部室長) |

《再考・青木繁》

企画＝貝塚 健

- | | | | |
|------|------------|-----------------------------------|-----------------|
| 2091 | 2007年9月15日 | 《海の幸》と日露戦争の夏—青木繁と戦争表象 | 長田謙一氏(首都大学東京教授) |
| 2092 | 9月22日 | 布良という聖地—《海の幸》が生まれた場所 | 貝塚 健 |
| 2093 | 9月29日 | 青木繁の芸術における完成と未完成—《わだつみのいるこの宮》を中心に | 植野健造 |

《セザンヌ芸術の魅力》

企画＝田所夏子

2094	2007年10月13日	日本におけるセザンヌ	永井隆則氏(京都工芸繊維大学准教授)
2095	10月20日	プロヴァンス派の系譜	西野嘉章氏(東京大学総合研究博物館教授)
2096	10月27日	南仏エクス・アン・セザンヌ	浅野春男氏(沖縄県立芸術大学教授)
2097	11月3日	セザンヌとピサロ	有木宏二氏(宇都宮美術館学芸員)
2098	11月10日	セザンヌの水浴図	島田紀夫

《地中海とユートピア》

企画＝小池寿子氏(國學院大学教授, 地中海学会)

2099	2007年11月17日	天界への回路としての聖遺物と美術	秋山 聡氏(東京大学准教授)
2100	11月24日	ユートピアとしての南フランスールノールとボナール	木島俊介氏(東急文化村プロデューサー, 群馬県立近代美術館館長)
2101	12月1日	はるかな都市―描かれた都市のユートピア	小佐野重利氏(東京大学教授)
2102	12月8日	中世後期フィレンツェの都市整備と理想都市像	石川 清氏(愛知産業大学教授)
2103	12月15日	永遠なるユートピア・古典世界	中山典夫氏(筑波大学名誉教授, 崇城大学教授)

〈ギャラリートーク〉

展示室でのギャラリートークを毎週水曜日と金曜日に実施した。今年度は下記の時間帯に当館学芸員が、また各月の最終水曜日はディレクターズトークとし、館長が実施した。

水曜日、金曜日 15:00－16:00

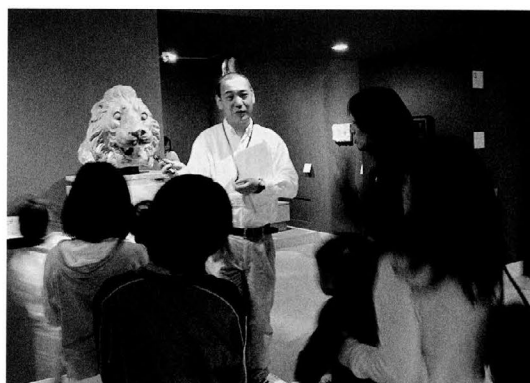
〈ファミリープログラム〉

小学生を含む家族を対象にしたプログラムを、毎月2回、下記の時間帯に実施した。

日曜日 10:30－12:30

2007年	1月21日	「BINGOで美術館」
		5組15人(子ども8人, おとな7人)
	1月28日	「BINGOで美術館」
		3組11人(子ども5人, おとな6人)
	2月25日	「BINGOで美術館」
		1組2人(子ども1人, おとな1人)
	3月18日	「見つかるかな？」
		3組9人(子ども5人, おとな4人)
	3月25日	「見つかるかな？」

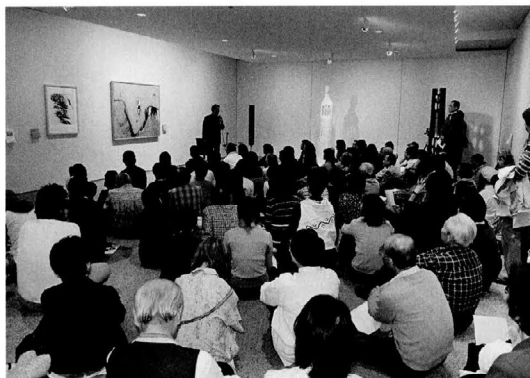
3組7人(子ども4人, おとな3人)
 4月22日 「思い出いろいろ」
 1組3人(子ども2人, おとな1人)
 4月30日 「思い出いろいろ」
 4組10人(子ども6人, おとな4人)
 5月20日 「おすすめ・おまかせ・この1点」
 1組3人(子ども2人, おとな1人)
 5月27日 「おすすめ・おまかせ・この1点」
 2組5人(子ども2人, おとな3人)
 6月17日 「帽子好き!好き?大好き」
 3組10人(子ども5人, おとな5人)
 6月24日 「帽子好き!好き?大好き」
 3組9人(子ども5人, おとな4人)
 7月22日 「暑中お見舞い申し上げます」
 4組15人(子ども9人, おとな6人)
 7月29日 「暑中お見舞い申し上げます」
 3組6人(子ども3人, おとな3人)
 8月19日 「発見!「なつ」の表情」
 1組2人(子ども1人, おとな1人)
 8月26日 「発見!「なつ」の表情」
 1組4人(子ども2人, おとな2人)
 9月23日 「座れないイス」
 2組6人(子ども3人, おとな3人)
 9月30日 「座れないイス」
 1組3人(子ども2人, おとな1人)
 10月14日 「アート・サファリ」
 1組4人(子ども2人, おとな2人)
 10月28日 「アート・サファリ」
 6組18人(子ども11人, おとな7人)
 11月18日 「アート・サファリ」
 5組14人(子ども7人, おとな7人)
 11月25日 「アート・サファリ」
 1組4人(子ども2人, おとな2人)
 12月 9日 「クリスマス・プレゼント」
 6組20人(子ども11人, おとな9人)
 12月16日 「クリスマス・プレゼント」
 3組9人(子ども5人, おとな4人)



「アート・サファリ」のひとこま

〈美術講座〉

	月 日	講座題目	講師
《「the アーティスト」開催記念アーティスト・トーク》 展示室 14:00-15:00			
2007年	3月 3日	アーティスト・トーク	野見山暁治氏(画家)
	3月10日	アーティスト・トーク	添田和信氏(陶芸家)
	3月24日	アーティスト・トーク	中西秀明氏(彫刻家)
《「the ヌード」開催記念美術講座》 講座室 14:00-15:30			
	5月26日	ゴヤ《裸のマハ》誕生—神話から歴史へ—	大高保二郎氏(早稲田大学教授)
	6月 9日	ルノワールのヌード—水浴図の展開—	島田紀夫
	6月23日	日本ヌード事始め	森山秀子
《「コレクションによる旅」開催記念美術講座》 講座室 14:00-15:30			
	9月 1日	広重の東海道五十三次にみる「絵になる景観」	萩島哲氏(九州大学名誉教授)
	9月 8日	黒田清輝, 浅井忠とフランス芸術家村	荒屋鋪透氏(ポーラ美術館学芸部長)
	9月15日	鈴木其一の西遊記 江戸から畿内, そして肥前へ	平間理香
《「松本英一郎展」開催記念美術講座》 講座室 14:00-15:30			
	10月27日	松本英一郎の生涯と芸術	植野健造
	11月10日	松本英一郎とその時代	今井信吾氏(独立美術協会会員・多摩美術大学教授)



トーク風景

〈ギャラリートーク〉

毎週土曜日は当館サポートボランティア学芸員が、また日曜日は学芸員が、本館または別館の展示室で実施した。

時間：14:00－14:20

〈学習における美術館の利用など〉

- 2007年 6月7, 8日(木, 金) 久留米市立江南中学校3年生「職場体験学習」——4名(対応＝後藤, 植野)
6月29日(金) 久留米市立安武小学校6年生「久留米の偉人：坂本繁二郎」——6名(対応＝植野)
7月31日(木) 九附連図画工作・美術部会久留米大会「石橋美術館と石橋コレクションについて」
——20名(対応＝植野)
7月31日, 8月1日(火, 水) 久留米信愛女学院中学校3年生「職場体験学習」
——2名(対応＝森山, 平間)
9月13, 14日(木, 金) 久留米市立良山中学校3年生「職場体験学習」——10名(対応＝後藤)
11月 6日(火) 小郡市・三井郡中学校美術教師研修会「石橋美術館の教育普及活動について」
——7名(対応＝後藤)

〈館外活動〉

- 2007年 2月12日(月・振) 福岡県立美術館「生活のくかたち」―豊田勝秋のあゆみに見る昭和の工芸」展
「スペシャル・ギャラリートーク」 於：福岡県立美術館——約10名(担当＝植野)
8月 4日(土) 北九州市立美術館「田園の輝き―児島善三郎」展講演会 於：北九州市立美術館
講演「日本洋画史における児島善三郎」——約50名(担当＝植野)
10月 4日(木) 久留米大学「久留米学」 於：久留米大学
講義「筑後と九州の画家たち」——約200名(担当＝植野)
10月14日(日) 柳川市史編さん係「平成19年度柳川市史歴史講座」 於：柳川市立大和公民館
講演「柳川の近代美術 洋画と彫刻を中心に」——約30名(担当＝植野)

〈夏休み子どもプログラム2007〉

2007年7月15日(日)―9月17日(月・祝), 企画展「コレクションによる旅 美術街道五十三次」にあわせ, すごろくマップやクイズ・課題が記載されたパンフレットを受付で配布。また久留米市在住の美術作家・オーギ・カナエ氏の助言と協力を得て, 7月25日, 8月17日の2回, 食べられる名画?づくりに挑戦する親子実技講座を実施。完成した作品は1階ギャラリーに展示。60名の親子が参加した。さらに「絵本カーニバル in FUKUOKA 2007」の一環として, 絵本作家スズキ・コージによるワークショップを8月11日, 飯野和好によるトークイベントを8月12日に実施。97名が参加。



親子実技講座



絵本作家によるワークショップ



同トークイベント

〈サポートボランティア〉

2007年度の登録は26名。年間14回の研修を受講し, 坂本アトリエ解説, ギャラリートーク, 講座やクイズなどのイベント補助など, 約7,000名の来館者に対応した。

サポートボランティア:

秋元和恵, 岩橋和子, 牛島千春, 白井理恵, 上村明子, 清原仁美, 隈早苗, 神崎幸子, 菰原貴子, 坂井弘美, 高橋有嘉子, 高橋由希子, 高本元子, 棚町薫子, 筒井つや子, 豊福真知子, 仲上祥世, 福田悉子, 福山清美, 本田博子, 牟田麻里耶, 森房乃, 諸富孝子, 矢ヶ部節子, 柳秀昭, 杠和子 以上26名(50音順 敬称略)

〈博物館実習生受入〉

学芸員資格取得のための博物館実習を下記のように実施した。

期間：2007年7月10日(火)－8月26日(日)

実習生：8名(7校)

実習内容：

	1	2	3	4	5	6
	9:30-10:45	10:45-12:00	13:00-14:15	14:15-15:30	15:30-16:45	16:45-17:30
8月21日 (火)	ガイダンス・総論 (平野・後藤)	美術館運営 (平野・後藤)	展示企画 (平間)	展示実習 (後藤・平間)	展示実習 (後藤・平間)	質疑・応答 ノートまとめ
8月22日 (水)	施設見学 (後藤・平間)	課題実施 (後藤)	作品調査演習 (平間)	作品調査実習 (植野)	展覧会概説 (森山)	質疑・応答 ノートまとめ
8月23日 (木)	作品管理 (森山)	教育普及 (後藤)	文献・情報検索 (森山)	文献調査1 (森山)	文献調査2 (森山)	質疑・応答 ノートまとめ
8月24日 (金)	展覧会展示プラン (植野)	展覧会カタログ (植野)	解説作成1 (植野)	解説作成2 (植野)	解説作成3 (植野)	質疑・応答 ノートまとめ
8月25日 (土)	発表1 (森山・後藤)	発表2 (森山・後藤)	リーフ作成1 (森山)	リーフ作成2 (森山)	リーフ作成3 (森山)	質疑・応答 終了会
8月26日 (日)	リーフ作成4 (平間)	リーフ作成5 (平間)	リーフ作成6 (平間)	リーフ作成7 (平間)	リーフ設置 (後藤)	質疑・応答 終了会

※上記に7月10・11日(展示替え)，8月11日(ワークショップ)，7月25日から8月17日(親子実技講座)の4日間を加え計10日間の実習を行った。また実習生が作成した解説リーフレットは展示室内に設置した。

入場者数

ブリヂストン美術館

月	開館日数	有 料				無 料		総 計	一日平均
		一般	大・高生	団体	合計		(中・小生)		
1	26	8,078	861	81	9,020	1,392	(211)	10,412	400
2	24	7,039	554	264	7,857	1,442	(249)	9,299	387
3	27	7,556	636	330	8,522	1,953	(350)	10,475	388
4	25	4,937	433	287	5,657	1,608	(286)	7,265	291
5	27	5,770	585	276	6,631	1,849	(302)	8,480	314
6	26	6,044	593	229	6,866	2,421	(429)	9,287	357
7	26	6,572	830	171	7,573	2,762	(531)	10,335	398
8	28	6,975	664	49	7,688	3,769	(1,055)	11,457	409
9	26	7,795	552	100	8,447	8,146	(363)	16,593	638
10	22	9,300	593	441	10,334	5,285	(228)	15,619	710
11	22	11,363	901	383	12,647	13,607	(184)	26,254	1,193
12	26	4,937	538	236	5,711	3,164	(251)	8,875	341
合計	305	86,366	7,740	2,847	96,953	47,398	(4,439)	144,351	473

※下期無料入場者には、新聞社提携による購読者招待を含むが、該当分は後日入金済み。

ブリヂストン美術館ホールイベント

	イベント名	開催日時	入場料	入場者数	出演者
1	ボリビアの歴史と音楽	2.3(土) 14:30/18:30	前売 2500円 当日 3000円	昼の部 130人 夜の部 130人	木下尊惇 菱本幸二 橋本 仁 福田大治 クラウディア・ゴサルベス
2	ジャワのガムランと舞踊	4.29(日祝)14:00	前売 2500円 当日 3000円	130人	ランバンサリ 小島夕季 リアント 川島未未
3	箏篋 復元と演奏	5.12(土)14:00	前売 2000円 当日 2500円	130人	木戸敏郎 西 陽子
4	和楽器コンサート	6.23(土)14:00	前売 2500円 当日 3000円	83人	山本普乃 上原潤之助 染谷京子 森重行敏
5	中世ヨーロッパの放浪楽師2	7.16(月祝)14:00	前売 2500円 当日 3000円	98人	辻 康介 久保田潤子 駒澤 隆 近藤治夫
6	ザンジバル島の大衆音楽 「ターラブ」を知る！	7.18(水)19:00	前売 2800円 当日 3300円	92人	富永智津子 CMC (アリオ音楽財団)
7	雅楽入門 雅なる笙の響き	9.16(日)15:00	前売 2500円 当日 3000円	80人	宮田まゆみ (梶本音楽事務所)
8	クレーの詩・クレーの音楽	10.21(日)14:00	前売 2500円 当日 3000円	130人	谷川俊太郎 新藤 信 (日本パウル・クレー協会)
9	地球の風ライブ 冬至のコンサート	12.22(土) 14:00/18:00	前売 2500円 当日 3000円	昼の部 130人 夜の部 130人	小川和隆 八木倫明 戸川藍山

石橋美術館

月	開館 日数	有 料				無 料			総計	一日平均
		一般	大高生	団体	合計	中小生	招待他	合計		
1	25	906	33	108	1,047	893	75	968	2,015	81
2	25	1,122	48	164	1,334	833	112	945	2,279	91
3	27	945	42	834	1,821	250	345	595	2,416	89
4	22	1,889	45	950	2,884	95	486	581	3,465	158
5	27	3,149	68	617	3,834	383	730	1,113	4,947	183
6	26	2,525	66	1,118	3,709	141	1,132	1,273	4,982	192
7	22	1,482	58	896	2,436	313	890	1,203	3,639	165
8	28	1,624	84	310	2,018	1,072	423	1,495	3,513	125
9	22	1,367	69	638	2,074	228	1,134	1,362	3,436	156
10	27	1,248	39	666	1,953	275	787	1,062	3,015	112
11	22	1,188	61	655	1,904	184	1,554	1,738	3,642	166
12	24	600	30	179	809	875	77	952	1,761	73
合計	297	18,045	643	7,135	25,823	5,542	7,745	13,287	39,110	132

絵画 Paintings

レジェ, フェルナン

LEGER, Fernand

1861-1955

抽象的コンポジション

1919年

油彩・カンヴァス

156.0×11.0cm

右下に署名

裏面に書込

外洋219

Abstract Composition

1919

Oil on canvas

156.0×11.0cm

Signed lower right: 19 / F. LÉGER

Inscribed on the reverse: Peinture murale / no.319 / Musée FLéger Biot N. Leger

来歴 Prov.: 2007, Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh.: 1957, Kunsthau, Zurich, no. 23; 1968, Museum des 20 Jahrhunderts, Vienna, no. 9; 1970, Tate Gallery, London, no. 12; 1971, Grand Palais, Paris, no. 41; 1972年, 西武百貨店 / 名鉄百貨店 / 福岡県文化会館, no. 11; 1980, Staatliche Kunsthalle, Berlin, no. 21; 1981, Albright Knox Art Gallery, Buffalo / Musée des Beaux-Arts, Montreal / Museum of Fine Arts, Dallas, no. 13.

文献 Bibl.: 1962, R. L. Delevoy, *Léger*, Paris / Genève, p. 72; 1970, C. Green, "Léger and L'Esprit Nouveau" in *Léger and Purist Paris*, Tate Gallery, London, p. 53; 1990, G. Bauquier, *Fernand Léger, catalogue raisonné 1903-1919*, Paris, no. 176.



カンディンスキー, ワシリー

KANDINSKY, Wassily

1866-1944

二本の線

1940年

ミクストメディア・カードボード

60.0×70.0cm

左下にモノグラムおよび制作年

外洋217

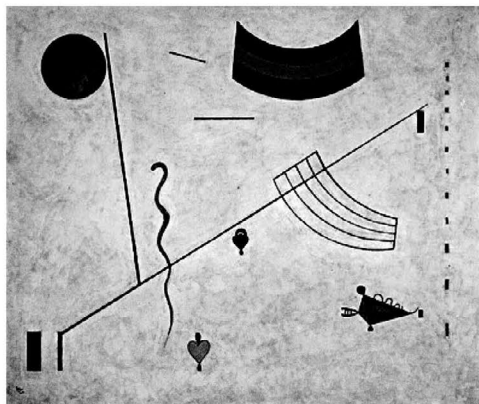
Two Lines

1940

Mixed media on cardboard

60.0×70.0cm

Monogram and "40" on the lower left



来歴 Prov.: Galerie Beyeler, Basel; Galerie Karl Flinker, Paris; Davlyn Gallery, New York; Sotherby's New York, sale May 21 st, 1981, lot no.566; 2007, Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh.: 1972, Galerie Karl Flinker, Paris, no.32.

文献 Bibl.: Hans K. Roethel and Jean K. Benjamin, *Kandinsky*, Verlag C.H. Beck, no.1117; 1958, W. Grohmann, *Wassily Kandinsky, Life and Work*, translated from the German to English by N. Guterman, New York, no.679; 1987年, ハンス・K・レーテル, ジーン・K・ベンジャミン編, 西田秀穂, 有川治男訳『カンディンスキー全油彩絵目録』no.1117.

エミリー・カーム・ウンワリィ

Emily Kame Kngwarreye

c.1910-1996

春の風景

1993年

合成ポリマー絵具・ベルギーリネン

122.0×152.0cm

裏面に書込

外洋224

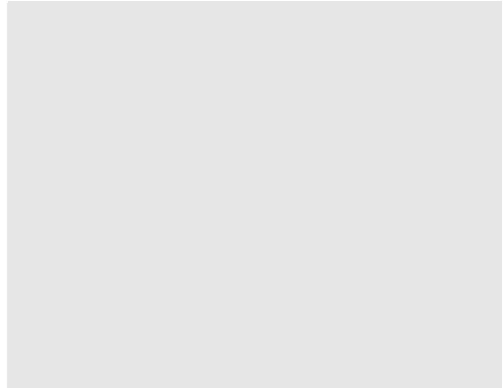
Spring Landscape

1993

Synthetic polymer paint on Belgian linen

122.0×152.0cm

Inscribed on the reverse; Emily Kngwarreye commissioned by Delmore Gallery



来歴 Prov. : Private collection, Alice Springs, NT; Private collection, Perth; Private collection, Sydney; 2007, Ishibashi Foundation.

無題

1996年

合成ポリマー絵具・アーティストポリエステル

185.0×149.0cm

外洋223

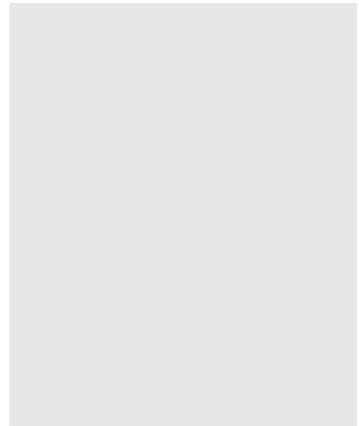
Untitled

1996

Synthetic polymer paint on artist's polyester

185.0×149.0cm

来歴 Prov. : CAAMA Gallery, Alice Springs, NT; Private collection; Private collection, Sydney; 2007, Ishibashi Foundation.



キャサリン・ペチャリ

Kathleen Petyarre

c.1940-

棘魔王トカゲのドリーミング

2003年

合成ポリマー絵具・ベルギーリネン

122.0×183.0cm

裏面に署名

外洋218

Thorny Devil Lizard Dreaming

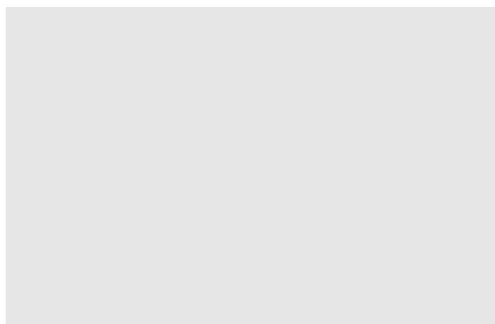
2003

Synthetic polymer paint on Belgian linen

122.0×183.0cm

Signed on the reverse: KATHLEEN PETYARRE

来歴 Prov. : 2007, Ishibashi Foundation.



スカリー, ショーン

SCULLY, Sean

1945-

12.15.1993

1993年

水彩・紙

38.1×45.6cm

右下に署名

裏面に書込

外洋222

12.15.1993

1993

Watercolor on paper

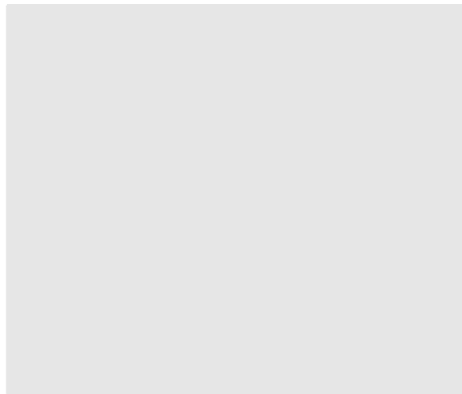
38.1×45.6cm

Signed lower right: Sean Scully 12. 15. 93

Inscribed on the reverse : 7

来歴 : 石橋幹一郎; 株式会社ブリヂストン; 2007年, 石橋財団

Prov. : ISHIBASHI Kan'ichiro; Bridgestone Corporation; 2007, Ishibashi Foundation.



ティラーズ, イマンツ

TILLERS, Imants

1950-

自然は語る D

2005年

合成ポリマー絵具, グワッシュ・16枚のカンヴァスボード

102.0×142.0cm

外洋220

Nature Speaks D

2005

Synthetic polymer paint, gouache on 16 canvas boards

102.0×142.0cm

来歴 Prov.: 2007, Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh.: 2006, プリヂストン美術館「プリズム：オーストラリア現代美術展」no.31

自然は語る H

2006年

合成ポリマー絵具, グワッシュ・16枚のカンヴァスボード

102.0×142.0cm

外洋221

Nature Speaks H

2006

Synthetic polymer paint, gouache on 16 canvas boards

102.0×142.0cm

来歴 Prov.: 2007, Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh.: 2006, プリヂストン美術館「プリズム：オーストラリア現代美術展」no.32

ドロシー・ナパンガーディ

Dorothy Napangardi

c.1950-

ミナミナの塩

2007年

合成ポリマー絵具・ベルギーリネン

168.0×244.0cm

裏面に署名

外洋225

Salt on Mina Mina

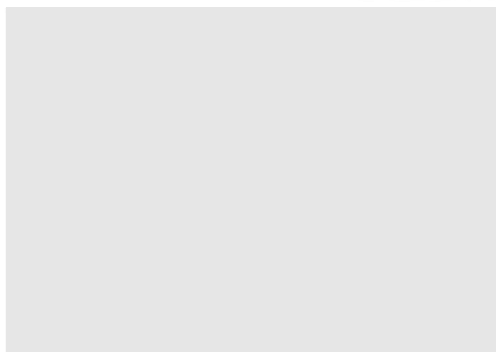
2007

Synthetic polymer paint on Belgian linen

168.0×244.0cm

Signed on the reverse: Dorothy

来歴 Prov. : 2007, Ishibashi Foundation.



アビー・ロイ・ケマーレ

Abie Loy Kemarre

1972-

ブッシュ・リーフ・ドリーミング

2007年

合成ポリマー絵具・ベルギーリネン

182.0×182.0cm

裏面に署名

外洋226

Bush Leaf Dreaming

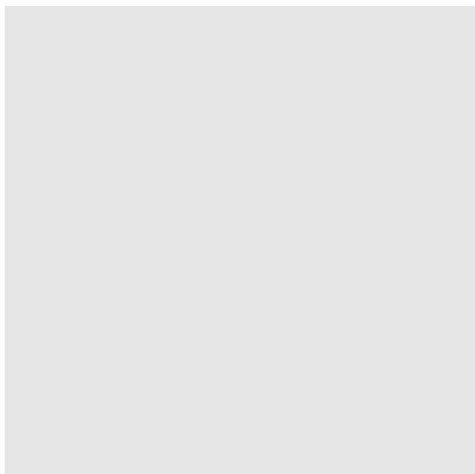
2007

Synthetic polymer paint on Belgian linen

182.0×182.0cm

Signed on the reverse: Abie Loy

来歴 Prov. : 2007, Ishibashi Foundation.



小杉未醒
KOSUGI Misei
1881-1964

戊辰秋日
1928年
油彩・カンヴァス
80.2×65.2cm
左下に年記・署名：戊辰秋日小杉未醒謹作
日洋545

Autumn
1928
Oil on canvas
80.2×65.2cm
Dated and signed lower left

来歴：個人蔵，東京；2007年，石橋財団に寄贈
Prov. : Private Collection, Tokyo; 2007, donated to the Ishibashi Foundation.



安井曾太郎
YASUI, Sotaro
1888-1955

湯河原風景
水彩・紙
19.9×27.0cm
右下に印章：曾（白文朱方印）
裏面にラベル：安井曾太郎筆 / 湯河原風景 / 昭和三九年六月
安井慶一郎鑑
日洋550

Landscape, Yugawara
Watercolor on paper
19.9×27.0cm
Sealed lower right
Label pasted on the reverse

来歴：石橋幹一郎；株式会社ブリヂストン；2007年，石橋財団
Prov. : ISHIBASHI Kan'ichiro; Bridgestone Corporation; 2007, Ishibashi Foundation.



古賀春江
KOGA Harue
1895-1933

曲衆につく
1923年
油彩・カンヴァス
日洋546

Buddhist Service
1923
Oil on canvas
89.0×115.0cm

来歴：個人蔵，久留米；2007年，石橋財団
Prov. : Private Collection, Kurume; 2007, Ishibashi Foundation.



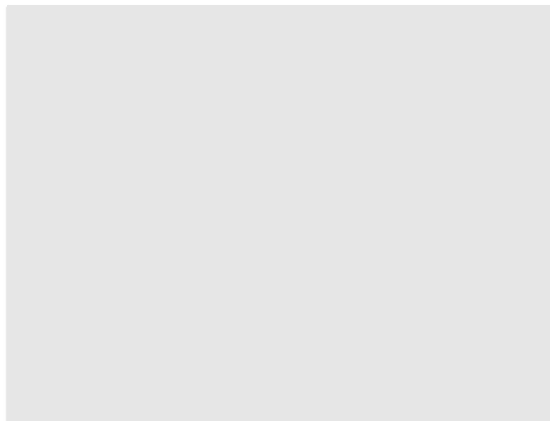
展覧会歴 Exh. : 1923年，三越「第1回アクション展」；1934年，久留米商工会議所「第23回来目会展特陳」no.18; 1975年，福岡県文化会館「古賀春江回顧展」no.55; 1986年，石橋美術館 / プリヂストン美術館「古賀春江—前衛画家の歩み」no.10; 1989年，有楽町朝日ギャラリー他「大正新興美術の息吹アクション展」；1996年，茨城県近代美術館 / 石橋美術館「麗しき前衛の時代—古賀春江と三岸好太郎」no.k-14; 2001年，プリヂストン美術館 / 石橋美術館「古賀春江創作の原点」no.19

文献 Bibl. : 1923年，『中央美術』9-5, p.184; 1923年，『みづゑ』219号，図版，p.28-29; 1923年，『みづゑ』220号，p.25; 1976年，『近代の美術(36)古賀春江』至文堂，p.44

伊東静尾
ITO Shizuo
1902-1971

春庭
1936年
油彩・カンヴァス
112.6×145.5cm
左下に年記・署名：1936. S. ITO
日洋546

Garden in Spring
1936
Oil on canvas
112.6×145.5cm
Dated and signed lower left



来歴：個人蔵，福岡；2007年，石橋財団に寄贈
Prov. : Private Collection, Fukuoka; 2007, donated to the Ishibashi Foundation.

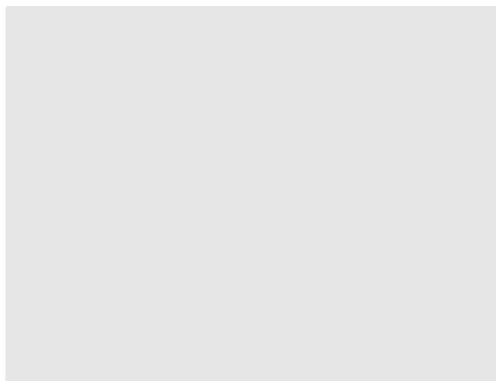
展覧会歴 Exh. : 1936年，東京府美術館他「第23回二科展」；1984年，石橋美術館「伊東静尾展」no.7

田村一男
TAMURA, Kazuo
1904-1997

那須山麓
油彩・カンヴァス
32.0×41.0cm
右下に署名：KAZUO / Tamura
裏面に書込：那須山麓 / 田村一男
日洋551

Foot of the Nasu Mountain
Watercolor on paper
32.0×41.0cm
Signed lower right
Inscribed on the reverse

来歴：石橋幹一郎；株式会社ブリヂストン；2007年，石橋財団
Prov. : ISHIBASHI Kan'ichiro; Bridgestone Corporation; 2007, Ishibashi Foundation.

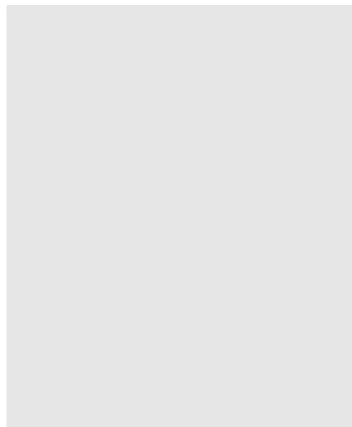


村井正誠
MURAI, Masanari
1905-1999

子供
1952年頃
油彩・板
45.6×37.8cm
右下に署名：maçanari
日洋547

Child
c. 1952
Oil on panel
45.6×37.8cm
Signed lower right

来歴：村井伊津子，東京；2007年，石橋財団に寄贈
Prov. : MURAI Itsuko, Tokyo; 2007, donated to the Ishibashi Foundation.



モードの女

1976年

油彩・カンヴァス

165.3×133.8cm

左下に署名：MAÇANARI

裏面木枠に書込：MAÇANARI / モードの女

日洋548

Woman in Mode

1976

Oil on canvas

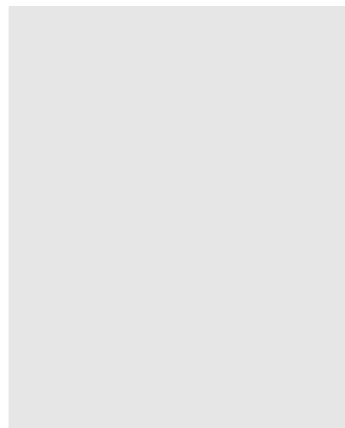
165.3×133.8cm

Signed lower left

Inscribed on the stretcher

来歴：村井伊津子，東京；2007年，石橋財団に寄贈

Prov. : MURAI Itsuko, Tokyo; 2007, donated to the Ishibashi Foundation.



人びと

1983年

油彩・カンヴァス

227.3×181.8cm

左下に署名：MAÇANARI

裏面木枠に書込：MAÇANARI / 1983

日洋549

Persons

1983

Oil on canvas

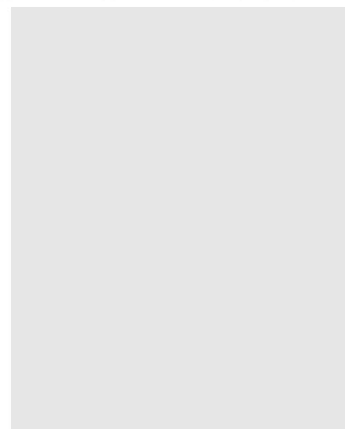
227.3×181.8cm

Signed lower left

Inscribed on the stretcher

来歴：村井伊津子，東京；2007年，石橋財団

Prov. : MURAI Itsuko, Tokyo; 2007, Ishibashi Foundation.



白髪一雄

SHIRAGA, Kazuo

1924-2008

白い扇

1965年

油彩・カンヴァス

181.4×272.4cm

左下に署名：白髪

裏面に書込：白い扇 / 白髪一雄 / The white fan / Kazuo Shiraga / 1965

日洋543

White Fan

1965

Oil on canvas

181.4×272.4cm

Signed lower left

Inscribed on the reverse

来歴：2007年，石橋財団

Prov. : 2007, Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh. : 1966, Union Carbide Building, N.Y / 東京国立近代美術館 / 他「1 st Japan Art Festival [第1回日本芸術祭]」；1975, 兵庫県立近代美術館「兵庫の美術家—抽象の4人」；1985, 兵庫県立近代美術館「白髪一雄—抽象のダイナミズム」；1993, 京阪ギャラリー・オブ・アーツ・アンド・サイエンス・守口「具体美術の旗手 白髪一雄展」；1993, Musee d'Art Moderne Rectoire des Jacobins, Ville de Toulouse, *KAZUO SHIRAGA*

観音普陀落浄土

1972年

油彩・カンヴァス

130.3×194.0cm

左下に署名：白髪

裏面に書込：「観音普陀落浄土」昭和四十七年五月作白髪一雄 /

Kazuo Shiraga 1972. 5

日洋544

Kannon Fudara Jodo

1972

Oil on canvas

130.3×194.0cm

Signed lower left

Inscribed on the reverse

来歴：2007年，石橋財団

Prov. : 2007, Ishibashi Foundation.

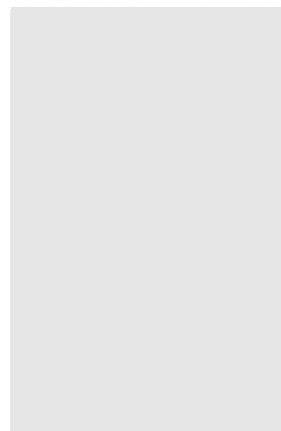
展覧会歴 Exh. : 1993, 喜多美術館，奈良「白髪一雄展」；1993, 京阪ギャラリー・オブ・アーツ・アンド・サイエンス・守口「具体美術の旗手 白髪一雄展」；2001, 兵庫県立近代美術館「アクションペインター白髪一雄展」no.53

今井俊満
IMAI, Toshimitsu
1928-2002

Eclipse
1964年
油彩・カンヴァス
116.0×72.5cm
日洋552

Eclipse
1964
Oil on canvas
116.0×72.5cm

来歴：2007, 石橋財団
Prov. : 2007, Ishibashi Foundation.



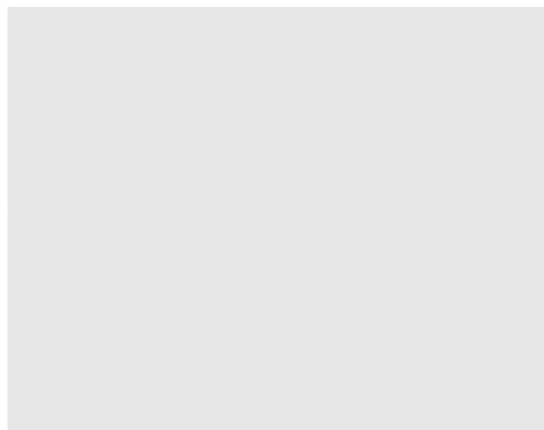
松本英一郎
MATSUMOTO, Eiichiro
1932-2001

退屈な風景 茶畑
1974年
油彩・カンヴァス
127.7×159.8cm
右下に署名・年記：'74ま
裏面右に書込：退屈な風景 / 茶畑 / 一九七四年 /
松本英一郎
裏面出品票：TOKYO BIENNALE'74第11回日本国際美術展 /
退屈な風景 No.8
日洋553

Tedious Landscape, Tea Plantation
1974
Oil on canvas
127.7×159.8cm
Signed and dated lower right
Inscribed on the reverse

来歴：松本泰子, 八王子; 2007年, 石橋財団
Prov. : Matsumoto Yasuko, Hachioji; 2007, Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh.: 1974, 東京都美術館 / 京都市美術館「第11回日本国際美術展」(「退屈な風景 No.8」); 2007, 石橋美術館「退屈な風景 松本英一郎展」no.21



平均的肥満体 No.9-J

1967年

油彩・カンヴァス

162.3×130.2cm

裏面右上に書込：小平市たかの台一三八八 / 松本英一郎 / 平均的肥満体 No.9 J
日洋554

Average Fat Body No.9-J

1967

Oil on canvas

162.3×130.2cm

Inscribed on the reverse

来歴：松本泰子，八王子；2007年，石橋財団に寄贈

Prov. : Matsumoto Yasuko, Hachioji; 2007, donated to the Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh. : 1967, 東京都美術館 / 他「第35回独立展」; 2007, 石橋美術館
「退屈な風景 松本英一郎展」 no.12

さくら・うし95-1

1995年

油彩・カンヴァス

130.5×162.3cm

右下に署名・年記：'95ま

裏面中央に書込：さくら，うし95-1 / 松本英一郎 / 1995年
日洋555

Cherry Blossom and Cow 95-1

1995

Oil on canvas

130.5×162.3cm

Signed and dated lower right

Inscribed on the reverse

来歴：松本泰子，八王子；2007年，石橋財団に寄贈

Prov. : Matsumoto Yasuko, Hachioji; 2007, donated to the Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh. : 1995, 日本橋高島屋 / なんば高島屋 / 京都四条高島屋 / 名古屋丸栄スカイル「第17回十果会展」; 2007,
石橋美術館「退屈な風景 松本英一郎展」 no.39

さくら・うし95-2

1995年

油彩・カンヴァス

130.7×162.3cm

右下に署名・年記：'95ま

裏面中央に書込：さくら・うし95-2 / 松本英一郎 / 1995年
日洋556

Cherry Blossom and Cow 95-2

1995

Oil on canvas

130.7×162.3cm

Signed and dated lower right

Inscribed on the reverse

来歴：松本泰子，八王子；2007年，石橋財団に寄贈

Prov. : Matsumoto Yasuko, Hachioji; 2007, donated to the Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh. : 1995, 日本橋高島屋 / なんば高島屋 / 京都四条高島屋 / 名古屋丸栄スカイル「第17回十果会展」；2007,
石橋美術館「退屈な風景 松本英一郎展」no.40

花と雲と牛

1998年

油彩・カンヴァス

96.3×129.5cm

右下に署名・年記：1998ま

裏面右に書込：花と雲と牛 / 一九九八年 / 松本英一郎

裏面出品票：第56回独立展 / 花と雲と牛

日洋557

Flower, Cloud and Cow

1998

Oil on canvas

96.3×129.5cm

Signed and dated lower right

Inscribed on the reverse

来歴：松本泰子，八王子；2007年，石橋財団に寄贈

Prov. : Matsumoto Yasuko, Hachioji; 2007, donated to the Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh. : 1998, 東京都美術館 / 他「第66回独立展」；2007, 石橋美術館「退屈な風景 松本英一郎展」no.44

退屈な風景(中山)

1981年

水彩・紙

Watercolor on paper

34.0×50.5cm

右下に署名・年記：'81ま

裏面左に書込：退屈な風景(中山)

日洋558

Tedious Landscape, Nakayama

1981

Watercolor on paper

34.0×50.5cm

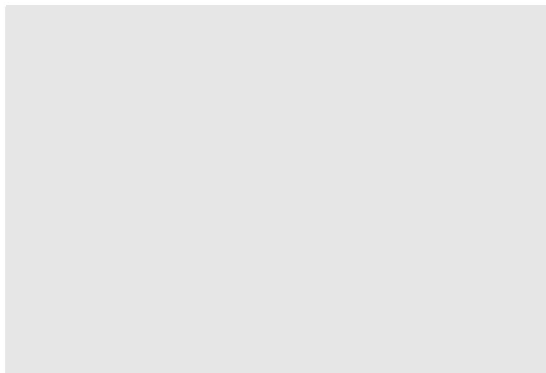
Signed and dated lower right

Inscribed on the reverse

来歴：松本泰子，八王子；2007年，石橋財団に寄贈

Prov. : Matsumoto Yasuko, Hachioji; 2007, donated to the Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh. : 2007, 石橋美術館「退屈な風景 松本英一郎展」no.52



頂上の風景

1988年

水彩・紙

25.8×36.7cm

右下に署名・年記：頂上の風景ま

裏面右に書込：結界1988

日洋559

Landscape of the Top

1988

Watercolor on paper

25.8×36.7cm

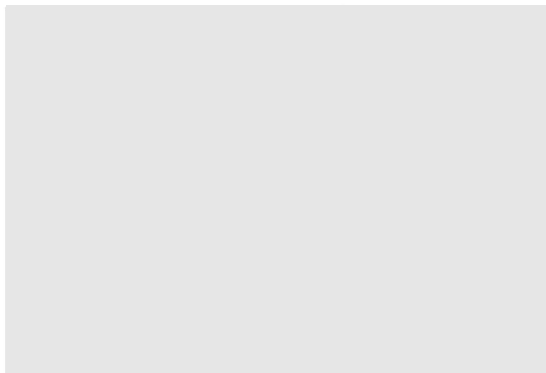
Signed and dated lower right

Inscribed on the reverse

来歴：松本泰子，八王子；2007年，石橋財団に寄贈

Prov. : Matsumoto Yasuko, Hachioji; 2007, donated to the Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh. : 2007, 石橋美術館「退屈な風景 松本英一郎展」no.55



さくら・うし

1992年

水彩・紙

36.2×54.0cm

右下に署名・年記：さくら・うし / ま'92

裏面右に書込：さくら・うし / 松本英一郎

日洋560

Cherry Blossom and Cow

1992

Watercolor on paper

36.2×54.0cm

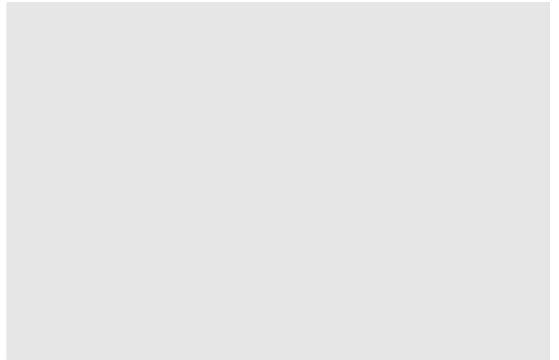
Signed and dated lower right

Inscribed on the reverse

来歴：松本泰子，八王子；2007年，石橋財団に寄贈

Prov. : Matsumoto Yasuko, Hachioji; 2007, donated to the Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh. : 2007, 石橋美術館「退屈な風景 松本英一郎展」no.56



さくら・うし

1992年

水彩・紙

37.5×52.7cm

右下に署名・年記：'92ま

裏面に書込：23

日洋561

Cherry Blossom and Cow

1992

Watercolor on paper

37.5×52.7cm

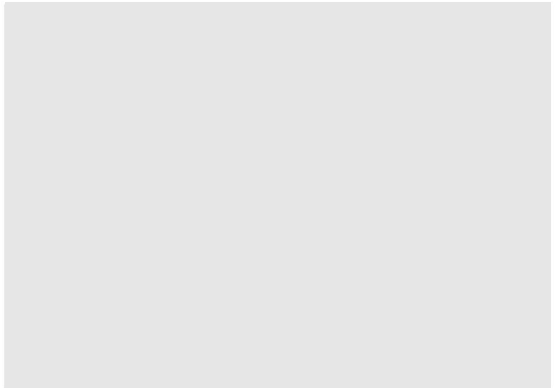
Signed and dated lower right

Inscribed on the reverse

来歴：松本泰子，八王子；2007年，石橋財団に寄贈

Prov. : Matsumoto Yasuko, Hachioji; 2007, donated to the Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh. : 2007, 石橋美術館「退屈な風景 松本英一郎展」no.59



さくら・うし

1995年

水彩・紙

48.5×61.3cm

右下に署名・年記：'95.6ま

日洋562

Cherry Blossom and Cow

1995

Watercolor on paper

48.5×61.3cm

Signed and dated lower right

来歴：松本泰子，八王子；2007年，石橋財団に寄贈

Prov. : Matsumoto Yasuko, Hachioji; 2007, donated to the
Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh. : 2007, 石橋美術館「退屈な風景 松本英一郎展」no.63

雑木林・茶畑・飛行船

1997年

水彩・紙

29.0×47.8cm

左下に署名・年記・書込：ま1997雑木林・茶畑・飛行船

右下に印：「ま」（朱字方印）

日洋563

Thicket, Tea Plantation and Airship

1997

Watercolor on paper

29.0×47.8cm

Signed, dated and inscribed lower left

Stamped lower right

来歴：松本泰子，八王子；2007年，石橋財団に寄贈

Prov. : Matsumoto Yasuko, Hachioji; 2007, donated to the Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh. : 2007, 石橋美術館「退屈な風景 松本英一郎展」no.64

久留米梅林寺金剛窟

1984年

鉛筆、水彩・紙

26.7×37.7cm

右下に署名・印：まつもとえいいちろう / 「ま」（朱字方印）

左下に書込：クルメ梅林寺金剛窟 / 1984 5.3

日洋564

Kongokutsu of Bairinji Temple, Kurume

1984

Watercolor on paper

26.7×37.7cm

Signed and stamped lower right

Inscribed lower left

来歴：松本泰子，八王子；2007年，石橋財団に寄贈

Prov. : Matsumoto Yasuko, Hachioji; 2007, donated to the Ishibashi Foundation.

荻野康児

OGINO, Koji

1897-1973

静物

グワッシュ・紙

37.9×53.0cm

左下に署名：K.OGINO.

参考17

Still Life

Gouache on paper

37.9×53.0cm

Signed lower left

来歴：石橋幹一郎；株式会社ブリヂストン；2007年，石橋財団

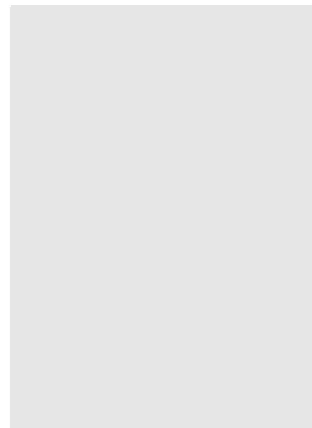
Prov. : ISHIBASHI Kan'ichiro; Bridgestone Corporation; 2007, Ishibashi Foundation.

井上正勝
INOUE, Masakatsu
1900-1985

スケート
1964年
油彩・カンヴァス
45.7×33.7cm
左下に署名：m.Inoue
裏面に書込：「スケート」 / 井上正勝 / 昭和三十九年
参考14

Skating
1964
Oil on canvas
45.7×33.7cm
Signed lower left
Inscribed on the reverse

来歴：石橋幹一郎；株式会社ブリヂストン；2007年，石橋財団
Prov. : ISHIBASHI Kan'ichiro; Bridgestone Corporation; 2007, Ishibashi Foundation.

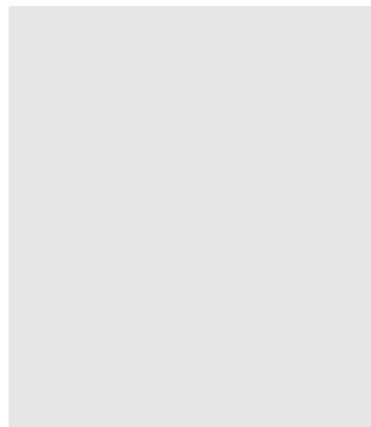


谷出孝子
TANIDE, Takako
1907-1987

花
油彩・カンヴァス
52.8×45.5cm
右下に署名：Taka Tanide
参考16

Flowers
Oil on canvas
52.8×45.5cm
Signed lower right

来歴：石橋幹一郎；株式会社ブリヂストン；2007年，石橋財団
Prov. : ISHIBASHI Kan'ichiro; Bridgestone Corporation; 2007, Ishibashi Foundation.

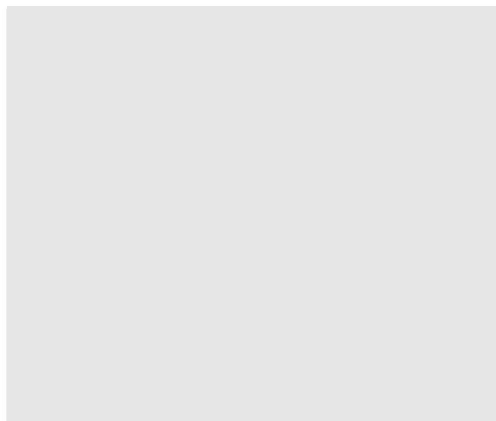


木村辰彦
KIMURA, Tatsuhiko
1916-1973

和蘭石竹
油彩・カンヴァス
45.5×53.0cm
右下に署名：Kimura
裏面木枠に書込：和蘭石竹 / 木村辰彦
参考15

Carnations
Oil on canvas
45.5×53.0cm
Signed lower right
Inscribed on the stretcher

来歴：石橋幹一郎；株式会社ブリヂストン；2007年，石橋財団
Prov. : ISHIBASHI Kan'ichiro; Bridgestone Corporation; 2007, Ishibashi Foundation.



ブラック, ジョルジュ

BRAQUE, Georges

1882-1963

『ジョルジュ・ブラックー彫刻と銅版画新作品集』の口絵

エッチング

29.9×25.0cm(画面); 38.3×28.7cm(紙)

右下に署名

外版429

Frontispiece of *Georges Braque — Nouvelles sculptures et plaques gravées*

Etching

29.9×25.0cm (image); 38.3×28.7cm (paper)

Signed lower right : GBraque

来歴：石橋幹一郎；株式会社ブリヂストン；2007年，石橋財団

Prov. : ISHIBASHI Kan'ichiro; Bridgestone Corporation; 2007, Ishibashi Foundation.

文献 Bibl. : 1982, D. Vallier, *Braque, l'œuvre gravé, catalogue raisonné*, Paris, p.218.



アルプ, ハンス

ARP, Hans

1886-1966

For Saint Gaiden

シルクスクリーン

41.1×37.3cm(画面); 65.0×49.9cm(紙)

左下に署名

外版426

For Saint Gaiden

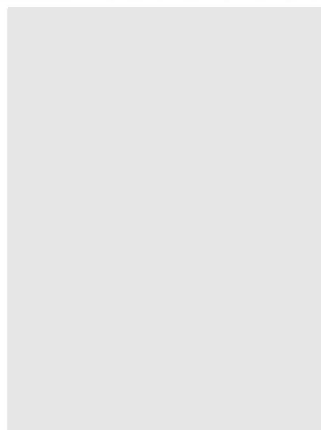
Silkscreen

41.1×37.3cm (image); 65.0×49.9cm (paper)

Signed lower left : ARP

来歴：石橋幹一郎；株式会社ブリヂストン；2007年，石橋財団

Prov. : ISHIBASHI Kan'ichiro; Bridgestone Corporation; 2007, Ishibashi Foundation.



シャガール, マルク

CHAGALL, Marc

1887-1985

赤いブーケ

1969年

リトグラフ

55.0×39.1cm (画面); 75.9×53.5cm (紙)

右下に署名

外版427

The Red Bouquet

1969

Lithograph

55.0×39.1cm (image); 75.9×53.5cm (paper)

Signed lower right : Marc Chagall

来歴：石橋幹一郎；株式会社ブリヂストン；2007年，石橋財団

Prov. : ISHIBASHI Kan'ichiro; Bridgestone Corporation; 2007, Ishibashi Foundation.

文献 Bibl. : 1998, U. Gauss (ed.), *Marc Chagall: the lithographs: la Collection Sorlier*, Ostfildern-Ruit, no.580.

ミロ, ジョアン

MIRO, Joan

1893-1983

迷宮の星

1967年

エッチング，ドライポイント，アクアチント，研磨剤

103.4×70.4cm (画面); 104.2×71.6cm (紙)

右下に署名

外版431

The Star of the Labyrinth

1967

Etching, drypoint, aquatint and carborundum

103.4×70.4cm (image); 104.2×71.6cm (paper)

Signed lower right: Miró

来歴：石橋幹一郎；株式会社ブリヂストン；2007年，石橋財団

Prov. : ISHIBASHI Kan'ichiro; Bridgestone Corporation; 2007, Ishibashi Foundation.

文献 Bibl. : 1989, J. Dupin, *Miró Engravings*, New York, no.425.

岩壁の軌跡Ⅵ

1967年

エッチング，アクアチント，研磨剤

58.8×92.8cm (画面)；73.0×104.4cm (紙)

右下に署名

外版432

Trace on the WallⅥ

1967

Etching, aquatint and carborundum

58.8×92.8cm (image)；73.0×104.4cm (paper)

Signed lower right : Miró

来歴：石橋幹一郎；株式会社ブリヂストン；2007年，石橋財団

Prov. : ISHIBASHI Kan'ichiro; Bridgestone Corporation; 2007, Ishibashi Foundation.

文献 Bibl. : 1989, J. Dupin, *Miró Engravings*, New York, no.445.

ムア，ヘンリー

MOORE, Henry

1898-1986

横たわる3つの人体

リトグラフ

29.5×23.7cm (画面)；52.3×39.4cm (紙)

右下に署名

外版433

Three Reclining Figures

Lithograph

29.5×23.7cm (image)；52.3×39.4cm (paper)

Signed lower right : Moore

来歴：石橋幹一郎；株式会社ブリヂストン；2007年，石橋財団

Prov. : ISHIBASHI Kan'ichiro; Bridgestone Corporation; 2007, Ishibashi Foundation.

文献 Bibl. : 1973, G. Cramer, A. Grant and D.Mitchinson, *Henry Moore, Catalogue of Graphic Work 1931-1972*, vol.III, Geneva, no.184.

ポリャコフ, セルジュ

POLIAKOFF, Serge

1900 / 06-1969

ピンクと赤と青のコンポジション

木版

32.7×25.3cm (画面); 50.3×40.0cm (紙)

右下に署名

外版430

Composition in Pink, Red and Blue

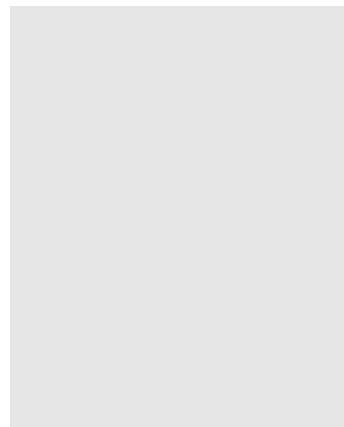
Woodcut

32.7×25.3cm (image); 50.3×40.0cm (paper)

Signed lower right : Serge Poliakoff

来歴：石橋幹一郎；株式会社ブリヂストン；2007年，石橋財団

Prov. : ISHIBASHI Kan'ichiro; Bridgestone Corporation; 2007, Ishibashi Foundation.



スーラージュ, ピエール

SOULAGES, Pierre

1919-

リトグラフ No.32 B

1974年

リトグラフ

65.0×45.0cm (画面); 75.7×56.5cm (紙)

右下に署名

外版425

Lithograph No.32 B

1974

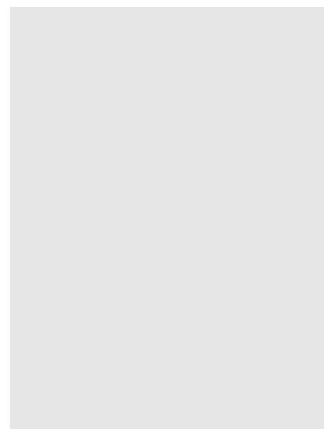
Lithograph

65.0×45.0cm (image); 75.7×56.5cm (paper)

Signed lower right : soulages

来歴：石橋幹一郎；株式会社ブリヂストン；2007年，石橋財団

Prov. : ISHIBASHI Kan'ichiro; Bridgestone Corporation; 2007, Ishibashi Foundation.



タピエス, アンтони

TAPIES, Antoni

1923-

AL 4 Galeries

リトグラフ

71.2×58.9cm(画面); 86.4×67.7cm(紙)

右下に署名

外版428

AL 4 Galeries

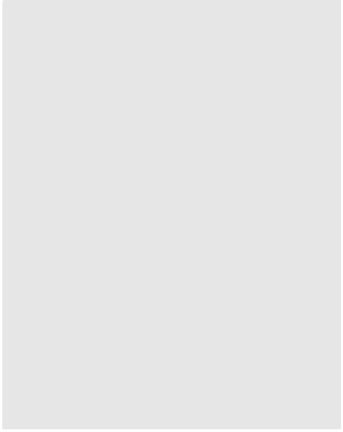
Lithograph

71.2×58.9cm(image); 86.4×67.7cm(paper)

Signed lower right

来歴: 石橋幹一郎; 株式会社ブリヂストン; 2007年, 石橋財団

Prov.: ISHIBASHI Kan'ichiro; Bridgestone Corporation; 2007, Ishibashi Foundation.



アレシンスキー, ピエール

ALECHINSKY, Pierre

1927-

何が起きたのか?

1963年

リトグラフ

28.6×41.5cm(画面); 33.2×50.6cm(紙)

右下に署名

外版424

What Happened?

1963


Lithograph

28.6×41.5cm(image); 33.2×50.6cm(paper)

Signed lower right : 1963 Alechinsky

来歴: 石橋幹一郎; 株式会社ブリヂストン; 2007年, 石橋財団

Prov.: ISHIBASHI Kan'ichiro; Bridgestone Corporation; 2007, Ishibashi Foundation.



宮田重雄
MIYATA, Shigeo
1900-1971

公園
1954年
リトグラフ
51.8×35.5cm (画面); 64.2×45.8cm (紙)
右下に署名: Shigeo Miyata
日版143

Park
1954
Lithograph
51.8×35.5cm (image); 64.2×45.8cm (paper)
Signed lower right

来歴: 石橋幹一郎; 株式会社ブリヂストン; 2007年, 石橋財団
Prov.: ISHIBASHI Kan'ichiro; Bridgestone Corporation; 2007, Ishibashi Foundation.

村井正誠
MURAI, Masanari
1905-1999

子供
リトグラフ
53.5×37.6cm (画面); 64.2×46.0cm (紙)
右下に署名: MAÇANARI
日版141

Child
Lithograph
53.5×37.6cm (image); 64.2×46.0cm (paper)
Signed lower right

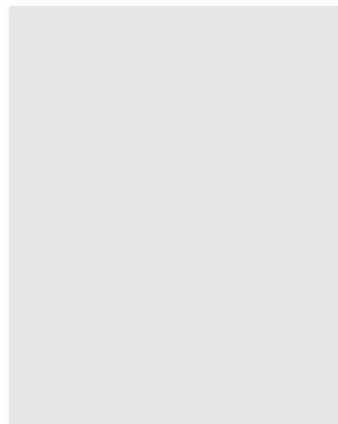
来歴: 石橋幹一郎; 株式会社ブリヂストン; 2007年, 石橋財団
Prov.: ISHIBASHI Kan'ichiro; Bridgestone Corporation; 2007, Ishibashi Foundation.

粟辻 博
AWATSUJI, Hiroshi
1929-1995

不詳
シルクスクリーン
97.6×75.0cm (画面); 109.4×78.8cm (紙)
右下に署名: H.Awatsuji
日版142

Unspecified
Silk screen
97.6×75.0cm (image); 109.4×78.8cm (paper)
Signed lower right

来歴: 石橋幹一郎; 株式会社ブリヂストン; 2007年, 石橋財団
Prov.: ISHIBASHI Kan'ichiro; Bridgestone Corporation; 2007, Ishibashi Foundation.

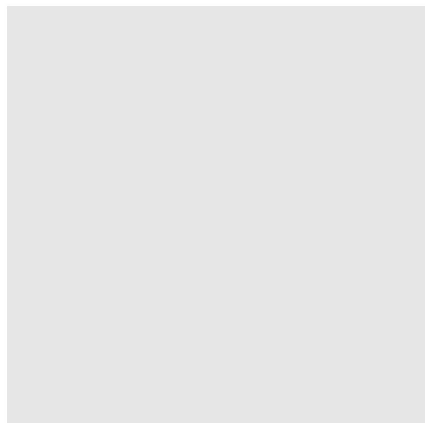


田中一光
TANAKA, Ikko
1930-2002

不詳
シルクスクリーン
52.9×53.0cm (画面); 70.0×68.8cm (紙)
右下に署名: Ikko Tanaka
日版140

Unspecified
Silk screen
52.9×53.0cm (image); 70.0×68.8cm (paper)
Signed lower right

来歴: 石橋幹一郎; 株式会社ブリヂストン; 2007年, 石橋財団
Prov.: ISHIBASHI Kan'ichiro; Bridgestone Corporation; 2007, Ishibashi Foundation.



不詳

シルクスクリーン

51.2×51.0cm (画面); 67.9×67.4cm (紙)

右下に署名: Ikko Tanaka

参考13

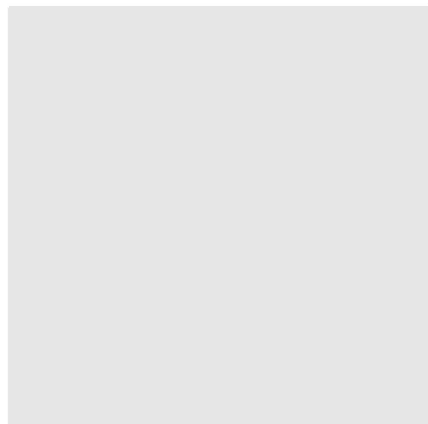
Unspecified

Silk screen

51.2×51.0cm (image); 67.9×67.4cm (paper)

Signed lower right

来歴: 石橋幹一郎; 株式会社ブリヂストン; 2007年, 石橋財団
Prov.: ISHIBASHI Kan'ichiro; Bridgestone Corporation; 2007, Ishibashi
Foundation.



鎌谷伸一

KAMATANI, Shin'ichi

1948-

パインツリー No.59-B

シルクスクリーン

38.0×51.8cm (画面); 48.9×61.9cm (紙)

右下に署名: Kamatani

左下に書込: pinetree No.59-B

参考18

Pine Tree No.59-B

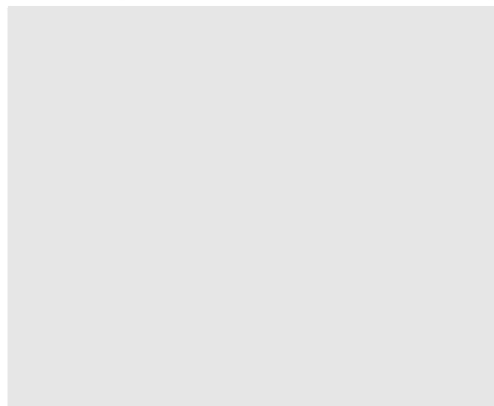
Silk screen

38.0×51.8cm (image); 48.9×61.9cm (paper)

Signed lower right

Inscribed lower left

来歴: 石橋幹一郎; 株式会社ブリヂストン; 2007年, 石橋財団
Prov.: ISHIBASHI Kan'ichiro; Bridgestone Corporation; 2007, Ishibashi Foundation.



大村清隆
OMURA Kiyotaka
1912-1988

坂本繁二郎像

1968年
ブロンズ
高さ 52.0cm
背面に署名・年記：Kiyotaka 1968大村
日彫20

Statue of Hanjiro Sakamoto

1968
Bronze
H. 52.0cm
Signed and dated on the back

来歴：個人蔵，福岡；2007年，石橋財団に寄贈
Prov. : Private Collection, Fukuoka; 2007, donated to the Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh. : 1969年，「自由美術展」；2006年，石橋美術館「坂本繁二郎展」no.176

文献 Bibl. : 1972年，大村清隆『肖像とモニュマン』；1981年，大村清隆『自刻抄』

雑

豊田勝秋
TOYODA Katsuaki
1897-1972

鑄銅小花生(寿恵広)

1967年
鑄銅
高さ 24.5cm
底部に銘あり：勝秋作
雑84

Small Vase with Linear Design, cast in bronze

1967
Cast in bronze
H. 24.5cm
Signed on the bottom

来歴：個人蔵，久留米；2007年，石橋財団に寄贈
Prov. : Private Collection, Kurume; 2007, donated to the Ishibashi Foundation.

石橋美術館では、松本豊太(1874-1924, 松濤)の絵画資料5点を、2007年11月16日付で松本成一氏より受贈した。

百合図

制作年不詳
油彩・布
(紙に貼付)
21.1×18.2cm
右下に署名：SM



花菖蒲図

制作年不詳
油彩・布
(紙に貼付)
21.1×18.2cm
左下に署名：SM



ひまわり図

制作年不詳
油彩・布
(紙に貼付)
21.1×18.2cm
左下に印章：
「松」「濤」
(白字朱方印)



藤図

制作年不詳
油彩・布
(紙に貼付)
21.1×18.2cm
左下に印章：
「松」「濤」
(白字朱方印)



菊図

制作年不詳
油彩・絹
(紙に貼付)
20.9×18.0cm
右下に印章：
「松濤」
(朱字方印)



石橋美術館では、坂宗一(1902-1989)の旧蔵資料202点を、2007年4月4日付で坂翁介氏より受贈した。

A 美術関係資料

A-1. 図書, 展覧会パンフレット 22点

- 1 1. 坂宗一個展案内 / 大阪フォルム画廊 / 昭和38年11月 / 封筒あり
- 2 2. 坂宗一個展案内 / 大阪フォルム画廊 / 昭和38年11月 / 封筒あり
- 3 3. 坂宗一水墨画展案内 / 久留米井筒屋 / 昭和41年4月
- 4 4. 坂宗一水墨画展案内 / 久留米井筒屋 / 昭和41年4月
- 5 5. 坂宗一水墨画展案内 / 佐賀中央画廊 / 昭和44年2月
- 6 6. 坂宗一水墨画展案内 / 佐賀中央画廊 / 昭和44年2月
- 7 7. 坂宗一個展案内 / フジカワ画廊大阪店 / 昭和46年6月 / 封筒あり
- 8 8. 坂宗一個展案内 / フジカワ画廊大阪店 / 昭和46年6月
- 9 9. 坂宗一水墨画展案内 / 福岡県文化会館 / 昭和54年6月
- 10 10. 坂宗一水墨画展案内 / 福岡県文化会館 / 昭和54年6月
- 11 11. 坂宗一水墨画展図録 / 福岡県文化会館 / 昭和54年6月発行
- 12 12. 『坂宗一回顧展』図録 / 坂宗一回顧展実行委員会 / 昭和59年11月
- 13 13. 永田茂樹, 坂宗一『詩画集 筑後路』 / 歩道社 / 昭和42年3月1日発行
- 14 14. 『西日本美術展出品目録』 / 西日本新聞社 / 昭和30年11月
- 15 15. 『坂本繁二郎展』図録 / 大阪フォルム画廊福岡店 / 昭和44年10月
- 16 16. 『古賀春江』 / 春鳥会 / 昭和9年9月1日発行
- 17 17. テレビ『話題の窓 素朴な月夜 古賀春江の世界』台本 / 昭和48年6月
- 18 18. 古賀春江『牛を焚くー古賀春江詩画集ー』 / 東出版 / 昭和49年12月25日発行
- 19 19. 古賀春江『写真と空想』 / 中央公論美術出版 / 昭和59年10月20日発行
- 20 20. 『古賀春江回顧展』 / 福岡県文化会館 / 昭和50年11月8日発行
- 21 21. 中野嘉一 / 金剛出版 / 昭和52年11月20日発行
- 22 22. 古賀春江書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和7年5月18日付 / 額装

A-2. 書簡(葉書, 封書, その他) 61点

- 23 1. 東郷青児書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和18年? 10月25日消印
- 24 2. 坂本繁二郎書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和29年10月18日付
- 25 3. 来日会通知(印刷)(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和30年2月7日消印
- 26 4. 松田諦晶書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和32年1月1日付
- 27 5. 坂本繁二郎書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和32年1月1日付
- 28 6. 日本電建株式会社久留米支社通知(封書) / 坂宗一宛 / 昭和32年2月8日付
- 29 7. 第6回青稻同人展案内(秋山朗異発)(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和32年7月?
- 30 8. 赤星洋画研究所展案内(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和32年11月?
- 31 9. 第12回二紀展通知(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和33年10月15日付
- 32 10. 松田諦晶書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和33年10月16日付
- 33 11. 第二紀会出品申込書(封書) / 坂宗一宛 / 昭和33年? 月? 日
- 34 12. 福岡県美術協会通知(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和33年12月9日消印
- 35 13. 竜灯会通知(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和34年2月4日消印
- 36 14. 黒田重太郎書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和35年3月19日付
- 37 15. 宮本三郎書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和35年4月27日付

-
- 38 16. 宮本三郎書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和35年4月28日付
39 17. 石橋美術館案内(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和35年5月2日消印
40 18. 山口長男書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和35年5月6日付
41 19. 山口長男書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和35年5月9日付
42 20. 石井光次郎書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和35年5月29日付
43 21. 山口長男書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和?年4月10日付
44 22. 伊藤研之書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和?年?月5日
45 23. 宮本三郎書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和35年9月7日付
46 24. 高田力蔵書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和35年11月10日付
47 25. 伊藤研之書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和36年?月3日付
48 26. 久我五千男書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和36年5月11日付
49 27. 久我五千男書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和36年8月2日付
50 28. 伊藤研之書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和36年10月3日付
51 29. 高田力蔵書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和37年1月10日付
52 30. 藤田吉香書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和37年4月14日消印
53 31. 藤田吉香書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和37年5月2日消印
54 32. 伊藤研之書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和37年5月2日付
55 33. 松田茂介書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和37年5月8日付
56 34. 二宮冬鳥書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和37年6月5日付
57 35. 伊藤研之書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和37年6月6日付
58 36. 伊藤研之書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和37年6月20日付
59 37. 二宮冬鳥書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和37年7月19日付
60 38. 藤田吉香書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和37年7月28日消印
61 39. 藤田吉香書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和37年9月28日消印
62 40. 石橋美術館案内(印刷)(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和37年10月25日付
63 41. 松田茂介書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和37年11月12日付
64 42. 坂本繁二郎書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和37年12月5日付
65 43. 黒田重太郎書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和38年2月23日付
66 44. 新天画廊 豊原良助書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和40年7月16日付
67 45. 坂本繁二郎書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和40年10月30日付
68 46. 小倉井筒屋文化講演会案内 / 坂宗一宛 / 昭和44年7月28日消印
69 47. 福岡フォルム画廊案内(封書) / 坂宗一宛 / 昭和44年9月30日消印
70 48. 朝日新聞社坂本繁二郎作品全集刊行案内 / 坂宗一宛 / 昭和45年
71 49. 山口長男書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和46年7月14日付
72 50. 山口長男書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和46年7月23日付
73 51. 山口長男書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和46年9月11日付
74 52. 山口長男書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和46年10月20日付
75 53. 牛島憲之書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和46年10月23日付
76 54. 坂本夏男書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和51年3月3日付
77 55. 松田諦品豊田勝秋胸像除幕式典案内(封書) / 坂宗一宛 / 昭和62年5月21日付
78 56. 昭和31年朱明会行事計画案内 / 昭和31年
79 57. 竜灯会洋画展案内
80 58. 坂本繁二郎八女市民葬案内 / 昭和44年7月17日付
-

-
- 81 59. 坂本繁二郎葬儀会葬礼状 / 昭和44年7月18日付
82 60. 二紀会30周年記念展作品集掲載案内 / 昭和51年
83 61. 坂宗一画会パンフレット

B 文学関係資料

B-1. 図書 4点

- 84 1. 内田博著『内田博詩集・三里船津』/ 三池文学会 / 昭和46年2月15日発行
85 2. 梅野亮著『青春画譜』/ 梅野隆発行 / 昭和48年1月31日発行 / 梅野隆書簡同封
86 3. 松永伍一の十年刊行会編『松永伍一の十年』/ 埴輪 / 昭和42年1月1日発行
87 4. 山本源太著『山本源太詩集 蛇苺』/ 泥質社 / 昭和47年5月5日発行

B-2. 雑誌 9点

- 88 1. 「匈奴」9号 / 匈奴の会 / 昭和49年3月20日発行 / 岡部隆介書簡同封
89 2. 「芸林」6巻4号 / 芸林社 / 昭和34年4月1日発行
90 3. 「芸林」3号 / 芸林社 / 昭和48年5月1日発行
91 4. 「芸林」7号 / 芸林社 / 昭和48年9月1日発行
92 5. 「芸林」10号 / 芸林社 / 昭和49年1月1日発行
93 6. 「母船」13号 / 母船短歌会 / 昭和37年9月1日発行
94 7. 「母船」40号 / 母船短歌会 / 昭和42年10月1日発行
95 8. 「母船」81号 / 母船短歌会 / 昭和50年11月25日発行
96 9. 「母船」84号 / 母船短歌会 / 昭和51年8月5日発行

B-3. 葉書 62点

- 97 1. 出海溪也書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和34年3月18日消印
98 2. 出海溪也書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和35年1月1日消印
99 3. 牛島春子書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和31年11月18日消印
100 4. 牛島春子書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和37年1月8日消印
101 5. 内田博書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和40年9月19日消印
102 6. 岡部隆介書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和34年11月27日消印
103 7. 岡部隆介書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和53年7月13日消印
104 8. 岡部隆介書簡(葉書, 年賀状) / 坂宗一宛 / 昭和56年1月1日付
105 9. 加藤暢書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和38年1月18日付
106 10. 加藤暢書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和63年1月1日付
107 11. 黒田静男書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和34年2月?日消印
108 12. 黒田静男書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和34年2月19日付
109 13. 黒田静男書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和34年10月16日付
110 14. 黒田静男書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和34年10月29日付
111 15. 坂梨忠書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和37年7月28日付
112 16. 杉本寿恵男書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和36年4月25日消印
113 17. 杉本寿恵男書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和36年5月7日消印
114 18. 杉山洋書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和?年3月21日消印 / 第3回詩画展打ち合わせの連絡
115 19. 永田茂樹書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和37年5月27日消印
116 20. 長山不美男書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和37年8月25日消印

-
- 117 21. 長山不美男書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和40年9月29日消印
118 22. 長山不美男書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和41年6月2日消印
119 23. 長山不美男書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和44年7月26日消印
120 24. 長山不美男書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和?年7月7日消印
121 25. 長山不美男書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和?年4月15日消印 / 転送書貼付
122 26. 野田宇太郎書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和30年5月29日消印
123 27. 野田宇太郎書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和33年1月1日消印
124 28. 野田寿子書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和37年4月7日消印 / 野田寿子が小郡在住のときのもの
125 29. 野田寿子書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和37年4月12日付 / 野田寿子が小郡在住のときのもの
126 30. 野田寿子書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和37年4月22日消印 / 野田寿子が小郡在住のときのもの
127 31. 林逸馬書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和31年12月5日消印
128 32. 平井光典書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和30年7月5日消印
129 33. 平井光典書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和31年6月8日消印
130 34. 平井光典書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和32年7月31日消印
131 35. 藤田吉香書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和37年5月17日消印
132 36. 松永伍一書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和32年3月9日消印
133 37. 松永伍一書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和35年5月24日消印
134 38. 松永伍一書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和35年8月13日消印
135 39. 松永伍一書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和36年7月1日消印
136 40. 松永伍一書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和36年7月17日消印
137 41. 松永伍一書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和36年7月24日消印
138 42. 松永伍一書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和36年8月6日消印
139 43. 松永伍一書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和36年8月14日消印
140 44. 松永伍一書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和36年9月27日消印
141 45. 松永伍一書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和37年2月21日消印
142 46. 丸山豊書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和47年6月27日消印
143 47. 山口静義書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和38年3月28日付
144 48. 弓削三男書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和33年?月?日消印
145 49. 劉寒吉書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和31年6月6日消印
146 50. 劉寒吉書簡(葉書) / 坂宗一宛 / 昭和33年3月16日付
147 51. 劉寒吉書簡(葉書, 年賀状) / 坂宗一宛 / 昭和47年1月1日付
148 52. 第1回大牟田文学協会詩画展案内状 / 坂宗一宛 / 昭和44年11月12日消印
149 53. 筑後文化懇話会例会案内状 / 坂宗一宛 / 昭和29年7月8日消印
150 54. 「歩道」忘年会案内状 / 坂宗一宛 / 昭和34年12月10日消印
151 55. 石田光明詩集出版記念会案内状 / 坂宗一宛 / 昭和37年12月4日消印
152 56. 牟田会案内状 / 坂宗一宛 / 昭和35年3月10日消印
153 57. 長谷健文学碑除幕式案内状 / 坂宗一宛 / 昭和33年11月11日消印
154 58. 二宮冬鳥放談会案内状 / 坂宗一宛 / 昭和36年11月15日消印
155 59. 火野葦平追悼出版記念会案内状 / 坂宗一宛 / 昭和35年2月8日消印
156 60. 「九州文学」200号突破記念祝賀会案内状 / 坂宗一宛 / 昭和37年4月20日消印
157 61. 加藤暢宛坂宗一未投函書簡(葉書)
158 62. 松永伍一宛坂宗一未投函書簡(葉書) / 昭和32年
-

B-4. 封書 37点

- 159 1. 赤星月人書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和33年7月31日付 / 「匈奴」創刊の報告
- 160 2. 石田光明書簡(封書) / 坂宗一宛 / 石田光明用箋4枚。封筒なし
- 161 3. 牛島春子書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和29年6月26日付 / 牛島春子が小郡町在住のとき
- 162 4. 内田博書簡(封書) / 坂宗一宛 / 日付記載なし / 封筒なし。原稿用紙に執筆
- 163 5. 内田博書簡(封書) / 坂宗一宛 / 日付記載なし / 封筒なし。原稿用紙に執筆
- 164 6. 岡部隆介書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和34年11月16日消印
- 165 7. 岡部隆介書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和49年3月26日付
- 166 8. 岡部隆介書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和49年3月28日付 / 「匈奴」9号に添付
- 167 9. 岡部隆介書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和57年6月13日付
- 168 10. 岡部隆介書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和58年9月7日消印
- 169 11. 岡部隆介書簡(封書) / 坂宗一宛 / 年不明11月15日消印
- 170 12. 岡部隆介書簡(封書) / 坂宗一宛 / 年不明9月20日付 / 封筒なし。便箋4枚
- 171 13. 岡部隆介書簡(封書) / 坂宗一宛 / 年月日不明 / 封筒なし。便箋5枚
- 172 14. 加藤暢書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和45年12月8日付
- 173 15. 加藤暢書簡(封書) / 坂宗一宛 / 年不明12月28日付
- 174 16. 坂梨忠書簡(封書) / 坂宗一宛 / 年不明6月8日付 / 封筒なし。会社用箋2枚
- 175 17. 坂本繁二郎書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和28年7月2日付 / 水害見舞いの返信
- 176 18. 高木護書簡(封書) / 坂宗一宛 / 年不明10月20日付 / 封筒なし。原稿用紙2枚
- 177 19. 田中稔男書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和44年8月18日付 / 田中稔男後援会関係4枚
- 178 20. 平井光典書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和31年6月27日消印 / 原稿用紙2枚
- 179 21. 火野葦平書簡(封書) / 坂宗一宛 / 年不明9月28日消印 / 東京阿佐ヶ谷より挿絵断りの件
- 180 22. 松永伍一書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和37年6月25日消印 / 現金書留の封筒。未来社原稿用2枚
- 181 23. 松永伍一書簡(封書) / 坂宗一宛 / 封筒なし。B5原稿用紙2枚
- 182 24. 松永伍一書簡(封書) / 坂宗一宛 / 封筒なし。未来社原稿用紙2枚
- 183 25. 松永伍一書簡(封書) / 坂宗一宛 / 4月26日付 / 封筒なし。原稿用紙(破れ有り)1枚
- 184 26. 松永伍一書簡(封書) / 坂宗一宛 / 4月1日付 / 封筒なし。原稿用紙(破れ有り)1枚
- 185 27. 真鍋甚書簡(封書) / 坂宗一宛 / 年不明9月22日付 / 全日通労働組合九州地区本部便箋2枚
- 186 28. 森田緑雨書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和60年9月19日付 / 便箋3枚(11月1日付便箋3枚同封)
- 187 29. 弓削三男書簡(封書) / 坂宗一宛 / 年月日不明 / 便箋2枚
- 188 30. 劉寒吉書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和59年7月16日付 / 便箋2枚
- 189 31. 九州文学社書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和32年4月24日消印 / 赤色の用紙1枚
- 190 32. 筑後労農文化会議書簡(封書) / 坂宗一宛 / 年月日不明 / 「夜明け」第4号
- 191 33. 西日本新聞社書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和32年9月2日消印 / 西日本新聞社便箋2枚。メモ紙(絵付)1枚
- 192 34. 西日本新聞社書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和32年9月10日消印 / 西日本新聞社便箋2枚
- 193 35. 福岡アンデパンダン展書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和46年月日不明 / 第3回福岡アンデパンダン展へのよびかけ案内1枚
- 194 36. 夕刊フクニチ新聞社書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和42年7月24日消印 / 夕刊フクニチ新聞社便箋3枚
- 195 37. 夕刊フクニチ新聞社書簡(封書) / 坂宗一宛 / 昭和47年3月1日消印 / 夕刊フクニチ新聞社便箋2枚

B-5. その他 7点

- 196 1. 第2回福岡アンデパンダン展案内 1枚
- 197 2. 『にがい河』出版記念会お知らせ 1枚
- 198 3. 坂宗一個展パンフレット 1枚
- 199 4. 二人展パンフレット 1枚
- 200 5. 写真①人物3名1枚
- 201 6. 写真②人物4名1枚
- 202 7. 詩稿 / 石田光明原稿用紙3枚

新収図書

ブリヂストン美術館

	購入	寄贈	計
和書	41冊	37冊	78冊
洋書	28冊	3冊	31冊
計	69冊	40冊	109冊

(展覧会図録・逐次刊行物は含まない)

石橋美術館

	購入	寄贈	計
和書	38冊	16冊	54冊
洋書	4冊	0冊	4冊
計	42冊	16冊	58冊

(展覧会図録・逐次刊行物は含まない)

修復記録

	作品	修復報告
1	ポール・セザンヌ《三人の水浴の女たち》 1874-78年頃, BMA, 外洋29	鉛筆・紙 / 16.2×14.7cm 調査・記録, 旧ヒンジ除去, インレイ
2	エミール=アントワーン・ブールデル 《レダと白鳥》 BMA, 外洋48	水彩, インク・厚紙 / 18.2×13.1cm 調査・記録, 旧ヒンジ除去, マッティング
3	エミール=アントワーン・ブールデル 《傷つける精を運ぶケンタウロス》 BMA, 外洋49	水彩, インク・紙 / 15.7×20.2cm 調査・記録, 旧ヒンジ除去, テープ粘着剤除去, インレイ, マッティング
4	アンリ・マティス《画室の裸婦》 1899年, BMA, 外洋56	油彩・ボード / 66.2×50.5cm 調査・記録, 画面洗浄, 旧修理除去, 損傷部浮上り接着, 欠 損部充填・補彩, 画面艶の調整, 額装
5	ポール・セザンヌ《水辺の人物たち》 1877年頃, BMA, 外洋113	鉛筆, 水彩・紙 / 12.7×21.8cm 調査・記録, 旧ヒンジ除去, インレイ
6	エミール=アントワーン・ブールデル 《クロノス》 BMA, 外洋124	グワッシュ, インク・紙 / 16.4×20.9cm 調査・記録, 旧ヒンジ除去, インレイ, マッティング
7	ダヴィッド・ブルリユック《船の図》 1921年, BMA, 外洋151	油彩・カンヴァス 調査・記録, 裏面掃除, 画面洗浄, 損傷部浮上り接着, 欠損 部充填・補彩, 画面艶の調整, 額新調
8	ヴァン・ド・ジュール・レーヌ《鏡の前》 1952年頃, BMA, 外洋153	油彩・カンヴァス 調査・記録, 裏面掃除, 画面洗浄, 画布変形修正, 損傷部浮 上り接着, 欠損部充填・補彩, 画面艶の調整, 額新調
9	ジャン=バティスト・パテル《水浴》 BMA, 外洋175	油彩・カンヴァス / 56.7×65.4cm 調査・記録, 画面洗浄, 損傷ワニスの除去, 損傷部浮上り接 着, 欠損部充填・補彩, 画面艶の調整, 額装
10	ヘンリー・ムア《プロメテウスの頭部》 1949年, BMA, 外洋191	鉛筆, クレヨン, 水彩, グワッシュ, インク・紙 / 35.0×27.4cm 調査・記録, 旧ヒンジ除去, 和紙にフロートマウント, マッ ティング
11	セルジュ・ポリャコフ 《コンポジション》 1959年, BMA, 外洋215	油彩・カンヴァス / 92.2×73.2cm 調査・記録, 裏面掃除, 画面洗浄, 損傷部補彩, 額装改善
12	藤島武二《臥裸婦》 1906-07年, BMA, 日洋19	鉛筆・紙 / 23.8×31.1cm 調査・記録, 旧ヒンジ除去, 破れ補修, インレイ, マッティ ング
13	藤島武二《港の朝陽》 1943年, BMA, 日洋59	油彩・板 / 18.6×24.0cm 調査・記録, 画面洗浄, 欠損部充填・補彩, 額装改善
14	満谷国四郎《ばら(絶筆)》 1936年, IMA, 日洋71	油彩・カンヴァス / 37.6×45.2cm 調査・記録, 裏面掃除, 画面洗浄, 画布変形修正, 損傷部浮 上り接着, 欠損部充填・補彩, 画面艶の調整, 額装改善
15	林倭衛《サント=ヴィクトワール》 1925-29年頃, IMA, 日洋170	油彩・カンヴァス / 31.6×41.0cm 調査・記録, 裏面掃除, 画面洗浄, 画布変形修正, 損傷部浮 上り接着, 欠損部充填・補彩, 画面艶の調整, 額装改善

	作品	修復報告
16	青木繁《風景》 1910年, IMA, 日洋447	鉛筆, 水彩・紙 / 14.9×22.4cm 調査・記録, 台紙除去, 洗浄, フラットニング, インレイ
17	平野遼《朝》 1991年, IMA, 日洋532	油彩・カンヴァス / 87.6×144.6cm 調査・記録, 裏面掃除, 画面洗浄, 欠損部充填・補彩
18	松本豊太《二人の少女》 1902年, IMA, 日洋535	油彩・カンヴァス / 116.5×91.3cm 調査・記録, 裏面掃除, 画布変形修正, 画面洗浄, 旧修理除去, 損傷部浮上り接着, 画布張り代の補強, 新調した木枠への張り込み, 欠損部充填・補彩, 画面艶の調整, 額新調
19	杉全 直《袋を持った空間》 1963年, BMA, 日洋541	油彩・カンヴァス 調査・記録, 裏面掃除, 画面洗浄, 画布変形修正, 損傷部浮上り接着, 欠損部充填・補彩, 画面艶の調整, 額新調
20	白髪一雄《白い扇》 1965年, BMA, 日洋543	油彩・カンヴァス / 181.4×272.4cm 調査・記録, 裏面掃除, 画面洗浄, 旧修理除去, 損傷部浮上り接着, 画布張り代の補強, 調整した木枠への張り込み, 欠損部充填・補彩, 額新調
21	白髪一雄《観音普陀落浄土》 1972年, BMA, 日洋544	油彩・カンヴァス / 130.7×194.2cm 調査・記録, 裏面掃除, 画面洗浄, 損傷部浮上り接着, 欠損部充填・補彩, 額新調
22	小杉未醒《戊辰秋日》 1928年, IMA, 日洋545	油彩・カンヴァス / 80.4×65.5cm 調査・記録, 裏面掃除, 画面洗浄, 画布変形修正, 損傷部浮上り接着, 欠損部充填・補彩, 画面艶の調整, 額装改善
23	村井正誠《子供》 1952年頃, BMA, 日洋547	油彩・板 / 45.6×37.8cm 調査・記録, 絵具層変形修正, 画面洗浄, 欠損部充填・補彩, 画面艶の調整, 額新調
24	村井正誠《モードの女》 1976年, BMA, 日洋548	油彩・カンヴァス / 165.3×133.8cm 調査・記録, 画面洗浄, 欠損部充填・補彩, 画面艶の調整, 額新調
25	村井正誠《人びと》 1983年, BMA, 日洋549	油彩・カンヴァス / 227.3×181.7cm 調査・記録, 画面洗浄, 欠損部充填・補彩, 画面艶の調整, 額新調
26	今井俊満《Eclipse》 1964年, BMA, 日洋552	油彩・カンヴァス / 116.0×72.5cm 調査・記録, 画面洗浄, 損傷部浮上り接着, 欠損部充填・補彩, 画面艶の調整, 額新調
27	カミーユ・ピサロ《水浴の女たち》 BMA, 外版7	リトグラフ / 15.4×22.0cm (画面); 15.4×22.0cm (紙) 調査・記録, 旧ヒンジ除去, 破れ補修, マットニング
28	エドゥワール・マネ《横たわるオダリスク》 BMA, 外版9	エッチング, アクアチント / 12.8×19.9cm (画面); 16.0×24.3cm (紙) 調査・記録, 旧ヒンジ除去, 洗浄, 脱酸性処置, 部分漂白, マットニング
29	アンリ・ファンタン＝ラトゥール 《聖アントニウスの誘惑》 BMA, 外版17	リトグラフ / 32.6×40.2cm (画面); 42.9×59.6cm (紙) 調査・記録, 旧ヒンジ除去, フラットニング, マットニング

	作品	修復報告
30	ポール＝アルベール・ベナール《水浴》 BMA, 外版26	エッチング, アクアチント / 15.8×24.0cm (画面); 43.3×61.0cm(紙) 調査・記録, 旧ヒンジ除去, マッティング(フロート仕様)
31	フェリックス・ヴァロットン《入浴》 BMA, 外版52	木版・紙 / 18.0×22.5cm (画面); 21.6×25.4cm(紙) 調査・記録, 旧ヒンジ除去, マッティング
32	パブロ・ピカソ《『ヴォラールのための連作』瀕死のミノタウロス》 1933年, BMA, 外版108	エッチング / 19.4×26.9cm (画面); 34.2×44.6cm(紙) 調査・記録, 旧ヒンジ除去, マッティング
33	マリノ・マリーニ《ポモナ習作》 BMA, 外版160-5	リトグラフ / 42.0×30.1cm (画面); 50.1×39.8cm(紙) 調査・記録, 旧ヒンジ除去, マッティング
34	マリノ・マリーニ《ポモナ習作》 BMA, 外版160-22	リトグラフ / 36.7×23.9cm (画面); 42.9×33.8cm(紙) 調査・記録, 旧ヒンジ除去, マッティング
35	エルンスト＝モーリッツ・ガイガー 《『パン』 1-2 巨人》 BMA, 外版196-8	エッチング / 28.9×22.2cm (画面); 36.9×27.3cm(紙) 調査・記録, 旧ヒンジ除去, マッティング
36	マックス・ピーチュマン 《『パン』 2-2 ケンタウロスのカップル》 BMA, 外版196-30	エッチング / 24.6×16.5cm (画面); 37.4×27.3cm(紙) 調査・記録, 旧ヒンジ除去, 洗浄, マッティング
37	マックス・リーバーマン 《『パン』 3-2 水浴の若者たち》 BMA, 外版196-52	エッチング / 14.1×18.8cm (画面); 27.9×37.1cm(紙) 調査・記録, 旧ヒンジ除去, 洗浄, 脱酸性処置, 部分漂白, マッティング
38	カール・ケッピング 《『パン』 3-4 すわる裸婦》 BMA, 外版196-64	エッチング / 16.0×10.5cm (画面); 36.9×27.7cm(紙) 調査・記録, 旧ヒンジ除去, 裏面の鉄サビ除去, マッティング
39	アンリ・エラン 《『パン』 3-4 戯れる人魚》 BMA, 外版196-66	木版, リトグラフ / 29.1×20.6cm (画面); 36.9×27.8cm(紙) 調査・記録, 旧ヒンジ除去, 洗浄, 脱酸性処置, 部分漂白, マッティング
40	イポリュト・ブティジャン 《『パン』 4-1 装飾下絵(裸体習作)》 BMA, 外版196-71	リトグラフ / 26.2×20.3cm (画面); 37.0×27.4cm(紙) 調査・記録, 旧ヒンジ除去, マッティング
41	ヴィルヘルム・フォルツ 《『パン』 4-2 ニンフの行進と踊り》 BMA, 外版196-76	リトグラフ / 10.3×21.0cm (画面); 27.2×36.9cm(紙) 調査・記録, 旧ヒンジ除去, マッティング
42	オットー・エックマン 《『パン』 5-4 春訪れなば》 BMA, 外版196-98	リトグラフ / 25.4×11.2cm (画面); 36.6×27.7cm(紙) 調査・記録, 旧ヒンジ除去, 洗浄, 脱酸性処置, 部分漂白, マッティング
43	ヴィクトール・ブルーヴェ《阿片》 1894年, BMA, 外版212	リトグラフ, 空押し / 55.2×40.3cm (画面); 61.1×43.0cm(紙) 調査・記録, 旧ヒンジ除去, テープ粘着剤除去, マッティング
44	ポール・ゴーガン 《マナオ・トゥパバウ(死霊が見ている)》 1894年, BMA, 外版222	リトグラフ / 18.1×27.3cm (画面); 42.9×59.6cm(紙) 調査・記録, 旧ヒンジ除去, マッティング

	作品	修復報告
45	アンデルス・ツオルン《浅瀬》 1912年, BMA, 外版223	エッチング / 20.0×14.8cm (画面); 40.0×29.4cm (紙) 調査・記録, ドライクリーニング, 旧ヒンジ除去, 洗浄, 脱酸性処置, マッティング
46	ヘンリー・ムア《『生誕80年記念版画集』 荒れ模様の空の下に横たわる人体》 1975年, BMA, 外版275	リトグラフ / 15.7×23.2cm (画面); 38.2×47.1cm (紙) 調査・記録, 旧ヒンジ除去, マッティング
47	ピエール・ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ 《女性習作》 BMA, 外版294	写真平版・和紙 / 30.9×15.1cm (画面); 39.4×24.8cm (紙) 調査・記録, 旧ヒンジ除去, オリジナルのマット脱酸性処置 と周辺補強, マッティング(フロート仕様)
48	アンリ=パトリス・ディヨン 《アトリエの情景》 BMA, 外版308	リトグラフ / 22.5×32.1cm (画面); 26.5×35.2cm (紙) 調査・記録, 台紙除去, マッティング
49	ウィリアム・ホガース《トルコ風呂》 BMA, 外版366	エングレーヴィング / 25.1×17.2cm (画面); 26.0×18.2cm (紙) 調査・記録, 旧ヒンジ除去, フラットニング, インレイ, マッティング
50	ジョン・マーチン《『聖書』アベルの死》 1838年刊, BMA, 外版393	メゾチント / 19.0×29.6cm (画面); 29.5×43.2cm (紙) 調査・記録, 付着物除去, マッティング
51	ヤン・ピーテルス・サーンレダム 《ヴィーナスの星[ホルツイウスに基づく]》 BMA, 外版415	エングレーヴィング / 23.7×17.6cm (画面); 23.7×17.6cm (紙) 調査・記録, 旧ヒンジ除去, インレイ, マッティング
52	アドルフ・レオン・ヴィレット 《首を吊ったピエロ》 1894年, BMA, 外版423	リトグラフ / 27.9×19.6cm (画面); 46.7×29.4cm (紙) 調査・記録, 旧ヒンジ除去, 洗浄, 脱酸性処置, 部分漂白, フラットニング, マッティング
53	伊原三郎《七人の裸婦》 BMA, 日版119	リトグラフ / 26.5×42.2cm (画面); 39.8×54.9cm (紙) 調査・記録, ドライクリーニング, マッティング

* 修復報告欄に載せる内容は, 修復担当者による報告書に基づく。

「20世紀美術探検—アーティストたちの3つの冒険物語」展

国立新美術館 / 2007年1月21日—2007年3月19日

- 1) ジョルジョ・デ・キリコ《吟遊詩人》(外洋91)
-

Moore and Mythology

Sheep Field Barn, The Henry Moore Foundation / April 1—September 23, 2007

- 1) ヘンリー・ムア《プロメテウスの頭部》(外洋191)
-

「大回顧展モネ—印象派の巨匠，その遺産」展

国立新美術館 / 2007年4月7日—2007年7月2日

- 1) クロード・モネ《黄昏，ヴェネツィア》(外洋24)
-

「NHK 日曜美術館30周年」展

岩手県立美術館 / 2007年4月7日—2007年5月13日

- 1) 藤島武二《半裸婦人像》(日洋35)
2) 藤島武二《東海旭光》(日洋51)
3) 関根正二《子供》(日洋178)

静岡県立美術館 / 2007年7月24日—2007年8月31日

- 1) 藤島武二《黒扇》(日洋26)
2) 藤島武二《淡路島遠望》(日洋47)
3) 関根正二《子供》(日洋178)
-

「絶筆」展

兵庫県立美術館 / 2007年5月29日—2007年7月8日

- 1) 藤島武二《港の朝陽》(日洋59)
-

「NHK 日曜美術館30周年」展

京都府京都文化会館 / 2006年12月13日－2007年1月21日

広島県立美術館 / 2007年2月15日－2007年3月25日

- 1) 藤島武二《チョチャラ》(日洋25)
- 2) 藤島武二《屋島よりの遠望》(日洋50)

長崎県立美術館 / 2007年5月26日－2007年7月1日

- 1) 藤島武二《天平の面影》(日洋11)
- 2) 藤島武二《五剣山の日の出》(日洋49)

「時代と美術の多面体—近代の成立期に光をあてて」展

神奈川県立近代美術館 / 2007年1月13日－2007年3月25日

- 1) 藤島武二《旭光(新高山)》(日洋244)

「生活のくかたち 豊田勝秋のあゆみに見る昭和の工芸」展

福岡県立美術館 / 2007年1月20日－2007年2月25日

- 1) 豊田勝秋《春日》(雑46)
- 2) 豊田勝秋《銅花さし》(雑47)
- 3) 豊田勝秋《銅花器》(雑48)

「パリのエスプリ 佐伯祐三と佐野繁次郎」展

神奈川県立近代美術館 / 2007年4月7日－2007年5月20日

- 1) 佐伯祐三《休息(鉄道工夫)》(日洋188)

「パリへ —洋画家たち百年の夢」展

東京芸術大学大学美術館 / 2007年4月19日－2007年6月10日

新潟県立近代美術館 / 2007年6月23日－2007年8月5日

- 1) 黒田清輝《鉄砲百合》(日洋9)

「絶筆」展

兵庫県立美術館 / 2007年5月29日－2007年7月8日

- 1) 満谷国四郎 《ばら(絶筆)》(日洋71)
- 2) 坂本繁二郎 《幽光》(寄託)

「藤島武二と小磯良平」展

神戸市立小磯記念美術館 / 2007年9月15日－2007年11月18日

- 1) 藤島武二 《自画像》(日洋12)
- 2) 藤島武二 《ヴェルサイユ風景》(日洋21)
- 3) 藤島武二 《浪(大洗)》(日洋48)

「坂田一男」展

岡山県立美術館 / 2007年9月28日－2007年11月6日

- 1) 坂田一男 《エスキース》(日洋179)

〈展覧会カタログ〉

「the アーティスト 絵かきも陶芸家も彫刻家も」(企画展)

出品目録

編集・発行：石橋財団石橋美術館(2006年12月)

29.7×21.0cm 4p 二つ折りリーフレット



「じっと見る—印象派から現代まで [前期]」
(拡大常設展)

Masterpieces from the collection: from Impressionism
to twentieth-century art

出品目録

図版(カラー1図, モノクロ110図)

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館(2007年1月)

30.0×21.0cm 16p



「じっと見る—印象派から現代まで [後期]」
(拡大常設展)

Masterpieces from the collection: from Impressionism
to twentieth-century art

出品目録

図版(カラー1図, モノクロ107図)

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館(2007年4月)

30.0×21.0cm 16p



「theヌード 人・からだ・カタチ」(企画展)

鑑賞ガイド及び出品目録

図版(カラー10図)

編集・発行：石橋財団石橋美術館 執筆：森山秀子(2007年4月)

29.7×21.0cm 8p パンフレット



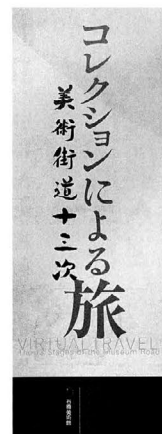
「コレクションによる旅 美術館街道十三次」(企画展)

鑑賞ガイド

図版(カラー7図)

編集・発行：石橋財団石橋美術館(2007年7月)

29.8×10.5cm 4p 四つ折りリーフフレット



「青木繁と《海の幸》」(夏の特別展示)

Aoki Shigeru: sea and myth, and the masterpieces from the collection

作品解説(英文併記)

図版(カラー7図)

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館(2007年7月)

30.0×21.0cm 二つ折りリーフフレット



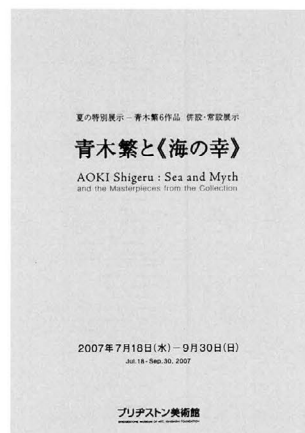
「青木繁と《海の幸》」(夏の特別展示)

Aoki Shigeru: sea and myth, and the masterpieces from the collection

出品目録

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館(2007年7月)

30.0×21.0cm 三つ折りリーフレット



「たいくつな風景 松本英一郎展」(特別展)

Tedious landscape; retrospective exhibition of Matsumoto Eiichiro

本文：

ごあいさつ

松本英一郎の芸術 / 植野健造(p.6-11)

図版

第1章 青年期の模索 1950-1964

第2章 平均的肥満体 1965-1970

第3章 退屈な風景 1971-1986

第4章 さくら・うし 1987-1996

第5章 花と雲と牛・花あかり 1997-2001

第6章 水彩画

松本英一郎美術館等所蔵作品一覧

松本英一郎文献

松本英一郎年譜

出品一覧

図版(カラー147図, 作家肖像3図)

編集：植野健造

デザイン：大宝拓雄デザイン事務所

制作：セントラル印刷株式会社

発行：石橋財団石橋美術館(2007年9月)

28.0×22.0cm 111 p

「たいくつな風景 松本英一郎展」(特別展)

出品目録

図版(モノクロ4図)

編集：植野健造

デザイン：大宝拓雄デザイン事務所

制作：セントラル印刷株式会社

発行：石橋財団石橋美術館(2007年9月)

29.7×21.0cm 三つ折りリーフフレット



「セザンヌ4つの魅力—人物・静物・風景・水浴」(特集展示)

Cézanne four attractions: figure, still life, landscape, bather

本文：

セザンヌ4つの魅力 / 島田紀夫(p.3-7)

カタログ

I. 自画像と妻の肖像

II. 静物画

III. 風景画

IV. 水浴図

作家解説

セザンヌ関連年表

Cézanne: four attractions / Shimada Norio (p.46-48)

図版(カラー30図, 参考図版3図)

編集：石橋財団ブリヂストン美術館

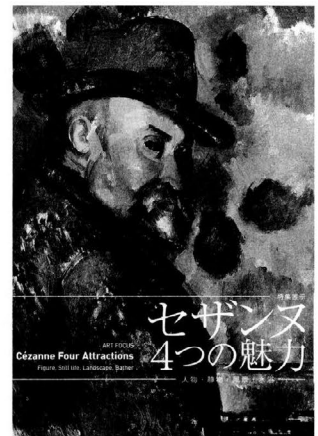
執筆：島田紀夫, 田所夏子

デザイン：(表紙)アウトサイドディレクターズカンパニー

制作：エディタス

発行：石橋財団ブリヂストン美術館(2007年10月)

26.0×18.5cm 48 p ISBN 978-4-901528-07-8



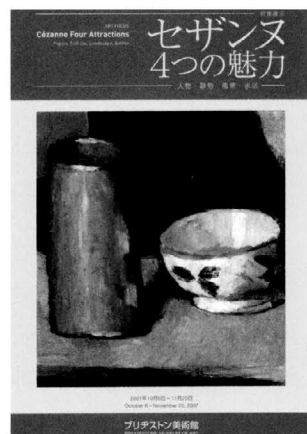
「セザンヌ4つの魅力—人物・静物・風景・水浴」(特集展示)
Cézanne four attractions: figure, still life, landscape, bather

出品目録

図版(カラー1図)

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館(2007年10月)

30.0×21.0cm 8 p



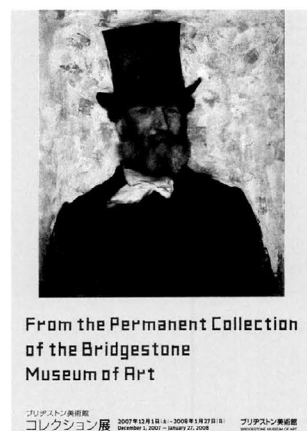
「ブリヂストン美術館コレクション展」(拡大常設展)
From the permanent collection of the Bridgestone Museum of Art

出品目録

図版(カラー1図)

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館(2007年12月)

30.0×21.0cm 8 p



〈その他の刊行物〉

「夏休みこどもプログラム2007 よく見て、感じて、表現してみよう」

編集・発行：石橋財団石橋美術館(2007年7月)

15.0×21.0cm 四つ折りリーフレット ワークシート2枚
差し込み



「坂本繁二郎旧アトリエ」

解説

編集・発行：石橋財団石橋美術館(2007年12月)

18.1×12.8cm 二つ折りリーフレット



「館報」55号(2006年度)

Annual report of Bridgestone Museum of Art & Ishibashi Museum of Art

内容：

設立趣旨，機構・運営

展覧会(特別展，拡大常設展，企画展)

教育普及(講座，ギャラリートーク，ファミリー・プログラム，夏休みこどもプログラム，サポートボランティア，実習生受入など)

入場者数(2006年度)

新収蔵作品(作品25点)

新収図書

修復記録

ハンス・ホフマン《Push and Pull II》(p.86-87)

長谷川利行《動物園風景》(p.88)

田淵安一《孤独の山 Montagne Solitaire》(p.89)

菅井汲《OKA》(p.90)

堂本尚郎《連続の溶解》(p.91)

作品貸出記録

刊行物一覧

研究報告

日本におけるピカソの受容と歴史的回顧—影響，批評，収集の軌跡 / 塚田美香子(p.104-123)

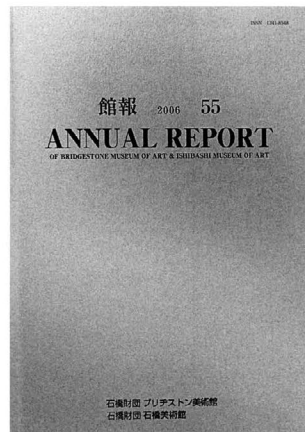
美術館案内

石橋財団職員

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館，石橋財団石橋美術館(2007年12月)

制作：モリモト印刷

26×18.5cm 125 p ISSN 1341-8548



日本におけるピカソの受容と歴史的回顧—影響、批評、収集の軌跡

塚田美香子

日本におけるピカソの第一次受容(続編)

本稿では、「日本におけるピカソの第一次受容」¹⁾の続編として、1930年から1945年の第二次世界大戦終了までの日本美術界でのピカソ受容や日本人画家によるピカソ芸術の解釈について考察する。

パブロ・ルイス・ピカソ(1881-1973)が日本に正式に紹介された1910年代当初、キュビズムの創始者であるピカソの芸術は難解として一般には敬遠される傾向であったが、一部の前衛的画家たちからは支持されていた。しかもピカソの作風が、初期のロートレック風や青の時代、ばら色の時代、アフリカ彫刻の影響を受けた時代、分析的キュビズム、総合的キュビズム、新古典主義時代へと次々に変貌の道を辿るため、同時代の美術関係者からは、戸惑いや驚嘆、懐疑心を持たれつつも、その“変貌”もピカソ芸術の特質として受け入れられてきたようである。

さらに1930年代、1940年代ともなれば、ピカソは名実ともに世界的に著名な画家となっており、それを裏付けるかのように1932年、パリのジョルジュ・ブティ画廊²⁾で、1939年には、ニューヨーク近代美術館³⁾でピカソの画業を展望する大規模な展覧会が開催された。ピカソの擁護者であるクリスチャン・ゼルヴォスはピカソ作品総目録の編纂と刊行(1932-1974年)に着手し始めた。また、当館所蔵のピカソの版画で、ピカソが銅版技法を駆使して制作した代表作の版画集『ヴォアラールのための連作』(1930-37年)⁴⁾をピカソが手がけたのも1930年代であった。

ピカソは1936年の9月、内戦の勃発直後にプラド美術館の館長に任命され、翌1937年4月に起こったスペイン・バスク地方の小都市ゲルニカに対する無差別爆撃を主題に、『ゲルニカ』(1937年、国立ソフィア王妃芸術センター、Z.IX:65)を制作した。これは1937年のパリ万国博覧会のスペイン共和国政府館で展示された。ピカソは戦時中、ドイツ占領下のパリで、戦争や窮乏生活の感じられる静物画や人物画を描いていた⁵⁾。戦争の不気味さや彫刻家のフリオ・ゴンサーレスの死を反映した『牡牛の頭蓋骨のある静物』(1942年、ノルトライン=ヴェストファーレン美術館)⁶⁾や、第二の『ゲ

ルニカ』を想起させる『納骨堂』(1944-45年、ニューヨーク近代美術館、Z.XIV:76)も制作した。

一方、1930年代から1940年代前半の戦時中にかけての日本美術界は、以前からヨーロッパのフォーヴィスム、キュビズムに続いてシュルレアリスム、抽象絵画にいたるまで、実に多彩な主義、運動が移入され、それらに呼応するかのように美術運動も展開していた。急速に軍国主義化が進み太平洋戦争へと入っていく社会情勢のなかで、ピカソ芸術は日本美術界の動向にどのように関わっていたのであろうか。それを以降の章で考察していく。

I. 1930年代—日本美術界でのピカソの“レゾン・デートル”

1930年代前後の日本美術界は、1920年代に渡欧した佐伯祐三、前田寛治らによる「1930年協会」がもたらしたフォーヴィスムの影響が大きかったが、川口軌外のようにキュビズムの理論から西洋絵画の伝統を再解釈し、ピカソのキュビズム的手法を作品に援用した画家もいた。川口の滞欧作品⁷⁾や藤田嗣治の東京美術学校での「巴里に於ける画家の生活」の講演⁸⁾などから、当時の画学生や美術関係者はピカソ芸術に対する知識を一層詳しく得ることができた。

日本でのピカソ芸術はすでに大正期の新興美術運動の画家たちによって支持され、国際的に広まったピカソの“コラージュ”手法を、日本の画家たちは自分たちの作品に応用して発表した。コレクター福島繁太郎の収集品が1929年の『美術新論』で特集された後、1934年に「福島コレクション展」として一般公開され、日本の新聞紙上⁹⁾で福島のコレクションがピカソ作品(fig.1)とともに紹介された。こうして1930年代は、まさにピカソ芸術が日本の美術界に大きくクローズ・アップされていく時代であった。

1. ピカソの新古典主義時代の受容

1.1 福島コレクションのピカソ作品

パリを拠点に、エコール・ド・パリ当時の前衛画家の作品を収集していた福島繁太郎のコレク

ション83点が1929年の『美術新論』（4巻2号）に紹介され、そのなかでカラー2点を含む14点のピカソ作品の図版が掲載された。現在当館所蔵の《女の顔》（1923年、Z.V:45）（fig.2）と《生木と枯木のある風景》（1919年、Z.III:364）（fig.3）の図版もそこには含まれている。その五年後の1934年、「福島コレクション展」（1934年2月2日－11日、有楽町日本劇場5階大ホール、国画会主催）^{10）}が催され、福島が持ち帰った作品およそ80点^{11）}のうち約40点が日本で初めて一般公開された。出品されたピカソの作品は、《海辺の母子》（1922年、個人蔵、Z.IV:384）（fig.1）をはじめ、《馬》（1923年、個人蔵、Z.V:147）、《女の顔》（1923年、ブリヂストン美術館、Z.V:45）（fig.2）、《裸婦立像》（1923年、Z.V:161）の4点^{12）}で、いずれもピカソの新古典主義時代の作品である。特に《海辺の母子》は新聞等の紙面で絶賛されている。

国画会の中心人物である梅原龍三郎は、「こゝにある作品は「母子像」を初めことごとく彼のもつとも良き方面のみを遺憾なく傳へるものである、新鮮な感覚の内に古典の力が生かされて居る、「かくあるべきが現代の繪畫である」というて居る様にさへ見える。」^{13）}と評している。

評論家の川路柳虹は、「こゝには彼の代表作「海邊母子像」があるがこれはエトルスクの彫像に多大のヒントを得てゐるといへ彼の寫實はドランよりももつと實感的即ちギリシア的なのである」^{14）}とアンドレ・ドランの作風と比較して述べている。また《女の顔》の豊かな造形表現に匹敵するほどの力量のある日本の洋画家がいないのを懸念して

いる^{15）}。

谷川徹三は、これまでピカソ作品の複製しか見ていないためそれほど魅力を感じていなかったが、この展覧会で初めてピカソの実作品を見て、「特に母子像は完全に私を征服した。二度目に見に行つた時、私は窓際の椅子へかけてものの三十分以上この繪を眺めつづけたが見れば見るほどよくなる。（中略）近くで見るとハツキリしない母の顔も離れて見ると、ギリシャ的な静かな微笑をたたへてゐる。（中略）「静かな偉大な氣高い單純。」あの古い合言葉がこんなに新鮮に新しく生かされてゐる！」^{16）}と、ピカソの古典的作品に直かに接した感動を率直に表している。

松本峻介も「福島コレクション展」を二度見に行つて、実作品に感銘した一人である^{17）}。松本はピカソを見た時の心情を、「美術學校の生徒でピカソの作品を見て泣きながらデッサンの勉強を始めた人があつたといふ。このやうな氣持ちになつたのは一人や二人ではあるまい。有名な作家が少數な繪畫の前に二時間も三時間も釘づけにされたやうになつて見入つてゐたのを私は知つてゐる」と『岩手日報』（1934年3月16日）に寄稿している。

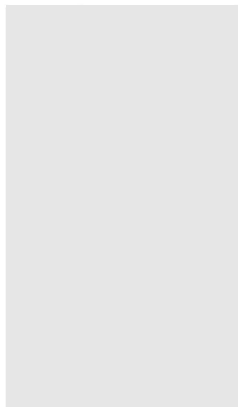


fig.1
「ピカソの海辺母子像 福島
コレクションの逸品到着」
『報知新聞』
1933年12月23日

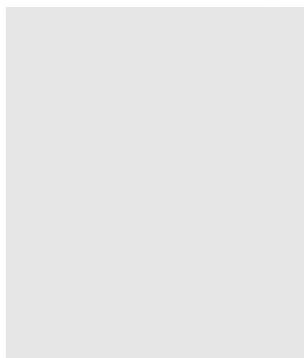


fig.2
ピカソ《女の顔》
1923年 ブリヂストン美術館

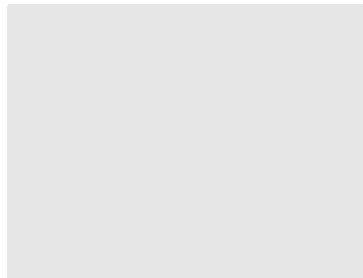


fig.3
ピカソ《生木と枯木のある風景》
1919年 ブリヂストン美術館

ここで松本の言う「有名な作家」とは前述の谷川徹三なのかもしれない。松本は、「藝術はユニアンズ(統一)にあるといふ言葉を漠然と聞き流してゐた事があるけれど、今これが判然とする完全な統一によつてなされてゐる藝術は近世に於ては實に少ない。だがピカソの偉さを私は此處に見出す事が出来ると思ふ。」¹⁸⁾とピカソ芸術を称賛した。次の松本の文章からピカソに対する当時の評価も窺える。「ピカソ程いろいろまちまちな批評をされる人はない。先づ大抵の人は上手だと思ふが解らないと言ふ。或はピカソの古典的な作品は好きだがあとは解らないといふのが普通だ。ピカソを理解するにはうんと勉強しなければ解らないと驚かす先輩もある」。さらに松本は次のように論じる。「文明的デカタンと虚無が最近のピカソの作に多く含まれて来た。こうしてピカソは終わるだらうか。だが私はピカソが青年期の幻のやうな表現から立体派を開きそして健康な古典的作品を作った事を思ふと、明日に対してまた新しい健康な飛躍を望む事が出来るやうにも思ふ」¹⁹⁾と述べている。松本はピカソの作風に退廃的な要素が含まれていることを暗示しながらも、ピカソの今後の芸術に期待もしていたようである。

ピカソの古典回帰については、当時の画家たちの間で議論的になっていて、次のような意見を述べた画家もいる。日本画家の廣島晃甫はピカソが古典へ回帰したことを不満に感じ²⁰⁾、「(中略)自分の妄評が許されるとしたならば、それはギリシャ思想の傳統或は彼等現實感を基本として出發した畫家が終に齎すべき悲劇であつて、換言すれば歐州的表現の最後の破綻を身を以て行ふものであると云へると思ふ。東洋的内容の發展を考慮に入れなかつた事の歸結ではないかと思はれる」²¹⁾と自分の意見を述べている。西洋と東洋の美術思考の違いに気づいたのであろう。

1.2 ピカソ作品の技法研究

日本国内では、ピカソ作品の《海辺の母子》が絶賛されたが、福島コレクション展の日本公開以前に、パリの福島宅(福島は1927年秋頃、パリ7区のAv.de la Bourdonnaisからパリ16区のAv.Vion Whitcomb²²⁾に転居する)でその全貌(fig.4)を見ていた中野和高²³⁾、中山巍²⁴⁾、伊原宇三郎、鈴木千久馬には、ピカソの別の作品、《泉》(1921年、ストックホルム近代美術館,Z.IV:304)の印象の方が強かったようだ。鈴木千久馬は初めてその作品に接した時の感動を、「あくまでデリカな感と

筆法と、恐ろしく深い寫實力に、私は再び驚いたのです」²⁵⁾と伝えていた。また伊原宇三郎は、この作品の絵の具の種類や明暗の強弱、地塗りなどの技法、描法や構図を詳しく分析した²⁶⁾。

この《泉》はピカソの新古典主義時代の作品で、福島が帰国の際にすでに手放しているため日本へ招来されなかったが、もし「福島コレクション展」に出品されていたら、《海辺の母子》と同様に大いに話題になっていたであろう。

「福島コレクション特集号」〔『美術新論』(4巻2号, 1929年)〕の編集作業をした画家の熊岡美彦は、パリの福島宅を訪れて、玄関の正面に飾ってあるピカソの《赤い帽子の女》(1921年, ジョルジュ・ポンピドゥ・センター, Z.IV:353)に魅せられて²⁷⁾、その模写をしている。熊岡は滞欧中、ピカソの他にマネやセザンヌらの名作の模写もして、その模写は前述のピカソの模写作品と一緒に第七回槐樹社展覧会(1930年2月26日-3月14日, 東京府美術館)に特別陳列された²⁸⁾(fig.5)。展評では「特に名作に接する機會の少ない日本畫壇を裨益すること大なるものがある。その爲に莫大な犠牲を拂つてくれた氏の勞を多としなければならない」²⁹⁾と熊岡の模写制作が労われた。また彼が模写したピカソの《赤い帽子の女》の原画はパステルで描かれているが、熊岡が油彩で模写したことを「材料の點から考へれば矛盾がある理で



fig.4
パリ16区の福島繁太郎宅の客間：中央に
《泉》が見える
〔『美術新論』4巻2号, 1929年〕



fig.5
熊岡美彦の模写展示：ピカソ《赤い帽子の女》の
模写は左から3番目〔第七回槐樹社展覧会〕『美術
新論』5巻4号, 1930年〕

はあつても、実際に當つて觀賞する場合些の矛盾をも感ずる事なく、寧ろ或る効果を擧げてゐる」³⁰⁾と評され、これまでピカソに否定的であった武者小路実篤も「ピカソは僕はどうもすきになれない一面があるがそれを見ると感心しないわけにはゆかない」³¹⁾と考えを改めた。その後、武者小路実篤は1936年に渡欧し、ピカソと会ってからピカソ芸術に対する見方が変わったようである³²⁾。

当時の日本では、今日ほど西洋美術の実物を見る機会が無く、また印刷技術も現代ほど進歩していない時代であったから、こうした模写作品は画家の技術を習練するためだけでなく、オリジナルの代替作品(複製品)として鑑賞する役割も担っていたのであろう。その後「ピカソ研究展覧会」³³⁾(1934年4月15日-19日、銀座・青樹社、造形文化協会主催、アトリエ社後援)が催され、ピカソについて文献上の研究だけでなく、原画や模写、複製などを通して多角的にピカソ芸術を理解する研究が行われた。こうした研究目的の展覧会が催されるのもピカソ芸術の深層を知るためであろう。

2. 日本の美術画壇へのピカソの影響

これまで見てきたように、日本では1930年代前後に、ピカソの新古典主義時代の作品《海辺の母子》が称賛され、ピカソ芸術の影響を受けた画家らによるピカソの技法研究もされ、ピカソの存在が実証された。ここでは、実際にピカソ芸術が日本の美術画壇に与えた影響について検証してみたいが、この時代の“戦争”という特殊な社会情勢との関係にも目を向けないわけにはいかない。

2.1 帝展系作家への影響

この時期、特にピカソに傾倒した画家は帝展系の伊原宇三郎である。伊原は農商務省の海外実業練習生としてフランス留学(1925-29年迄)し、帰国後「ピカソ論」の執筆³⁴⁾や、『みづゑ』の「ピカソ特集号」(1938年6月臨時増刊号)に写真を提供するなど、誌面でピカソを積極的に紹介し、一方でパリ留学中からピカソ作品の模写も手がけ、ピカソの新古典主義の影響を受けた人物画も数多く描いている。

伊原が戦後、『美術手帳』に載せた「ピカソに憑かれる」³⁵⁾には、彼が留学したエコール・ド・パリ全盛期においてピカソはすでに世界的に認められ、400人もの日本人画家がパリ留学しているなかで、「クラシックを最上の研究対象にする行き

方と、活発な現代活動だけから養分を吸収しようとする行き方の丁度中間の過渡時代であった」と当時の状況が記されている。伊原自身は新旧の両極に跨って勉強したが、彼は一時まるでピカソに“憑かれた様”になってしまっていた。約二年間、『パリ週報』の画廊紹介に一枚でもピカソの絵が出ていれば、出かけていって「写真で記憶模写を沢山した」ほどであった。伊原のピカソ観察が鋭かったことは、「滞欧日記抄」³⁶⁾にピカソがモンパルナスの絵具屋で安物の画布を買っているのを目撃したが、後に見たピカソの絵には安物の質感が効果を上げて生かされていたと書いていることから窺い知れる。その後、イタリア旅行をし、ルネサンス絵画を深く理解する際に、ピカソを理解していたことがどれだけ役に立ったか知れないと回想している³⁷⁾。

伊原がパリで模写したピカソの作品は《生木と枯木のある静物》(1919年、ブリヂストン美術館、Z.III:364)を含めて14点³⁸⁾(fig.6)あるが、その多くはピカソが1925年に描いたキュビズム風の静物画である。伊原はキュビズムの影響が見受けられる

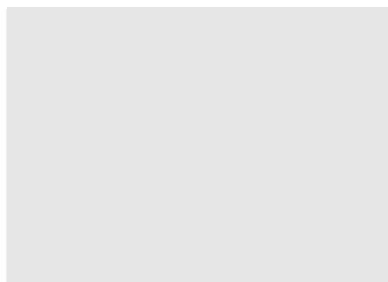


fig.6
伊原宇三郎の模写：ピカソ《生木と枯木のある風景》
1925年頃 徳島県立近代美術館

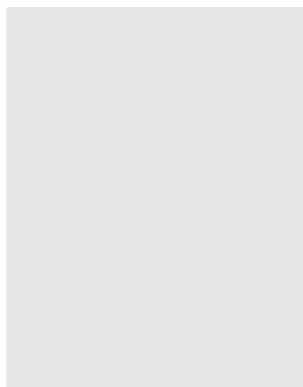


fig.7
伊原宇三郎《椅子によれる》
1929年 石橋美術館

静物画《白い壺のある静物》(1927-28年, 徳島県立近代美術館)を描く一方で、ピカソの新古典主義の影響を受けた《椅子によれる》(1929年, 石橋美術館, 第十回帝展特選)(fig.7)や《室内群像》(1928-29年, 東京国立近代美術館)など、豊満な四肢の堂々とした女性像も描いた。

伊原と中野和高や鈴木千久馬らは、「帝展の新進 中野和高, 鈴木千久馬, 伊原宇三郎氏のピカソ, さて日本は銀座の三越, 松屋, 松坂屋」³⁹⁾と児島善三郎に揶揄されたように、ピカソの新古典主義時代の影響を受けていた。鈴木千久馬の《四人の女》(1927年, 福井県立美術館, 第八回帝展特選)や《母子》(1932年), 中野和高の《赤衣の女》や《婦人座像》(1930年)にもその傾向が顕著に見られる。田邊至が当時の帝展作家を、「近來の歸朝者の多くが, 揃つて同じ様な傾向にばかり進んでゐるのは, 一體何ふしたと云ふのだ。(中略)ピカソの太い腕だの足だのが, そこいらに轉がつて居る。」「ピカソが流行すると, 誰でもがピカソ」でなければならない傾向⁴⁰⁾だと批判していることからわかるように、当時は、日本のアカデミックな画家たちによるピカソの新古典主義時代の作風への傾倒ぶりは甚だしかったのである。

2.2 日本画家のピカソへの関心

日本画家もピカソへ関心を寄せていた。1921年に渡欧した土田麦僊が妻の千代に宛てた書簡⁴¹⁾などからみて1920年代初めにすでに始まっていた。麦僊らが創設した国画創作協会は梅原龍三郎を迎え、1926年に洋画部を新設し、それ以後1938年まで9回に渡って西洋美術の特別陳列を福島繁太郎の協力によって催し⁴²⁾、1928年の第七回国画創作協会展(同年に第1部を解散し、名称を「国画会」に改称)に、ピカソの新古典主義時代の《泉》(1921年, Z.IV:321)を出品している。

1930年代に20世紀西洋美術の多様な表現を意識した日本画家が現われるが、福田平八郎もその一人である。彼は近代日本画史上の記念作となる《漣》(1932年, 大阪市立近代美術館建設準備室)を描いた心境を語った文中には、ルソーやピカソの名前が出ている⁴³⁾。それによると、「人間の作出すものに絶対的な創作と云ふものはあり得ないとは言へやう。然しどんなにいいものだからと言って、昔の人の描いた古い傳統の繰返しだけでは意味が無いと思ふ」と述べ、「近頃ピカソの態度に感激を受けることが多い。絶えず新しいものを創作して行くピカソの態度, そこに私の畫家と

しての感激の源があると云ふ氣がする」と、福田自身の創作の原点(意味)をピカソの制作態度に重ね合わせて共感している。

吉岡堅二は、日本画のモダニズムを志向し、1934年に「山樹社」を結成した日本画家だが、彼は《馬》(1939年, 東京国立近代美術館)を描くために、ピカソが《ゲルニカ》のために描いた一連の習作のうち、《ゲルニカ習作》(1937年5月20日, 国立ソフィア王妃芸術センター, Z.IX:27)や、《ゲルニカ習作I》(1937年5月10日, 国立ソフィア王妃芸術センター, Z.IX:17)、《ゲルニカ習作IV》(1937年5月10日, 国立ソフィア王妃芸術センター, Z.IX:19)などを模写⁴⁴⁾(fig.8)して、悲鳴を上げ苦痛に身をよじる馬のモチーフを徹底的に研究した。

川端龍子の弟子で、異能の日本画家と言われる四方田草炎(1902-1981)もピカソの造形表現を取り入れようとした画家の一人である。生前の彼と親しかった友人は、草炎を語る座談会で、草炎の戦前の《花紅白》(1931年青龍展出品)という作品の写真(『美之國』7巻10号, 1931年)を見ながら、次のように語っている。「セザンヌ, ピカソに強い刺激を受けていて、立体的な物のつかみ方を心がけていたのでしょう。対象物の「向う側」ということをよく言っていました」⁴⁵⁾。つまり、草炎が写生の際によくモチーフの後ろに回って見ていたと言うことは、草炎もオブジェの背後にあるものを意識する画家であった。

このように、ピカソの芸術は、20世紀の西洋美術の新傾向を受けて新しい方向性を求めた日本画家のなかでも、特に革新的な日本画を目標とした画家に受け容れられたのである。

2.3 日本のシュルレアリスムとピカソの関係

2.3.1 日本のシュルレアリスム誕生

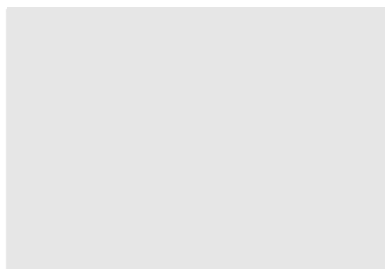


fig.8
吉岡の模写: ピカソ《ゲルニカ習作I》
〔吉岡堅二展 新日本画のバイオニア〕
山種美術館, 1988年 より転載)

1930年代初頭に、日本美術界にもシュルレアリスムが誕生していたので、次に日本におけるシュルレアリスムとピカソ芸術の関係を探してみたい。パリで1924年にアンドレ・ブルトンのシュルレアリスム宣言が出され、ブルトンを始め、フィリップ・スーポー、ポール・エリュアールらの詩人やマックス・エルンスト、ジョアン・ミロらの画家たちが、オートマティスム(自動記述)の方法で狂人、霊媒、夢、幻覚などに現れる意識下の世界を探求し、キュビズム以降の様々な芸術主張、運動の集大成として展開していた。ピカソを称賛していたブルトンは、ピカソをキュビズムにおけるシュルレアリストとしてみなしていた。

一方、日本のシュルレアリスムは、1929年の第十六回二科展(1929年9月3日-10月4日、東京府美術館)に古賀春江や中川紀元、東郷青児、阿部金剛らがシュルレアリスムの傾向を示す作品を出品し、1931年の第一回独立美術協会展(1931年1月11日-31日、東京府美術館)に、パリでシュルレアリスム運動に接した福沢一郎(1924-31年留学)がエルンストの「デペイズマン(転置法)」の手法で制作したコラージュ作品37点を発表して始まった。

美術評論家の外山卯三郎は、第一回独立美術協会展に福沢一郎が出品した数点の作品について、「現代の日本に於いて、ピカソのネオ・クラシスム時代を模倣する作家は多い。然しそれは形式的な視覚的なピカソの一時代の模倣であるに過ぎない。それに反して福澤氏に於けるピカソ的と言ふのは、そのエスプリとメチエに於いてである。ピカソが「枝にとまれる鳥」を描くやうに、福澤氏は、「悪きイデーの埋葬」を描くだろう。」と述べ、福沢のシュルレアリスムの作品の傾向はピカソ芸術に即応していると批評した⁴⁶⁾。

福沢は実際にピカソを意識していた画家で、それは福沢が『アトリエ』に載せた論考「ピカソ」⁴⁷⁾や、晩年の福沢の版画がピカソの影響を受けていると指摘されている⁴⁸⁾ことから理解できる。福沢が描いた巨大な二頭の牛の作品《牛》(1936年、東京国立近代美術館、第六回独立美術協会展出品)は、福沢自身は「古代ギリシアの金の腕環の打出し模様からヒントを得た」⁴⁹⁾と述べているが、グロテスクで不気味な牛の顔はピカソがモチーフの一つに描くミノタウロスをも連想させるのである。

峰岸義一は、シュルレアリスムの絵画運動が次第に組織化されていくなかで、1928年に「主情派美術会」を結成後、ピカソの豹変主義を称賛し⁵⁰⁾、

「三科造形美術協会」の渋谷於寒(修)や玉村方久斗(善之助)と一緒に「カメレオニズム展」(1929年9月5日-9日、銀座松坂屋)⁵¹⁾を開催した。峰岸は1929年12月に渡欧して、パリでピカソやアンドレ・サルモンらの知遇を得て、「巴里東京新興美術同盟」を結成し、「巴里東京新興美術展」(1932年)を日本に招来した。この展覧会にピカソは作品を3点出品している。これについては「2.3.2 1932年の二つの展覧会」で後述する。

阿部金剛(1925-27年フランス留学)はアメデオザンファンの著書『Art』(1929年)から翻訳引用して『シュルレアリスム絵画論』⁵²⁾を論筆した。その後、出版された『阿部金剛画集』⁵³⁾に収録された阿部の作品《Fête en ciel》(1929年)、《Rien No.1》(1929年)、《Rien No.2》(1930年)に、『シュルレアリスム絵画論』のなかの「ピカシスム」の章のオザンファンの文章を引用⁵⁴⁾して、自ら解題をつけている。

阿部展也(芳文)は末永胤生、砂川美智子とシュルレアリスム傾向の「1940年協会」(1933年)を結成しているが、その頃の阿部の作品《作品(7)》(1934年、1940年協会第3回展出品)や、末永の作品《タブロー(2)》(1934年、1940年協会第3回展出品)、は、ピカソのシュルレアリスム接近時代の作風に徹している。その後、阿部は日本のシュルレアリスムに主導的な役割を果たした美術評論家の瀧口修造と共に詩画集『妖精の距離』⁵⁵⁾を刊行した。阿部が描いた挿絵は「1940年協会」時代のピカソ風シュルレアリスム絵画から変化し、金属性も感じさせる有機的フォルムの連作で描かれている。

2.3.2 1932年の二つの展覧会

1932年にパリと東京で、ピカソとシュルレアリスムに関係する注目すべき展覧会が開かれた。6月、パリのジョルジュ・プティ画廊で催された「ピカソ展」と、半年後の12月に日本で初めてフランスのシュルレアリスムが紹介された「巴里東京新興美術展」である。

評論家の富永惣一は、パリのジョルジュ・プティ画廊で開かれたピカソの展覧会(1932年6月16日-7月30日)⁵⁶⁾の開催前日に行われたレセプションに出席し、その時の様子を次のように回想⁵⁷⁾している。富永はピカソを「此の巨人をかみくだかすには現代繪畫の味はない」と考えて、彼の三十年間の画業に注目して作品を年代順に見ていくが、1925-6年頃の作風を「形式崩壊は物體關係を線と面とに還元せる感覺の再構成となつた。あらゆ

る物體は分解されてそこに残つたものは畢竟ピカソの色彩的戦慄のみである。」と批評し、大広間にずらりと並んだこの種の作品に対して茫然と訳のわからぬ素晴らしさに心打たれたと述べている。

このピカソの個展は、ピカソの初期の青の時代から1932年の近作までのピカソ自らが選んだ236点⁵⁸⁾の作品で構成され、現在当館所蔵の《腕を組んですわるサルタンバンク》(1923年、ブリヂストン美術館, Z.V:15)も出品されていた⁵⁹⁾。ピカソは1920年代後半から、アンドレ・ブルトン⁶⁰⁾をはじめとするシュルレアリストたちと接していて、《3人の踊り手(ダンス)》(1925年、テート・ギャラリー, Z.V:426)を転換点に、新古典主義時代を終えて身体を暴力的にデフォルメしたシュルレアリスムへと接近する「メタモルフォーズの時代」⁶¹⁾に移行していた。《3人の踊り手(ダンス)》もこの展覧会に出品された。富永はピカソが描いた一連のデフォルメされた作品を、レセプション会場に居合わせた批評家に意見を求めたところ、今日のヨーロッパの行き詰まりとピカソの自己破壊という結論だった。

このピカソ展から半年後の12月、東京ではフランスのシュルレアリスムを初めて紹介する巴里東京新興美術展⁶²⁾(東京府美術館, 1932年12月6日－20日)が開催された。この企画は峰岸義一が1929年に渡仏してアンドレ・サルモンとピカソの賛同を得て、在仏ジャーナリストの松尾邦之助らの協力によって、日仏新興美術交歓の会が催されたことから始まった。巴里東京新興美術展の目録に「現代前衛芸術の果敢なる冒険を試みつゝある巨匠パブロ・ピカソを先登に清新なるエコール・ド・パリの一切、新自然派、立体派、純正派、超現実派、新野獣派等の一流大家の作品を紹介する空前の企てに属する」と記されており、ピカソに始まる同時代の前衛絵画の展覧会だったことがわかる。

シュルレアリストの作品はジョルジョ・デ・キリコ、イヴ・タンギー、マックス・エルンスト、

フランシス・ピカビアなどで、ピカソの作品は《コーヒー茶碗》⁶³⁾(《カップとスプーン》1922年、ブリヂストン美術館)(fig.9)、《小さい頭》、《頭》(おそらく《首》(1926年, Z.VII:31)のこと)の3点が出品されていた。ピカソはシュルレアリストに分類され、「パブロ・ピカソの製作は現在この派の重要素をなしてゐる。こゝにある静物(コーヒー茶碗)の如きは立体派時代の製作であるが「顔」の如き作は彼が立体派から超現実派に轉移した最初の作に属する。立體的分解を企て乍らそこに著しく主観的ファンタジーを加へてそれを興味ある構圖となしたものである。彼の抽象主義時代の現實的對照の分解圖とは大いに異なつてゐる點を見脱しがたい。」と解説されている⁶⁴⁾。評論家の森口多里は『巴里新興繪畫選集』を編集し、上記の2点についても批評を載せている⁶⁵⁾。

この展覧会は特に若い人々に刺激を与えたようで⁶⁶⁾、展覧会を見た三岸好太郎は衝撃を受けてシュルレアリスムへ傾倒していった。彼が1933年頃制作した《コンポジション》(1933年頃、北海道立三岸好太郎美術館)(fig.10)の色調や画面構成は、この展覧会に出品されたピカソの《カップとスプーン》(fig.9)を彷彿させるものがある。

2.3.3 詩人ピカソと日本の俳諧

この展覧会の準備でパリのピカソを訪問した峰岸義一は、ピカソから次のような話を聞いてそれを『みづゑ』(no.307, 1930年)⁶⁷⁾に載せている。「彼は又詩をよく讀破してゐる。日本の俳諧に就いても及んで俳畫の精神、又東洋の衝撃的表現を賞讃してゐた。『小さい形式のものへ、非常に大きな内容を盛る、しかも洗練された筆致と合理化された構想(多分雲烟、又は余白のことを含む)は東洋

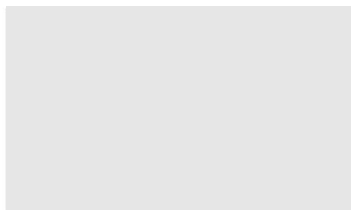


fig.9
ピカソ《カップとスプーン》
1922年 ブリヂストン美術館

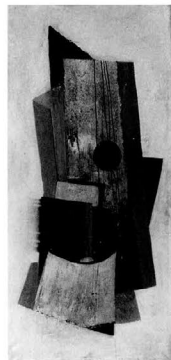


fig.10
三岸好太郎《コンポジション》
1933年頃 北海道立三岸好太郎美術館

乃至日本の特質で、歐洲になきものなるが故に、歐洲人がこれを眞似てゐることは事實である。只私の知つてゐる範圍では十七世紀のスペインの詩人でゴンゴラ(Góngora)と云ふ人があるが、之が日本式の精神派の完全なもので歐洲人としては珍しく、その本は佛譯されてゐる筈故是非讀んで欲しい。』と云ふやうなことまで附加へた。」とある。

さらに、1932年のジョルジュ・プティ画廊のレセプションに主賓のピカソが現れなかった一件について、美術関係者の話⁽⁶⁸⁾を総括すると、「ピカソは展示作業に疲れて⁽⁶⁹⁾、家で子供に日本の俳句の本⁽⁷⁰⁾を読んで聞かせていた」という理由であった。ピカソはこの頃、シュルレアリストの画家よりも詩人たちの活動に関心を示していて⁽⁷¹⁾、1935年頃から挿絵入りの“自動記述”による詩を書き始めている⁽⁷²⁾。日本のモダニズム詩を代表する詩人でもある瀧口修造は『カイエ・ダール』(10巻7-10号、1935年)誌に発表されたピカソの詩とアンドレ・ブルトンの「詩人ピカソ」の評論を「意義ある企て」と評価している⁽⁷³⁾。瀧口自身もピカソを含めた7人のシュルレアリストたちのために詩を書いていて⁽⁷⁴⁾、山中散生の編纂した『L'ÉCHANGE SURREALISTE』(1936年)に所収されている。

瀧口をはじめ、北園克衛や竹中郁⁽⁷⁵⁾、山中散生、豊田一男⁽⁷⁶⁾など、日本のモダニズムの詩人たちもピカソに注目した。北園克衛は、自分の最初の詩論集『天の手袋』⁽⁷⁷⁾に収められた「PABLO PICASSO ET SON REVE DE 1929」でピカソ評論を、断片的な言葉を散在させて表現している。また小熊秀雄のように、日本のピカソ追従者に対して「日本畫壇のピカソに對する無條件的降伏が、いまピカソとともに日本のピカソ追従者を没落させやうとしてゐる。」と言い、ピカソはこれ以上は様式の変化を独創的に發揮することはないと「ピカソのマンネリズム」を主張する⁽⁷⁸⁾詩人も現われた。

アンドレ・ブルトンらシュルレアリスムのグループの一員としてピカソは、日本に紹介され、またその頃ピカソが詩作を始めたことで、日本人の画家のみならず詩人たちからも着目された。彼らはピカソ芸術から触発されたのである。

2.4 日本の新美術団体とピカソ

日本は、1931年の満州事変の勃発、1937年に日中戦争、さらに1938年の国家総動員法の施行、1941年に太平洋戦争へと突入した。軍国主義下で、美

術界も1935年に在野団体を取り込む帝展の改革(松田改組)が行われて、美術画壇の自由も制限されていった。次第に閉塞した時代へ移行するなかで、この帝展改組に対して1936年に猪熊弦一郎や佐藤敬、小磯良平らは新制作派協会を結成し、翌年1937年に長谷川三郎らが自由美術家協会、さらに1938年に吉原治良らが九室会を結成するなどして、自由を求めて活動する若手美術家たちによるモダニズム系や前衛的傾向の新美術団体が次々に生まれていた。次にこうした青年画家たちのピカソ芸術への態度を考えてみたい。

2.4.1 猪熊弦一郎、佐藤敬のモダニズム

猪熊弦一郎ら新制作派協会のメンバーは「光風会で新興モダニズム勢として鳴らした一団」⁽⁷⁹⁾である。猪熊は1936年に新制作派協会を結成した動機を、「私たち青年作家は芸術的なことを純粹に勉強する良いチャンス」⁽⁸⁰⁾と回想した。当時ピカソに心酔していた猪熊弦一郎は、ピカソの他にマティスも連想させる人物を取り入れたモダニズム的傾向の作品《海と女》(1935年、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館)や、ピカソの《ゲルニカ》を想起させる《夜》(1937年、同美術館)(fig.11)などを制作した。猪熊はフランスに留学(1938-41年)して、裕(峪)伊之助夫人などの紹介でマティスを訪ねて絵画の指導を受けるが、マティスから「お前はピカソが好きだろう」と言われてしまう。猪熊は教わることもよりも自分のものを作り上げることを意味を悟ったが、戦後にアメリカ留学するまではマティスの影響が抜けなかったと回想している⁽⁸¹⁾。猪熊はフランス滞在中、藤田嗣治の紹介でピカソのアトリエへ行く約束をとったが、戦争が始まってピカソは疎開するためにパリを去ってしまい、再び会えなかった⁽⁸²⁾。彼の滞欧期の最後に描かれた作品《マドモアゼルM》(1940年)は、敬愛するピカソへのオマージュのような作品であ

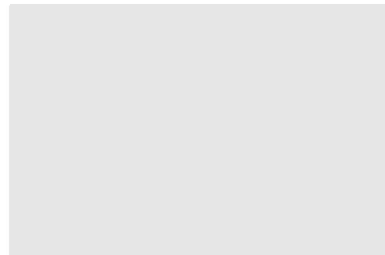


fig.11
猪熊弦一郎《夜》
1937年 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館

る。

佐藤敬は、猪熊と新制作派協会を立ち上げたが、ピカソの青の時代や新古典主義時代、《ゲルニカ》の影響が見られる作風で制作し、やはりピカソに傾倒した画家である。1929年第十回帝展に初入選した《若き男の像》(1929年)などの一連の肖像画(fig.12)は、ピカソの新古典主義時代の影響を受けている。佐藤(1930～34年留学)は帰国後、猪熊弦一郎の三部作《昼》《黄昏》《夜》(1937年、第二回新制作派展出品)を連想させる、《月》《雪》(1938年、第三回新制作派展出品)、《暁》(1940年、第五回新制作派展出品)を出品し、二人の何れの三部作の作品はピカソ芸術を下敷きにしていると思われる。

新制作派協会のメンバーの多くは藤島武二と東京美術学校で師弟関係にあったため、藤島は新制作派協会を発足から支持して会員たちの精神的支えとなっていた。彼は新制作派協会が結成される以前に『美術新論』(6巻4号,1931年)に次のように述べて、ピカソやマティス、ドランといった当時評判の画家のモダンアートに理解を示している。「現在評判のピカソ、マチス、ドランなどの仕事を一部の人は人間業でないようにいうものもあるが、われわれはむしろ昔の人の仕事には驚くものも多くとも、現代の人の作品には、それほど感銘を与えるものに接したことも無い。しかしこれは時代の相違もあること、今日が劣って昔が優ると必ずしもいえない、現にマチスにしるピカソにしる、最も現代に適応しているものとして事実が証明しているのであるから、現代を代表するものとして認めねばならぬ。何しろ忙しい時代にコツコツ啄いているなどの芸術は成立しないので、昔価値の

あった宗教的な作品、歴史的な作品などは今の人にはほとんど興味を持たない。何んでも手配早く要領を得たものでないといけないようである。構図もなるべく簡潔に、色彩の効果などを尊ばれているようである。これとて矢張り作者は非常に苦心を要することであって、充分その才能を備えた人が、研究努力によってもたらす結果で、誰でもできるというものではない。その点マチスもピカソも事実上大いに認めないわけには行かぬ。」⁸³⁾と述べ、若い画家がマティスやピカソを皮相的に模倣することに注意を促している。

また藤島は、佐藤敬が編集した「ピカソの素描集」(『アトリエ』臨時増刊号13巻7号,1936年)にピカソの未発表のデッサンを集めるために関わっている。素描集には〈サルタンバンク〉シリーズやバルザックの〈知られざる傑作〉、〈変身物語〉のシリーズの版画が収められている。

2.4.2 岡本太郎、長谷川三郎らの抽象美術

岡本太郎(1929～40年留学)は1933年頃パリで、「アブストラクション・クレアシオン(抽象=創造)」という抽象運動のグループに最年少で参加するが、岡本の転機となったのは、彼が前年の1932年に見たピカソの静物画である。岡本はパリ留学当初、芸術表現で自分の殻を脱ぎ捨てずに苦悩していたが、ピカソの静物画に出会ってからは抽象画の道を歩んだと戦後まもなく回想した。彼はそのときの事を次のように述べている。「ある日、ピカソの抽象作品にふれて、太い棒で叩きのめされたようなショックを受けた。既に身のうちに用意されていた近代芸術への感動が、セキを切ってふきあふれたのである。そして、抽象的な技術こそ晦渋な地方色を否定し、極めて自然に国境をのり越えた、真に世界的な表現様式であると、確信的に感じとったのである」。以後、岡本は、フランス人の友人で抽象画家と熱心に芸術論を交わし、新しい芸術に飛び込む踏ん切りがついて、自分のアトリエで思う存分に抽象的表現を試みた⁸⁴⁾。彼は風土や民族の違いを超えたところで、制作が可能になったことをピカソの静物画から靈感を得たのである。岡本が見たピカソの静物画は、《水差しと果物皿》(1931年、グッゲンハイム美術館, Z.VII:322)で、パリのローザンベール画廊に展示してあった作品である⁸⁵⁾。

岡本は抽象画の4枚目の《空間》(1934年作/1954年再制作)⁸⁶⁾(fig.13)を制作した心境について、「私はいつでも、オブジェが描きたかった。そして西

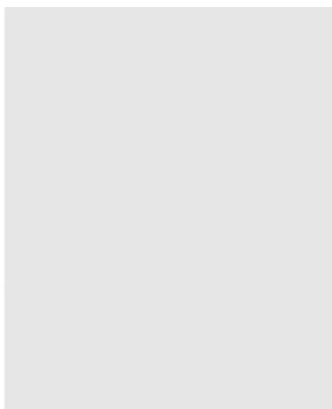


fig.12
佐藤敬《若き男の像》1930年 別府大学

洋芸術の重さと、ピカソなどが持っているあらあらしさに対抗し、(今日私はむしろ、周囲にみちている日本の絵画の繊弱さ、不鮮明さに対して、逆に激しさを強調しているが)純粋なリリシズム、繊細を極めたエモーションを作り上げようとしたのである」⁸⁷⁾と語っている。

長谷川三郎⁸⁸⁾や福沢一郎⁸⁹⁾などが1930年代後半、誌上で抽象芸術論を紹介すると共に、日本に抽象美術の波が押し寄せた。この時期は前衛の小グループの全盛期で⁹⁰⁾、そのなかから1937年に長谷川三郎、村井正誠らが結成した自由美術家協会が誕生した。前述の岡本太郎と同じ頃、欧米へ留学した長谷川三郎(1929～32年留学)も抽象美術に取り組んだ一人である。留学中は、「ラファエル、ジョット、ジョルジオ・オーネなどの古典を模写する一方、ピカソ、アルプ、モンドリアンの抽象絵画、コルビジエの新しい建築、カルダーのモビールなど」に興味を抱いていた⁹¹⁾。彼は批評家としても活躍し、東洋の伝統的な芸術観と現代抽象絵画という二つの異質な関係から、新しい芸術の可能性を引き出そうと考え、「世界的な視野から見て日本の絵画とは何か、またそれは現代において国際性をもち得るか」という問いを投げかけた⁹²⁾。長谷川が大阪信濃橋洋画研究所で学んでいた頃結成した「白象会」の会誌に、「今年の二科に何枚の『絵』があった。ピカソやドランが十年程前に描いた絵のうつしと、人のしない事しない事と努力した絵と、どっちが『絵』だ。」と述べた青年時代の長谷川の鋭い批評が載っている。またピカソについて、「巴里博覧会の壁畫、こゝに紹介する寫眞、何れも、何か、その表現法に於て、我々より一世代前の人、と云ふ感じがし乍ら、やは

り、その裸の表現、語らざるを得ない、或は絶叫せざる得ない魂を持つ作家としてのピカソの渾身の努力を僕は買はざるを得ない」⁹³⁾と述べるなど、長谷川は現代の視点に立って、ピカソ芸術を美術史の流れのなかで捉えていたことが窺える。長谷川が参照した写真とは、『カイエ・ダール』誌(12巻6-7号、1937年)に掲載された、ピカソがドラ・マールら写真家との共同作業で行ったポートフォリオ「写真家ピカソ」(テキスト / マン・レイ、ピカソの4枚フォトグラムの複製)である。

長谷川三郎の最初の著作『アブストラクト・アート』⁹⁴⁾に、1935年、ニューヨーク近代美術館で開催された「キュビズムと抽象絵画展」の展覧会カタログが引用された。これはアルフレッド・H・バー・ジュニアの企画による、ピカソが20世紀美術で最も重要な存在であると位置づける画期的な展覧会で⁹⁵⁾、ピカソの1907～29年迄の作品32点も展示された⁹⁶⁾。展覧会カタログは翻訳されて、1937年の『アトリエ』(14巻6号)に、本文とアルフレッド・H・バー・ジュニアが近代美術史を弁証法的に説明した「チャート・オブ・モダンアート」⁹⁷⁾が掲載され、この時期の日本の画家たち、いわゆる長谷川三郎、福沢一郎⁹⁸⁾や伊原宇三郎⁹⁹⁾らの著述にもその引用が見られる。1938年に二科会のなかに作った九室会のメンバーの吉原治良もこの展覧会カタログ¹⁰⁰⁾を持っていたようである。吉原治良は戦後になってピカソあるいはアル・ブリュットのスタイルを作り上げていくので、次回に述べる予定である。

瑛九(杉田秀夫)は、長谷川三郎らと前衛美術活動をおこなうが、彼の美術界デビューとなった『瑛九氏フォート・デッサン作品集 眠りの理由』(芸術学研究会、1936年4月10日)を、若手評論家の植村鷹千代は「ピカソの大衆化」を例にあげて現代日本絵画を論じるなかで、瑛九の作品集を「意識の絵画が発足した」と評している¹⁰¹⁾。

2.4.3 香月泰男、今西中通のキュビズム

こうした特に前衛的傾向の画家の間で、抽象絵画が問われ、キュビズムの重要性が思考されるが、しかしキュビズムが日本に紹介されてから二十年近く経ってもキュビズムを運動原理としたグループは結成されなかった。1910年代から1920年代の萬鉄五郎や古賀春江は、土着的なテーマをキュビズム的手法で描いたが、彼らは個々に摂取して自分の作品に応用するだけだった。1930年代で特にキュビズムに反応した画家はどうだろうか。次に

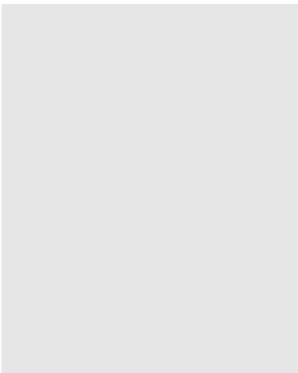


fig.13
岡本太郎《空間》
1934年作/1954年再制作
川崎市岡本太郎美術館

香月泰男と今西中通を取り上げてみたい。

香月泰男は東京美術学校在学中からピカソに傾倒し、彼のスケッチブックにはピカソを研究していた跡が残されている¹⁰²⁾。彼の1936年8月中旬のアトリエを描いたスケッチには、ピカソのエッチング《ミノタウロマキア》(1935年)の複製が部屋の壁に貼られているのが見られる。またピカソのイベリア彫刻の影響を受けた時代の作品を思わせるような《少年》(1937年、三隅町立香月美術館)も制作している。香月はピカソやブラックの影響を受けて「香月式キュービズム」の確立に力を入れていたようである¹⁰³⁾。香月は1930年代に北海道の倶知安の美術教師になり、彼の後輩の話によれば最初のお給料でピカソの画集を購入したという。一方、香月の《二人座像》¹⁰⁴⁾(1936年、下関市立美術館)(fig.14)の作品は、親戚の子供と海水浴に行き、撮影した写真をもとに制作されたが、ピカソの青の時代を想起させるのである。

今西中通(1908-1947)もキュビズムを摂取した画家である。彼は独立美術協会に所属し、川口軌外のキュビズムの造形理論に触発されて、ピカソやレジェ風の造形表現を取り入れた画風に転換した。1934年頃から、そうした傾向の裸婦群像スケッチ《裸婦》(1935年頃)を繰り返し描いている。《顔をかしげる女》(1935年頃)にはピカソがシュルレアリスムに接近する時代の作風の影響が見られる。今西は、その後キュビズムの生みの親であるセザンヌまで遡り、「ひとりで近代西洋の造型思考をやり直している」¹⁰⁵⁾。彼は1939～41年にかけて、日本の立体派を代表するような作品《提琴》(1939年)を制作した。

香月や今西は、ピカソの様々なスタイルの影響を受けて模索し、独自のキュビズムのスタイルを

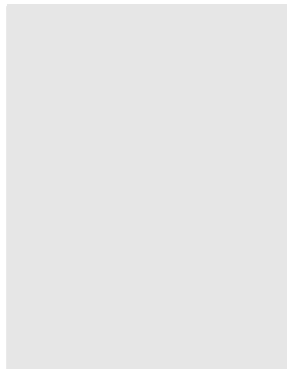


fig.14
香月泰男《二人座像》
1936年 下関市立美術館

作り上げていったと思われる。

3. ピカソ論から《ゲルニカ》批評へ

3.1 1930年代のピカソ論

1930年代のピカソ論は、海外のピカソ研究の翻訳も含め、ピカソに言及する文献が数多く見受けられ、その論考も種々様々である。藤島武二は(当時の)現代の芸術においてピカソ芸術を容認した¹⁰⁶⁾。高村光太郎は「正と謫」で芸術を論じた文中でピカソを取り上げて、「ピカソの謫は近代風の主知による。頭脳の命令無しにピカソは一筆をも動かさぬ。およそピカソの畫ほど隙の無い畫は古来珍しい。」¹⁰⁷⁾とピカソの制作態度を分析した。

須田國太郎はラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナの「ピカソ及立體派に關する完全にして眞實なる物語」(*Revista de Occidente*, 第7年73, 74号に連載)の翻訳の梗概を『洋画研究』(1933年)¹⁰⁸⁾に掲載し、スペインに留学した須田が追求したレアリスムの観点からピカソ芸術を捉えている¹⁰⁹⁾。

評論家の川路柳虹は、『マチス以後 佛蘭西絵画の新世紀』(1932年)のなかでマチスとピカソを比較し、「彼(マチス)の作畫には一定の逕路がある」のに対して、ピカソはカメレオンや香具師、山師呼ばわりされるが、「彼の豹變も轉回も躍進も、そこには彼の懷疑と焦燥をいつも伴つてゐる。」と述べ、ピカソがあまりに敏感な才人で、頭脳以上に手の働く男だから誤解されるのだと説明している¹¹⁰⁾。

ピカソの《アヴィニヨンの娘たち》(1907年、ニューヨーク近代美術館, Z.IIa:18)の図版が、評論家の佐波甫による「ピカソ論」¹¹¹⁾に初めて掲載された。佐波はドイツの美術史家マックス・ラファエルの研究を紹介しているが、「最近のピカソの緩徐調はピカソ作品に對する將來の見透しがついて來た。(中略)二、三年前まではピカソを理解せざれば、現代の繪畫を語り得ざる觀を呈し、いはゆるピカシズムが滔々として畫壇を風靡した有様であつた。」¹¹²⁾と記している。ヨーロッパでピカソ芸術の行き詰まりを懸念した意見は、日本でも富永惣一を始め松本俊介や廣島晃甫などにおいてすでに感知されていたことは既述した通りである。

「ピカソ以後」とつけられたタイトルの論考も誌面にしばしば掲載されている。荒城季夫¹¹³⁾は、新興美術はピカソ系とマチス系の二つの異なつた世界に分かれると述べて、ピカソ以後の作家とし

てフェルナン・レジェ、パウル・クレー、ジョルジオ・デ・キリコなどを取り上げている。豊藤勇¹¹⁴⁾は、ジェイムス・T・ソビーの著作『After Picasso』(1935年)¹¹⁵⁾を参照し、現在(当時の)ヨーロッパではピカソよりも、若手画家が現代美術の発展段階に立たなければならない時期であると述べ、ネオ・ロマンティシズムの作家のクリスチャン・ベラールなどや、シュルレアリスムのイヴ・タンギー、アルベルト・ジャコメッティ、サルヴァドール・ダリを紹介している。

齊藤英一は美術史の伝統とピカソの個々の作品の具体例から「ピカソ近作論」¹¹⁶⁾を展開しているが、論文の副題を「現代日本青年畫家に送る」として、「世界大戦當時ピカソその他の青年畫家等は戦時社會の不況の中に於いて全く貧窮のすべてを味つた」だから「日本青年畫家が緊渾一番ピカソを呑んだ大仕事をして戴きたいのである」と日本の若手藝術家たちを激励している。

ピカソに関する外国文献の翻訳は、早くは1914年に森口多里の訳によるハネカーの「パブロ・ピカッソ」¹¹⁷⁾である。1930年代には、ワルドマー・ジョルジュ¹¹⁸⁾やクリスチャン・ゼルヴォス¹¹⁹⁾のピカソ論考の翻訳が紹介された。またピカソの恋人フェルナンド・オリヴィエによる「ピカソと友達」(全17回)が『みづゑ』(no.354~385, 1934~37年, 税所篤二訳)で連載され、読者はピカソと周囲の人々の交友関係を垣間見ることができるのである。

ピカソの画集も編纂刊行された。伊原宇三郎の『ピカソ畫集』(1932年)¹²⁰⁾には原色版図版6点、写真版30点が載っている。伊原は「評伝」のなかで、「ピカソの名が日本に傳へられてから既に何年かになる。が、未だ一枚として代表作らしいものが將來されてゐない。ピカソの繪は、日本の蒐集家には程度も價格も高きに過ぎてゐる故爲であらう」と述べている。

仲田定之助が編纂刊行した『西洋美術文庫第18巻 ピカソ』(1938年)¹²¹⁾には原色版1点と写真版48点が掲載され、そのなかには《アヴィニヨンの娘たち》や《ゲルニカ》の図版と作品解説も載っている。かつて中川紀元が言及した《アヴィニヨンの娘たち》は、仲田によれば「1906、7年から1908年に亘る此時期を彼の傳記家的興味の分類によれば黒人藝術時代と呼んでゐる。此傾向を示す最初の傑作は「アヴィニヨンの娘達」1907(第九圖)で、これはピカソの理解ある支持者アンドレ・サルモン(第四三圖参照)によれば、ピカソによつて戀々

と秘藏されて居たもので、極端に粗豪な筆致に、娘達の肢態を戀歪し、單化したものであつた。」¹²²⁾とピカソが作品を秘藏していたことがあらたに明らかにされた。

仲田の画集には《ゲルニカ》の解説も載っているが、これについては次の「3.2 日本での《ゲルニカ》批評」で後述する。仲田は、福島コレクションの《横向の顔》(1923年、現在ブリヂストン美術館蔵, Z.V:45) (fig.2)と《馬》(1923年、個人蔵, Z.V:147)についても、「この小品ながら渾然とした彼の佳品は共に1923年の作なのである。私はあのノーブルな、彫刻的な明眸をもつ顔を、温い灰色の馬と、桃色のバックとの快適な色調を今でもよく記憶していゐる」¹²³⁾と述べている。

仲田は序文に、「私は數年來彼(ピカソ)の作品の複製蒐集に心掛けてゐる。これは一點のオリジナルを無理して購ふよりも、多作數千點に上ると聞く彼の複製を出来るだけ多く蒐めて、千變萬化する彼の作風の推移を見る方が、より彼を識る上に於いて効果があらうと信じたからである。」¹²⁴⁾と記し、1,000点もあるピカソの作品から、彼の代表作で、なおかつまだ日本に紹介されていない作品50点程を選ぶことは大変な作業だったと述べている。

その後1939年には限定500部、木版3葉、図版260点という豪華な高見澤木版社による『びかさ』も刊行された。これらは戦前の日本におけるピカソ研究評論の画集として数少ない貴重な美術書といえる。

3.2 日本での《ゲルニカ》批評

ここでは1937年のパリ万国博覧会のスペイン館で発表された《ゲルニカ》について、当初の日本の美術関係者の反応や言及について考察してみたい。

ピカソは、1937年1月初め、内戦中の祖国スペインの共和国政府からパリ万国博覧会スペイン館のために壁画制作の依頼を受けた。4月26日にスペイン北部バスク地方の小都市ゲルニカが爆撃された報道に触発されて、5月1日から50点ほどの素描を制作準備し、5月11日頃からカンヴァスでの制作を開始し、縦3.5×横7.8メートルの《ゲルニカ》を6月4日にほぼ完成した。そして1937年のパリ万国博覧会「近代生活に於ける藝術及技術に関する1937年巴里万国博覧会」(5月25日~11月25日)のスペイン館(7月12日に開館)で公開された¹²⁵⁾。

日本で紹介された《ゲルニカ》に関する記事は、

1938年1月の『アトリエ』誌が早く、クリスチャン・ゼルヴォスの文章と《ゲルニカ》制作時の写真8点(ピカソの当時の恋人ドラ・マールが撮影した写真であろう)、アトリエで制作するピカソの写真やパリ万国博覧会スペイン館入口に置かれたピカソの彫刻の写真、習作素描が掲載されている。ゼルヴォスの《ゲルニカ》の解説は抄訳されているが¹²⁶⁾、「種々の色を、白、黒及び灰色の地味なバックの上に落ち着かせ、(中略)種々の不協和調を取入れて効果を挙げ、(中略)形の単純化、デッサンの単純化、事物の形象化等の方法」といった色調や構図について述べられた。

同年8月に翻訳されたアメデ・オザンファンの「巴里博覧会ノート」によると、ピカソの《ゲルニカ》は、「何と到る處に『心』のあることだろう。スペイン館に入つて見給へ。スペイン動亂の身に迫るやうな苦惱の表情は、スペインの現實に對する眞摯な心なくして現はれないであらう。わけてもピカソの『ゲルニカ』の表情は如何なる心の極みを表現するものか！」¹²⁷⁾と作品をスペイン内戦と結びつけて解説している。

仲田定之助や瀧口修造もその翌年、彼らの著述で《ゲルニカ》を取り上げた。仲田の解説は、「1937年巴里大博覧會に於ける西班牙館の壁畫「ゲルニカ」はピカソ空前の大作である。地味な色調をもつて描かれた此畫は、形の単純化のうちに不協和調を巧みに取入れて効果をあげてゐる、測々鬼氣迫り、妖氣漂ふ此畫は藝術的に傑作であると傳へられる。」¹²⁸⁾と既述のゼルヴォスの解説を引用していると思われる。

瀧口修造は、「彼が怨みと怒りの感情を表すためにとつた破壊と凝縮の方法、生と死の間に浮彫にされた怨みの表情は、日本の或る怨霊の表現的なメーク・アップにさへ酷似するのは興味深い。その素描には涙は鐵線のやうな直線で示されてゐる。また聞こえる活人畫のやうな怖ろしい舞臺装置の中に、刻一刻に凝結させて行つたその巨大タブロオの最初のクロッキイは、子供の戲畫のやうな單純な素描から發してゐることも注意される。またこのタブロオ全體は黒灰白によつて描かれてゐる。それは悲しみの色彩であり、激情をも結晶させる偉大な象徴化である。彼はその意圖のもとに、色彩的に壁紙をとところどころに貼りつけて拮抗對比せしめつゝ、製作しつゝあることも、過程寫眞で見ることが出来る。かうしてピカソの傳説と神話から血の流れるのに感動した人々は、それがきびしい喪の色に見えたことを悲しむのであ

る。」¹²⁹⁾と解説した。《ゲルニカ》を知った経緯については次のように回想している。「1930年代の中頃、とりわけファシズムの暗雲のただよっていた時代では、ピカソは大きな焦点になっていたわけですが、それでも資料は限られていたものでした。「ゲルニカ」のことを最初に知ったのは当時出ていた「マリアンヌ」という週刊新聞の記事で、それをたよりにして、何に書いたか忘れましたが、それがどうやら最初の紹介だったように憶えています。」¹³⁰⁾瀧口は、《ゲルニカ》の制作過程の写真が紹介された『カイエ・ダール』(12巻4-5号、1937年)誌も見ており¹³¹⁾、これらを参考に上記解説を書いている。

植村鷹千代は、《ゲルニカ》をピカソと現代絵画の解釈の文中で、「ピカソの『ゲルニカ』及び一聯のスペインを題材にして作品等は、實にその前衛となるべきものでありながら、ピカソは賢明に、慎ましくぎりぎりのところで控えている。激情と慎ましさの中和、これも平凡を守る非凡事である。」¹³²⁾と説明している。

伊原宇三郎は、「1937年のパリ大博覧會に出陳した「ゲルニカ」はピカソの最大のもので、又傑作でもあるといふ。又、フランコ將軍に對する彼の感情を露骨に出した戲畫は、ジャーナリズムが歓迎しただけに、いよいよ彼の立場を明確なものにした。彼の藝術が政治的に追はれたこと、彼が祖國の爲に愛國の血を湧かせたこと、これ等の事は、事情の違つた日本に住む我等には、大して関わりの無いことである。寧ろ私は、從來全然政治に無関心で、高い藝術の世界だけに安住してゐた彼が、突然祖國愛の叫びを上げた處に、三十年以上、神の如く、又悪魔の如く振舞つてゐた彼ピカソも、やはり一個の人間であつたという實體を得て、興味深く感じてゐる。」¹³³⁾と作品の内面性に強く反応して論評している。

《ゲルニカ》の發表の当初、その実作を見たことのある日本人画家は、岡本太郎、吉井忠、川端実などであつた。岡本太郎は帰國後に書いた著述に、「スペイン館のピカソの大壁畫「ゲルニカ」が一つぬきん出て光つてゐた。」¹³⁴⁾と記した。彼はさらに「私はこの作品をもつて巴里畫壇に最後の點を打つものだ」と自分の考えを明らかにし、後述するように、戦後間もなく「ピカソに挑み、のり超えることが我々の直面する課題である」¹³⁵⁾と宣言するところとなる。

川端実が《ゲルニカ》を見たのはパリではなく、1939年ニューヨーク近代美術館の「ピカソ40年の

芸術展」で、《アヴィニョンの娘たち》なども含めたピカソ40年の一連の画業作品の展覧会のときだった。川端(1939～1941年留学)がパリについて間もなく、第二次世界大戦が勃発し、外国人の退去命令が出たため、彼は帰国の途中でニューヨークのピカソ回顧展を見ることができた¹³⁶⁾。川端はこの展覧会を見て感動し、ピカソのキュビズム時代の作品に関心を示し、日本の画家が見落としていたものが何かを悟った。

吉井忠は1936年の秋から一年間パリ留学し、1937年のパリ万国博覧会でピカソの《ゲルニカ》を見る機会を持った。吉井の晩年の回想では《ゲルニカ》を「休火山」にたとえて、そのときの様子を次のように述べている。「万国博のスペイン館はなかなか完成しなかった。ピカソが共和国スペインから何か依頼されているという噂は私達の耳にも入っていた。ピカソのフランコを諷刺した銅版画がパリ中の本屋等に出た。ピカソがその売上金を人民戦線にカンパするためだった。三十七年夏私は万国博の中の未完成のスペイン館に行き見て。足場の悪い入口にピカソの例の白い女の首の彫刻が置かれていた。さらに行くと大きな室の奥に白と黒と灰色の大壁画があった。ピカソの作品であることは直ぐわかったがそれが「ゲルニカ」だとは後で知った。休火山のような力を漂えたすごい作品だとその時思った。」¹³⁷⁾。しかし、当時の吉井は福沢一郎や瀧口修造らのシュルレアリスム運動に加わっていて、吉井の作品にピカソの影響が表れるのは、戦後になってからである。

《ゲルニカ》は第二次世界大戦前のピカソの芸術のうち、日本に紹介された最重要作品でありながら、この時点ではまだ少数の美術関係者にしか知られていなかったと思われるが、しかし、作品を見た画家たちの脳裏には激しく印象づけられていた。それほどまでにインパクトのある超大作だったのであろう。《ゲルニカ》批評は、戦後の美術界で本格的に論じられることになるのである。

1930年代初めの福島コレクションの初公開を機会に、ピカソの新古典主義時代の作品が称賛されて、一部の前衛的画家だけでなく多くの美術関係者からも評価されるようになるが、ピカソのこのスタイルは、1914年に描いた《画家とモデル》(1914年、パリ・ピカソ美術館)に始まる。ロシア・バレエ団との共同制作や1917年の初めてのイタリア旅行がきっかけになって古典古代へと回帰したのである。同時期のフランスでは愛国主義の機運

が高まっており、こうした風潮は「秩序への回帰」と呼ばれ、古典的な追求をした画家はピカソだけではなかった。

その流れを受け日本でも1930年代に、国粹主義的意識を背景に古典や古代、日本的・東洋的なものに関心を向ける傾向が深まってきた。福島コレクション公開より数年前にすでに斉藤与里が「古畫の新しい研究」¹³⁸⁾という題で論述し、「ピカソが新興繪畫の先驅者でも、理由なしに彼の作品を擔ぐ譯には行かない」と批判して、近代画家が古画を輕視する傾向を危惧している。

また日本画では日本や東洋の古典様式を追求し「古典主義的画風」を確立していく時期であり、日本古来の歴史的題材を新しく踏襲していることや、表現上の新しい感覚を特徴とした作品が発表されている。こうした日本の古典や伝統芸術を意識する日本回帰の風潮が高まるなかで、ピカソの新古典主義時代の作品が受け容れられていったのは洋の東西を問わず当然の帰結だったといえるだろう。

日本美術画壇は既述のように、帝展系作家のピカソの新古典主義への傾倒は甚だしかったし、二科展でも福島繁太郎が、スタイルの流行だけを追いかける画家に対して、「御手本をアングルをピカソに置きかえた所で、魂のぬけてゐることには變わりがない」¹³⁹⁾と画家の外形模倣の心がけが悪いと批評していることから推測して、ピカソが流行してもそれを咀嚼できる画家が少なかったと思われる。

こうして1930年代の日本美術界を展望してみると、日本人画家はピカソの特に新古典主義時代の作品に傾倒しつつキュビズムの重要性も認識して、ピカソ芸術の造形表現を追求した。しかしながら、ピカソの絵の前で泣いた岡本太郎はその理由を、観賞者でなく創作者として、同時代の悩みを正面からぶつかって進んで行く先達者(ピカソ)の姿に感激したため¹⁴⁰⁾と述べるように、若い日本人画家はむしろピカソの存在そのものを芸術のエネルギーにしていたのではないだろうか。岡本は「ピカソに挑み、のり越えることが我々の直面する課題である」と「ピカソへの挑戦」を戦後間もなく提言しており、この言葉には日本の美術界におけるピカソの存在理由、「レゾン・デートル」があると言えるだろう。

II. 1940年代—戦時中のピカソ解釈

1939年に第二次世界大戦が勃発し、ドイツ軍のフランス侵攻によりフランスにいたフェルナン・レジェやサルヴァドール・ダリといった多くの画家たちは、アメリカなどへ亡命し、藤田嗣治ら日本人画家たちも伏見丸や白山丸といった避難船で相次いで帰国した。この章では、戦時中の日本人画家がピカソに抱いた解釈やイメージについて触れてみたい。

1. パリにおけるピカソ展評

フランスの1930年代は、1929年のニューヨークの株式市場暴落に端を発した世界的恐慌による経済不況であった。そのため1930年代末は、フランス・フランの平価が下がって、留学生在活が凌ぎ安いため¹⁴¹⁾、欧米へ旅立つ日本人画家が多く、猪熊弦一郎(1938～1940年フランス留学)もその一人だった。1938年5月、「猪熊弦一郎をフランスへ送る新制作派会員展」(5月1日～5日)が開催され、猪熊はヨーロッパ美術の中心であるフランスに向かった。先に留学していた関口俊吾(1935～1940年)¹⁴²⁾は、1939年1月にポール・ローザンバールで三年ぶりに開かれたピカソの個展¹⁴³⁾を「久しぶりのピカソの個展なので又どんな新手が出るものなのかと公開の日を待ちながら邦人畫家達の間ではしきりと噂話しに花が咲いてゐた」と述べている。そしてピカソの作品を「色彩があでやかになり幾何学的な線がさほど目立たず何れも室内の一隅に配する静物と云つたもので何故かどの繪にもドアのとり手の様なものが描かれており」と回想した。同じピカソの個展を、前年にフランスに着いた猪熊弦一郎や宮本三郎(1938～39年ヨーロッパ留学)¹⁴⁵⁾、また岡本太郎¹⁴⁶⁾なども見ている。猪熊や岡本は特にピカソの作品の美しさに感動している。

猪熊は、会場で古いバーバーリーのコートを無造作に着て、珍しい犬(ピカソの愛犬で“カスベック”と名前がつけられた犬のことであろう)を連れたピカソと偶然出会っている¹⁴⁷⁾。宮本は、セーヌ河岸の小画商で行われたピカソのデッサン展でピカソと遭遇し、ピカソと画商の無造作なやりとりを見て、世界的に有名なピカソだが、彼の人物が感じられたと述べている。このようにピカソはやはり日本人留学生画家たちから一目置かれていた。しかし、1940年6月のドイツ軍によるパリ陥落が迫るなかで、フランスにいた日本人画家たちは

一、二年の滞在で帰国せざるをえなくなった。

2. 戦時下の美術統制とピカソ・イメージ

その頃の日本美術界は、1938年に「陸軍従軍画家協会」が結成されたのを手始めに美術統制が進み、1941年11月の岡本太郎の滞欧作品を最後に、陸海両軍の指導による大東亜戦争美術展が開催され、ヨーロッパから帰国した日本人画家たちも余儀なく参加せざるをえない状況になった。1943年5月に「日本美術報国会」と「日本美術及工芸統制協会」が結成され、戦争記録画が制作されるようになった。自由な表現への弾圧も行われ、1941年4月に瀧口修造と福沢一郎が、超現実主義者は共産主義者という嫌疑で検挙されると、シュルレアリスムや抽象画など前衛的な絵画は意気消沈した。福沢の逮捕の次は、佐藤敬や猪熊弦一郎らも対象となり、新聞記者や彼らの師である藤島武二は二人が従軍画家として派遣されるように画策¹⁴⁸⁾した。こうした戦争画一色の時代に、鬚光、鶴岡政男、松本竣介らが1943年に結成した「新人画会」は、戦争画に一線を画して、自己の芸術性に立脚した展覧会活動を計3回(同年4月と11月、翌年3月)おこなった。その頃の松本竣介の作品《画家の像》(1941年、宮城県美術館)は、ピカソの青の時代、バラ色の時代を想起させるものがある。

日本の美術雑誌の統制も始まり、1940年に『アトリエ』『みづゑ』『造形芸術』の三誌が共同で美術界と政治社会を結ぶ声明¹⁴⁹⁾を出している。1941年には38誌の美術雑誌が廃刊になり、認可された8誌のみが9月から新しい美術雑誌として創刊され¹⁵⁰⁾、1943年には2誌に統合された。あらゆる美術統制と前衛芸術が否定されるなか、《ゲルニカ》を描いたピカソに対する日本の画家や軍部の反応はどうだったのだろうか。以下の日本の画家の文章から考えみたい。

猪熊弦一郎は、1940年8月、帰国の途、避難船の白山丸から『読売新聞』(同年8月28日)¹⁵¹⁾に戦禍のパリの美術界を伝えている。ピカソについては、「ピカソはパリでデッサンの個展を開いて毎日会場に姿を現はしてゐたが、私がたづねた三日前に田舎へ逃げてしまつた」と報告している。

関口俊吾は『朝日新聞』¹⁵²⁾(詳細未詳)の記事で、「ピカソは反フランコの名目のもとに目下フランスの捕虜収容所にあつて近くスペインに送還されると云ふうわさに六十餘名のメキシコ一流の畫家、著述家等が聯名でベタン元帥宛同氏の釋放方を懇

願した」に対して、「反フランコ派と云つても目下フランスに身を置いてゐる彼をベタン元帥が逮捕する権限はなく現に筆者が三月パリを去る際ピカソはドイツ占領地パリに帰つてゐたのであるからベタン將軍がドイツ占領地域内に手をのばす事は絶対不可能である。筆者の想像するところでは、かねてから噂されてゐたユダヤ人總逮捕事件が行はれたのではなからうか。ピカソもユダヤ人の一人としてドイツ占領軍の手により逮捕されフランス捕虜収容所に隔離されてゐる事が分りメキシコの畫家、著作家がベタン元帥を通じてドイツにその釈放がたを依頼してゐるのではなからうか」¹⁵³⁾と彼の推測を述べた。

ピカソの近況や風説については、猪熊弦一郎、成田重郎、伊原宇三郎の次の文章から窺える。猪熊弦一郎は「ピカソはフランスの開戦と同時にフランコ軍に捕らへられ投獄されてゐたので、パリの畫家達が釈放運動をしたらしい。最近では獨軍の援護のもとに絵を描いてゐるとのこと」¹⁵⁴⁾と記している。前述の関口俊吾や成田重郎¹⁵⁵⁾の文中にはピカソのユダヤ人説が記されている。これらは事実認識に誤りがあり、戦時中の混乱した情報をもとにした結果であろう。

伊原宇三郎は、「大東亜戦争と美術家」のなかで、ピカソと政治問題を交えた意見を次のように述べている。「ピカソは今尚獨軍に捕へられてゐると云ふが、大作「ゲルニカ」の示す通り、彼は極端なアンチ・フランコで、その信念に基いて彼は敢然と、彼の愛する方の祖國スペインの為にあの作を描き、又行動した。われわれとして何とも残念なのは、彼が枢軸國家と百八十度反對の方向をとつたことであるが、ピカソとしては祖國愛に殉じてゐるのであるから、獄に在つても泰然としてゐるに違ひない。ただ私の不思議に思ふのは、その祖國愛を別にすれば、あれ程遅ましい仕事をしたピカソが、何うして枢軸側の持つ強い力に魅力を感じなかつたかといふことである。作風から言へばピカソの芸術は断然ドイツ的で、美術界にある意味の新秩序を作り、あれ程舊藝術を顧みること少く、猛牛の如く突進し続けた彼が、突然多情多恨な若者の様に、少年時代の思ひ出を懐しみ、美しい古都の毀れることにあれ程の憤りを發したといふのは、私には何とも解し難いことである。」¹⁵⁶⁾と、ピカソを敬愛する伊原の戦時下での複雑な感情を捉えることができる。

このように当時のピカソの近況に関する風説はまちまちであるが、事実として、ピカソは1939年

9月初め、大西洋に面したロワイアン(ジロンド県)へ行き、そこに1940年8月まで滞在した。その後8月末に当時の恋人ドラ・マールとともにパリに戻っている。そして《ゲルニカ》を描いたグラン＝ゾーギュスタン7番地のアトリエでドイツ軍の監視下で終戦まで制作を続けていた¹⁵⁷⁾。

一方、直接戦禍を受けなかったアメリカでは、アルフレッド・H・バー・ジュニアの企画による「ピカソ芸術の40年展」(ニューヨーク近代美術館, 1939年11月15日－1940年1月7日)がニューヨーク近代美術館で開催され、同年、同美術館により《アヴィニョンの娘たち》が正式に所有されることになった¹⁵⁸⁾。こうしてアメリカ人画家はピカソ芸術の根源に直かに接する機会に恵まれる。アメリカの批評家クレメント・グリーンバーグ¹⁵⁹⁾は、アーシル・ゴーキーやヴィレム・デ・クーニング、ジャクソン・ポロックにとってピカソは重大な靈感源となつたと、抽象表現主義のアメリカ人画家へのピカソの影響を指摘している¹⁶⁰⁾。また、最近「ピカソとアメリカ美術展」(ホイットニー美術館, 他へ巡回, 2006－2007年)¹⁶¹⁾を企画したマイケル・C・フィッツジェラルドは、このピカソ回顧展の成果を「パリ派の崩壊とヨーロッパ大陸を席卷した戦争にともなつて、美術界の主導権がヨーロッパからアメリカへ移つたことを示すこととなる」¹⁶²⁾と述べている。こうしたことからピカソがアメリカ現代美術に与えた影響の大きさを物語っていると言えるだろう。

日本で20世紀初頭から始まつたピカソの受容は、既述のように1930年代にピークを迎えたが、ピカソの本格的な展覧会が開催されるのは、戦後になってからである。戦時中は画家の自由な活動が抑えられ、美術界は閉塞的であつた。前衛芸術が弾圧され、ナチスから退廃芸術と忌まわしく思われているピカソの消息を気にする美術関係者も多かつた。戦後もしばらく空白期が続くが、1951年になって、戦争中の暗い風潮を打ち消すかのようにマティス、ピカソ、ブラックなどのモダンアートの巨匠たちの展覧会がいつせいに開催されて、戦後の美術界は華やかな幕開けとなつた。また、フランスの詩人ミッシェル・タビエが起こした美術運動であるアンフォルメル旋風が巻き起こる。こうして抽象美術の全盛期へと向かう美術界で、ピカソが新世代の画家や美術関係者にどう理解され、影響を与えたかは、「日本におけるピカソの第二次受容」として次に論じたい。

以下は註釈

- 1) 拙稿「日本におけるピカソの受容と歴史的回顧—影響、批評、収集の軌跡」のうち1900～1920年代は『ブリヂストン美術館館報55号(2006年度)』(pp.104-123)に所収
- 2) ジョルジュ・プティ画廊のピカソ展会期：1932年6月16日～7月30日
- 3) ニューヨーク近代美術館のピカソ展会期：1939年11月15日～1940年1月7日
- 4) ピカソは画商アンブロワーズ・ヴォラールの依頼で、「ミノタウロス」や「彫刻家とモデル」といったテーマからなる全100点の版画集を制作した。当館は全版画のうち46点を1958年2月に購入した。国内で全版画を収蔵している美術館は北九州市立美術館で新日本製鐵株式会社からの寄贈である。また東郷青児は『暴行V』(1933年4月23日、損保ジャパン東郷青児美術館, B.I:182 / Ba:341)を所有していた。
- 5) 「戦時中のピカソの絵画には一貫してソーセージとか茹かいたより粗末な食物が、動物の頭蓋骨とか蠟燭や覆いのかけられたランプの薄暗い光と共に繰り返し登場してくる」(ローランド・ベンローズ、高階秀爾・八重樫春樹訳『ピカソ その生涯と作品』新潮社, 1978年, p.381)
- 6) 前掲註5, p.381。「むき出しの白骨化した頭蓋骨が外の闇を背景にした半月形の角の下で不気味に齒をむき出している。その空虚なしかめ面は、その日ピカソに伝えられたゴンサレスの死の通知を反映している」
- 7) 前掲註1, pp.112-113。川口軌外の滞欧作品は「第16回二科展」(1929年9月3日～10月4日、東京府美術館)や「川口軌外滞欧作品洋画展」(1929年11月16日～18日、県商品陳列所、和歌山市)で展示された。
- 8) 前掲註1, p.107
- 9) 「ピカソの海辺母子像 福島コレクションの逸品到着」『報知新聞』1933年12月23日(朝刊)、図版：《海辺母子像》/ 梅原龍三郎「現代フランス畫展」『東京朝日新聞』1934年2月4日 / 川路柳虹「現代佛蘭西繪畫の精鋭」『東京日日新聞』1934年2月5日(朝刊) / フランス美術珠玉集の展覧『大阪朝日新聞』1934年9月20日、会場風景写真 / 梅原龍三郎「福島コレクション展より(2)ピカソ「母子像」」『大阪朝日新聞』1934年9月21日、図版《母子像》 / 「フランス繪畫名作展 福島氏コレクション」『大阪時事新報』1934年9月22日、図版《母子像》
- 10) 福島コレクションは大阪朝日会館(1934年9月19～28日)でも展示された。
- 11) 「このコレクションは、この展覧会企画にあたって調べたところでは110余点が確認されたが、述べ点数では150点あったとされている。このうち帰国に際して作品の輸送費や旅費のために一部処分し、80点余りが日本に持ち帰られた」(安井雄一郎「福島繁太郎一人と生涯」『戦後洋画と福島繁太郎』山口県立美術館, 1991年, p.152)
- 12) 『アトリエ』(11巻2号, 1934年, p.12)の「福島コレクション観内容」によると、出品されたピカソ作品は《海辺母子像》、《母の顔》(おそらく《女の顔》のこと)、《青年立像》(おそらく《裸婦立像》のこと)、《傷つける馬》の4点である。
- 13) 「ピカソの如きは元來多方面な作品がある、キュビズムの如き又シュルレアリズムの如き我々の全部的によしとしない作品の多い人である、こゝにある作品は「母子像」を初めことごとく彼のもつとも良き方面のみを遺憾なく傳へるものである、新鮮な感覚の内に古典の力が生かされて居る、「かくあるべきが現代の繪畫である」というて居る様にさへ見える。」(前掲註9, 『東京朝日新聞』1934年2月4日)
- 14) 前掲註9, 『東京日日新聞』1934年2月5日(朝刊)
- 15) 「『女の顔』の豊かなプラスチックはどうだ。現代日本の洋畫家にしてこの十分の一の迫力をもつ畫家があるかを反省されたい」(前掲註9, 『東京日日新聞』1934年2月5日(朝刊))
- 16) 谷川徹三「福島コレクションを見て」『アトリエ』11巻3号, 1934年, p.13
- 17) 松本は「原畫と複製の大變な差を知つたのも今度が始めてであつた。本當の感じは美術雑誌の複製を通じてはどうしても知る事の出来ないものであつた」と述べている。(佐藤俊介「近頃の感激 ピカソの事など」『岩手日報』1934年3月16日*佐藤俊介は本名。松本竣介『人間風景』新装増補版, 中央公論美術出版, 1990年, pp.29-34に所収)
- 18) 前掲註17, 「近頃の感激 ピカソの事など」『人間風景』, p.33
- 19) 松本竣介「ピカソ、マチス等の作品を見て」『生命の藝術』第二卷第三号, 1934年3月(前掲註17, 『人間風景』, pp.44-48に所収)
- 20) 廣島晃甫「ピカソの母子像を起點として考へて見るならば、西洋畫といふものが、如何にギリシヤを代表としてそれ以來綿々として傳へられる傳統の濃厚であるを考へさせられる。(中略)此の數點に對する自分の所懷は彼が新代の畫家と稱するピカソにして、今更ながら如何にヨーロッパに根強く根を下ろしてゐる前言の如きギリシヤへの讚美があるかといふ事が考へ合わされる」(福田平八郎、廣島晃甫、山口蓬春「福島コレクションを觀る」『美之國』10巻3号,

- 1934年, pp.64-68)
- 21) 前掲註20, p.66
- 22) 佐分眞「福島氏コレクション小感」『美術新論』4巻2号, 1929年, p.56
- 23) 前掲註22, 中野和高「福島コレクションの記憶」, p.66。中野和高は1927年に中山巍, 高島達四郎と訪問している。
- 24) 前掲註22, 中山巍「福島氏と其コレクション小感」, p.64
- 25) 前掲註22, 鈴木千久馬「ピカソの裸女」, pp.53-56
- 26) 前掲註22, 伊原宇三郎「ピカソの La Fontaine」, pp.44-53
- 27) 熊岡美彦は「氏の御宅を訪ねると, まづ玄関に這入った正面に, ピカソの赤帽子の横向の顔(等身二倍大)の, 不思議なる魅力にハット一閃を喰はされます」と述べている。(前掲註22, 「福島氏コレクション」『美術新論』, p.2)
- 28) 熊岡の模写作品は, マネ《オランピア》, ルノワール《水浴の女達》, セザンヌ《カルタ取る人》, マティス《オダリスク》等。(田邊至「熊岡君の滞歐作品と模寫畫に就いて」『美術新論』5巻4号, 1930年, p.112)
- 29) 前掲註28, 「槐樹社展覧会」, p.92
- 30) 前掲註28, 田邊至「熊岡君の滞歐作品と模寫畫に就いて」, p.113
- 31) 武者小路実篤は「ピカソの「赤い帽子」を熊岡氏が油で模寫したのに感心した。ピカソは僕はどうもすきになれない一面があるがそれを見ると感心しないわけにはゆかない」と述べている。(前掲註28, 武者小路実篤「槐樹社展覧會を見て」, p.102)
- 32) 武者小路実篤はピカソを訪問し, 彼から《ミノタウロマキア》(1935年3月23日土曜日制作, 現在, 東京都現代美術館所蔵)を貰った。「マチス・ルオー・ドラン・ピカソ訪問記」『中央公論』第52年3月号, 1937年, pp.265-280 / 武者小路実篤がピカソからもらった版画の右下に武者小路氏へのピカソの献辞, 「1936年11月1日, パリ」が記入してある。
- 33) 『アトリエ』の広告に展覧会名, 会期, 会場, 主催, 後援の他に「油繪, デッサン, 模寫, 複製, 寫眞, 文献」と出ている。(『アトリエ』11巻2号, 1934年)
- 34) 伊原宇三郎「ピカソ論」『みづゑ』no.335, 1933年, pp.2-40
- 35) 伊原宇三郎「ピカソに憑かれる」『美術手帳』no.90, 1955年, pp.72-73
- 36) 「あんな安物が使へるのかしら, と思つてゐたら, その後見た繪に, 安物のざらざらしたトアルでなければ出ないタッチを巧に一つの効果として扱つてあつた」(伊原宇三郎「滞歐日記抄」『みづゑ』no.303, 1930年, p.30)
- 37) 伊原宇三郎「ピカソに憑かれる」『美術手帳』no.90, 1955年, p.73
- 38) 江川佳秀「伊原宇三郎作ピカソの模写をめぐって」『徳島県立近代美術館研究紀要』第1号, 1993年, p.10
- 39) 児島善三郎「聖徳太子展批判(洋畫部)」『アトリエ』7巻5号, 1930年, p.41
- 40) 槐樹社同人「帝展洋畫座談記」『美術新論』5巻11号, 1930年, p.13, p.15
- 41) 「ピカソの弟子にでもなつて根本的に勉強したいと思ふ位みだ, (中略)自分はピカソが今後フランスでは一番よくなると思ふ, マチスよりずっといい、ピカソに画を批評して貰ひたい」(田中の書簡(1922年8月3日, ベトイユ)>(田中日佐夫「田田麦儒滞欧書簡」『美術美術史論集』第六輯, 成城大學大学院文學研究所, 1987年, pp.182-189)
- 42) 『80回国展記念誌 国画会80年の軌跡』国画会, 2006年, p.3
- 43) 福田平八郎「ルッソからピカソへ」『塔影』9巻2号, 1933年, pp.17-19
- 44) 吉岡は他に《ゲルニカ習作V》(1937年5月2日, 国立ソフィア王妃芸術センター, Z.IX:8)の馬の部分の模写もしている。(『吉岡堅二展 新日本画のパイオニア』山種美術館, 1988年)
- 45) 「座談会 四方田草炎 人と作品」『四方田草炎素描集』学校法人高澤学園 1987年, p.2
- 46) 外山卯三郎「福沢一郎の藝術」『独立美術 福沢一郎特集』第3号, 建設社, 1932年, p.49
- 47) 福沢一郎は「一九一五年頃ピカソがキュビズムを放棄したと見える時期がある。尤もピカソ自身は, キュビズムの眞直中にあつた時でさへ, キュビズムをやつてゐるとはいはなかつたが…。それは純粹なレアリストの意味で, 相當の數にのほる肖像畫を描いてゐる事だ。かういふ轉換を捉へる事は, 時代や藝術の斷層を示すもので興味が湧く。」と述べている。(「ピカソ」『アトリエ』14巻2号, 1937年, p.2)
- 48) 正木基「福沢一郎: 繪画から版画へ, 版画から繪画へ」『福沢一郎全版画集』玲風書房, 2002年
- 49) 福沢一郎「牛」(自作解説)『日本現代画家選IV 21 福沢一郎』美術出版社, 1958年 / 「ヴァフィオ出土の黄金の杯(紀元前1500年頃, アテネ国立博物館蔵)がイメージ源である」(大谷省吾「地平線の夢 序論」『地平線の夢 昭和10年代の幻想繪画』東京国立近代美術館, 2003年, pp.14-15, p.132)
- 50) 峰岸義一はピカソの豹変を「クビストの豹變者ピカソは, 現代に於ける唯一の悲劇役者である。併し彼はよく今も猶, 建設に向つて歩いてゐる彼の一生は

- 恐らく、試練と苦闘であらう。彼も又愛する我が友である。カメレオニズム！こそ我等に與へられた悲劇の微笑であるのだ。せめてもうたかたなれ一信仰に憧憬し得る意想なのだ。」と賞賛した。(『カメレオニズム(Chameleonism)への自轉』『アトリエ』6巻8号, 1929年, p.61)
- 51) 前掲註50『アトリエ』の「美術界消息」に出ている会期会場の他に、『日本美術年鑑』(1929年版)では10月13日-17日、丸ビル二階画廊にて第一回開催となっている。
- 52) 阿部金剛『シュールレアリスム絵画論』天人社, 1930年
- 53) 阿部金剛『阿部金剛画集』第一書房, 1931年
- 54) 大谷省吾編, 和田博文監修『コレクション・日本シュールレアリスム⑩ 阿部金剛・イリュージョンの歩行者』本の友社, 1999年, pp.295-296
- 55) 瀧口修造『妖精の距離』春鳥会, 1937年
- 56) このピカソ展は1934年ウォォズワース・アシニアム(コネティカット州ハートフォード)や1939-40年のニューヨーク近代美術館(シカゴ美術館との共催)におけるピカソ回顧展の原型となる。(マイケルC. フィッツジェラルド, 別宮貞徳訳『ギャラリーゲーム ピカソと画商の戦略』淡交社, 1997年, p.224)
- 57) 富永惣一「ピカソ展の思ひ出」『アトリエ』11巻2号, 1934年, pp.4-7
- 58) 『パブロ・ピカソ 天才の生涯と芸術』ニューヨーク近代美術館編, 旺文社, 1981年, p.277。/ フィッツジェラルドによれば「絵画225点, 彫刻7点, そして挿し絵入りの本6点」である。(前掲註56, p.224)
- 59) Galerie Georges Petit, Paris, *Exposition Picasso*, 1932, no.134
- 60) ブルトンは、現在当館所蔵の《ブルゴーニュのマーブル瓶, グラス, 新聞紙》(1913年, Z.II:432)をおそらく1921年11月17-18日の画商カーンワイラーの第2回競売で680Fで買っている。(Pierre Daix, *Le Cubisme de Picasso Catalogue Raisonné de L'œuvre 1907-1916*, Editions Ides et Calendes, 1979, p.297)
- 61) 大高保二郎「ピカソ メタモルフォーズの時代—スタイルからモティーフへ」『ピカソ展—絆とエロス』東京都現代美術館, 2004年, pp.8-22
- 62) 展覧会は東京の他に、大阪・京都・名古屋・金沢・福岡・熊本・大連で開催された。(和田博文「解題」『コレクション・日本シュールレアリスム⑩シュールレアリスム基本資料集成』本の友社, p.477)
- 63) 福岡版目録によると『コーヒー茶碗』は売却済みで「兵庫, 黒正きみ子嬢所蔵」となっている。(『巴里新興美術展覧会目録』福岡日日新聞社講堂, 1933年2月15日-21日)
- 64) 前掲註63, 川路柳虹, 峰岸義一による各流派の概説。
- 65) 森口は『カップとスプーン』について「ピカソの小品『珈琲茶碗』は立體主義的觀照によつて描かれてゐるが、極度の單純化に成功してゐる。そして畫面の構成のためには平面と立面との區別が見事に撤廢されてゐる。色調は模し難い人工的な美しさを持つてゐる。この小さな畫面にはいろいろの問題が隠されてゐる」。《首》は「單純化の極致が見られるが、現實は甚だ大膽に幻想化され、一種の鬼氣さへも藏してゐる筈であるにも拘らず、流暢に要約された線の組織と洗練された色調の單純性によつて、觀賞者を魅さないではゐない。黒線で描いて、灰、黒つばい灰、灰が、つた藍、及び白を塗つただけの色調計畫は單純で面も洗練されてゐる。」と批評している。(森口多里「巴里新興繪畫の一瞥」『巴里新興繪畫選集』平凡社, 1933年, pp.3-4)
- 66) 「入場者も以外に多く、最終日の如きは千人を突破し、十五日間の入場者總數は六千人以上に達した。この數字には些少の誇張も懸値もない。同一人で二度も三度も見に来たのが多かつたのによつても、この展覽會が若い人々の間に惹起したセンセーションを察知し得るであらう」(前掲註65, 「跋」)
- 67) 峰岸義一「ピカソの記」『みづゑ』no.307, 1930年, p.24
- 68) 福島繁太郎の妻、慶子夫人はレセプションのことを次のように回想している。「翌日の新聞には“Grande Exposition de Picasso sans Picasso”(ピカソ無しのピカソ大展覽會)といふ見出しで、ピカソが如何に、こんなお祭り騒ぎを煩さがつてゐるかを報じてあつた」(福島慶子「パリの思ひ出」『巴里の藝術家たち』創藝社, 1950年, pp.22-24) / 松尾邦之助は「アンドレ・ブルトンから招待券を貰たので夜會服で夜の十時にヂョルジュ・ピカソ展へ行た。(中略)ところがピカソは居らない。」と述べている。(松尾邦之助「巴里通信 ピカソは單なるカメレオンか?」『美術新論』7巻9号, 1932年, p.88) / 田中忠雄は「結局ピカソは出て来なかつた」と云ふのだ」と述べている。(田中忠雄「ピカソ展雜記」『みづゑ』no.335, 1933年, p.41)
- 69) 「ピカソはみづからの手で展示も行なっていた。「六日間もあれを壁にかけてばかりいたから、もう飽きた」という言葉が伝えられている。疲れていたのはたしかだろうが」(前掲註56, p.226)
- 70) 松尾は「ピカソに日本の俳諧の佛譯本を贈呈したら、『あれを僕んとところの子供が悦んで、昨夜は子供のためにすつかり朗讀を仰せつかつて夜更しました

- よ……」と、これはまんざらに御世辭でもあるまい」と述べている。(前掲註68、『美術新論』, p.88)
- 71) 前掲註5, p.266
- 72) 彼の詩の何編かは『カイエ・ダール』誌(10巻7-10号)に掲載されて、アンドレ・ブルトンが詩人ピカソを評論している。(前掲註5, pp.304-308)
- 73) 瀧口修造「詩を書くピカソ」『みづゑ』no.385, 1937年, p.10
- 74) 他の6人はダリ, エルンスト, マグリット, ミロ, マン・レイ, イヴ・タンギーである。瀧口修造「七つの詩」『L'ÉCHANGE SURREALISTE』1936年10月, 山中散生編, ボン書店刊
- 75) 竹中郁「ピカソ」『文藝汎論』6巻11号, 1936年, pp.21-22
- 76) 豊田一男「ピカソについて」『日本詩』9号, 1935年, pp.59-61
- 77) 北園克衛「Pablo Picasso」『アトリエ』7巻10号, 1930年, pp.148-153(『天の手袋』春秋書房, 1933年に収録)
- 78) 小熊秀雄「忙がしくなってきた畫壇」『エコール・ド・東京』第1号, 1936年9月, p.21
- 79) 瀧悌三『日本の洋画界七十年 画家と画商の物語』日経事業出版社, 2000年, p.76
- 80) 猪熊弦一郎は「昭和の画壇は十年の松田源治文相のいわゆる「松田改組」によって揺れ始め、帝展第二部無鑑査の有志たちは「第二部会」を結成し私たちもそれに加わった。翌十一年には平生文相の再改組があり「第二部会」の大半の人々が新帝展に戻る動きをみせたが、私たち青年作家は芸術的なことを純粋に勉強する良いチャンスだと「新制作派協会」を結成した。(中略)「政治的抗争を排し、芸術運動の純粋化」をスローガンにした。」と記している。(猪熊弦一郎『私の履歴書 文化人8』日本経済新聞社, 1984年, p.537)
- 81) 前掲註80, pp.544-546
- 82) 藤田さんが『この人にもアトリエを見せて下さい』と依頼すると、人にアトリエを見せることを嫌つてゐたピカソであつたが、『よろしい、一度いらつしゃい』と気持ちよく承知して呉れた。(中略)ピカソの友人ル・セルナ(スペイン人)を通じてピカソのアトリエへ行く約束をしてあつたから、ル・セルナを訪問したところ、ピカソは身の危機を知り二三日前にパリーを去つたとのことであつた。」猪熊弦一郎「ピカソの人と作品」『美術新報』45号, 1942年, p.6
- 83) 藤島武二「偶感一我が美術界に望む」『美術新論』6巻4号, 1931年, pp.23-26(『藝術のエスプリ』中央公論美術出版, 1982年, pp.168-172に収録)
- 84) 岡本太郎「古い殻を脱ぎすてゐる アブストラクシオン・クレアシオンに参加」『美術手帳』no.90, 1955年, pp.82-84, p.88-89(p.88は岡本太郎《空間》の図版)
- 85) 「ボール・ローザンバール(畫商の店)で、マチス、ドララン等の繪の飾つてある中の奥まつた小さい部屋に、ピカソの1931年の作品があつた。百號大の畫面に靜物を抽象化した繪であつた。」(岡本太郎「繪の前に泣く」『アトリエ・生活美術』1巻2号, 1941年, p.43)
- 86) 《空間》は、1945年空襲で焼失してしまつたため、戦後再制作された作品である。(『世田谷時代1946-1954の岡本太郎』展 世田谷美術館, 2007年, pp.30-31)
- 87) 前掲註84, p.89
- 88) 長谷川三郎「アブストラクト・アート」『みづゑ』no.374, 1936年, pp.2-8
- 89) 福沢一郎「抽象藝術」『みづゑ』no.385, 1937年, pp.2-8
- 90) 前掲註79, p.79
- 91) 河崎晃一「略伝・長谷川三郎」『没後20年記念・特別展 長谷川三郎』兵庫県立近代美術館, 1977年, p.22
- 92) 乾由明「長谷川三郎 芸術と思想」『「画・論」=長谷川三郎 全二冊ノ内「画」長谷川三郎』三彩社, 1977年
- 93) 長谷川三郎「ピカソの光畫と或る學術寫眞」『みづゑ』no.398, 1938年, p.19
- 94) 長谷川の著書の序言に「同書の大部分は、“アトリエ誌”昭和12年6月號に寺田竹雄氏によつて譯載され、尚ほ、本講座中でも伊原、福澤、神原諸氏によつて引用された箇所が少くない」とある。(長谷川三郎『近代美術思潮講座 第六卷 アブストラクト・アート』アトリエ社, 1937年, p.7)
- 95) 前掲註56, p.286
- 96) 前掲註58, 『パブロ・ピカソ 天才の生涯と芸術』, p.307
- 97) ニューヨーク近代美術館初代館長アルフレッド・H.・バー・ジュニアが作成した図式。「ツリー状の近美術史の図式をカタログの表紙ジャケットに掲載した」(五十殿利治「1930年代日本におけるキュビズム論」日高昭二, 五十殿利治監修『海外新興芸術論叢書 新聞・雑誌篇 第10巻』ゆまに書房, 2005年, p.160) / チャートとカタログの翻訳が『アトリエ』に載る。(寺田竹雄「印象派より抽象繪畫へ」『アトリエ』14巻6号, 1937年, pp.38-58)
- 98) 前掲註89
- 99) 伊原の著書にバーのチャートが載っている。(伊原宇三郎『近代美術思潮講座 第三卷 キュービズム』アトリエ社, 1937年, p.211)
- 100) 熊田 司「吉原治良—物質を切り裂く線の軌跡, あ

- るいは一本の道』『吉原治良展』朝日新聞社、2005年、p.11
- 101) 植村鷹千代「意識の絵画の発足 瑛九のレエゾン・デエトル」『みづゑ』no.375, 1936年, pp.33-36
- 102) 香月泰男の昭和11年8月前後のスケッチブックの資料：安井雄一郎氏(山口県立美術館副館長)より提供
- 103) 三隅町立香月美術館館長の板倉秀典氏の話。「香月先生は1度やりだしたものは、ある程度完成するまではやるという根性をもっておられた。ある程度まとまりをつけるまではものは変えちゃいかんというようなことをいつも言われていた。それでキュービズムをずーっと推していった、ある程度のめどがついてきた。1956年にヨーロッパに行かれるときには、もうだいたいのキュービズムのみかじめをつけておられたですね。」(香月泰男資料(1)「聞き取り・香月泰男-板倉秀典氏にシベリア・シリーズについて聞く」『山口県立美術館研究紀要』第1号, 1997年, pp.4-5)
- 104) 「夏休みの帰省時に従兄弟たちと海で遊んだときの写真をもとに描いている」安井雄一郎「没後30年の香月泰男展」『没後30年 香月泰男』朝日新聞社, p.7
- 105) 鍵岡正謹「今西中通 人と作品」『高知県立美術館館蔵品目録 今西中通』高知県立美術館, 2003年, p.14
- 106) 前掲註83
- 107) 「ピカソの謠は近代風の主知による。頭脳の命令無しにピカソは一筆をも動かさぬ。およそピカソの畫ほど隙の無い畫は古來珍らしい。ピカソは如何なる意味に於いてもどちを踏まない。あり餘つた技倆によつて新らしい意匠の處女地をつぎつぎに拓いてゆく。意匠は元來そのシネ カ ノンとして新を要する。新なき意匠は零に等しい。ピカソが近作即時發表を避けるといふ傳説も、此の意味に於いてその處女性擁護と見れば尤もだ。新らしい意匠が畫的醇熟を得、次の新らしい意匠が更に準備せられた時、恐らく初めて發表をゆるす。それ故、ピカソの才無くしてピカソの教を守るもの程路に迷ふものはあるまい」(高村光太郎「正と謠と」『アトリエ』9巻1号, 1932年, pp.11-12)
- 108) 須田國太郎「ピカソ論」『洋画研究』第5号/第6号, 1933年
- 109) 「キュビズムやシュルレアリスムにおけるピカソやダリなども評価する。これも須田國太郎が親しんだスペイン美術という枠組みを超えて、絵画創造の新たな「レアリスム」の観点から捉え直そうとした結果であり、須田はラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナの「ピカソ論」の翻訳を美術雑誌に連載もしている」山野英嗣「須田國太郎の描法」『須田國太郎展』京都国立近代美術館, 2005年, p.176
- 110) 川路柳虹「奇才ピカソと立體派の分化」『マチス以後 佛蘭西繪畫の新世紀』アトリエ社, 1932年, pp.10-11
- 111) 作品への言及はないが、図版が掲載されたのは、「ピカソ論(中)」である。(佐波甫「ピカソ論」『みづゑ』(上)：no.386, (中)：no.387, (下)：no.389, 1937年)
- 112) 前掲註111, no.386, 1937年, p.9
- 113) 荒城季夫「ピカソ以後」『みづゑ』no.311, 1931年
- 114) 豊藤勇「ピカソ以後 ネオ・ロマンティシズム」『アトリエ』13巻12号, 1936年, pp.9-14 / 「ピカソ以後 (一) 超現實主義」『アトリエ』14巻1号, 1937年, pp.10-16
- 115) James Thrall Soby, *After Picasso*, Edwin Valentine Mitchell, Hartford, Dodd, Mead & Company, New York, 1935.
- 116) 齊藤英一「ピカソ近作論」『美術』12巻7号, 1937年, pp.12-16
- 117) ハネカー、森口多里訳「パブロ・ピカッソ」『現代の洋画』27号, 1914年, pp.9-15
- 118) ワルドマー・ジョルジ「ピカソ論(ジョルジュ・ブティ・ギャラリにおけるピカソ展の反映)」『美術新論』7巻12号, 1932年, pp.4-13 / ワルドマル・ジョルジュ「ピカソの情熱」『美術新論』8巻5号, 1933年, pp.28-37
- 119) クリスチャン・ゼルヴォス「デイナルのピカソ1928年夏」『アトリエ』13巻6号, 1936年, pp.71-73 / クリスチャン・ゼルヴォス「ピカソの言葉」『美術』11巻7号, 1936年, pp.19-24 / クリスチャン・ゼルヴォス「ピカソの作品 「ゲルニカ」に就て」『アトリエ』15巻1号, 1938年, p.1 / クリスチャン・ゼルヴォス「ピカソの魔術的繪畫」『アトリエ』16巻3号, 1939年, pp.1-11
- 120) 伊原宇三郎『ピカソ畫集』アトリエ社, 1932年
- 121) 仲田定之助『西洋美術文庫第18巻 ピカソ』アトリエ社, 1938年
- 122) 前掲註121, p.16
- 123) 前掲註121, p.24
- 124) 前掲註121, p.4
- 125) 『ピカソ 愛と苦悩 「ゲルニカ」への道』東武美術館, 朝日新聞, 1995年
- 126) 前掲註119, 『アトリエ』15巻1号, 1938年, p.1
- 127) アメデ・オーザンファン「巴里博覧會ノート」『アトリエ』15巻10号, 1938年, p.44
- 128) 前掲註121, p.34
- 129) 瀧口修造「ピカソの壁畫」『近代藝術』三笠書房, 1938年, pp.226-267
- 130) 瀧口が参照した『マリアンヌ』は詳細未詳だが、瀧口は同紙のボオル・シヤドゥールヌの記事を「近代

- 藝術』に載せている。(瀧口修造「ピカソの詩 余談」『ユリイカ』1973年7月、『コレクション瀧口修造 2』みすず書房、1991年、p.428に所収)
- 131) 前掲註129, p.226
- 132) 植村鷹千代「ピカソと現代繪畫の諸問題」『アトリエ』16巻6号, 1939年, pp.13-18
- 133) 伊原宇三郎「ピカソ」『みづゑ 6月臨時増刊ピカソ』no.400, 1938年, pp.15-16
- 134) 岡本太郎「巴里畫壇のたそがれ」『みづゑ』no.440, 1941年, p.33
- 135) 岡本太郎「ピカソの藝術」『アトリエ』no.298, 1951年, p.1
- 136) 島田康寛「川端実の歩み」『川端実展』京都国立近代美術館, 1992年, p.13
- 137) 吉井忠「ゲルニカを見た時」『美術運動』no.116, 1987年2月, pp.6-7
- 138) 齊藤は「古畫必ずしも現代畫家に取つて無用の長物ではない。世は様々に移り變つて來た。之れに連れて繪畫も變化して來た。そして我々の時代が來た。我々は如何にすれば好いのか。かう云ふ疑問を我々に起させるだけの事態が古畫の變遷の歴史に内在して居ると思ふ」と提唱した。(齊藤与里「古畫の新らしい研究」『美術新論』7巻1号, 1932年, pp.4-9)
- 139) 福島繁太郎「二科漫談」『美術新論』5巻10号, 1930年, p.61
- 140) 岡本は「創作者として、同じ時代の悩みを悩み、たくましく正面からぶつかって進んで行く先達者の姿に全身を以て感激し、涙が眼からふき出たのである。」と述べている。(岡本太郎『青春ピカソ』新潮社, 1953年, pp.15-16/初出:前掲註85, p.44-45)
- 141) 前掲註79, p.118
- 142) 「関口はまた戦後、全国紙にパリや欧州の美術界、画壇、展覧会の模様を数多く書き送り、その画壇情報が日本で話題となることが少なくなかった。まだ欧州の最先端の美術情報が貴重だった戦後すぐの日本にあって、現地駐在の美術ジャーナリストとして見逃せない貢献をしている。」(池村俊郎『戦争とパリ ある二人の日本人の青春1935-1945年』彩流社, 2003年, p.56)
- 143) 「開幕は1939年1月17日。(中略)購入したばかりの36点のなかから33点が出品された。すべて静物画で、ほとんどが1937年の作。ほかに1936年と1938年の作品もだされてはいる」(前掲註56, pp.283-284)
- 144) 関口俊吾「烏か鳩か?」『文藝春秋』1949年8月号, pp.18-19
- 145) 宮本三郎「或る日の世界人⑧ バプロ・ピカソ 個展で会った彼の風貌」『読売新聞』1940年3月8日 / 三宅正太郎『バリ留学時代』雪華社, 1966年, p.259
- 146) 前掲註134, p.35
- 147) 猪熊弦一郎「ピカソの人と作品」『美術新報』45号, 1942年, p.6
- 148) 竹田道太郎『美術記者30年』朝日新聞社, 1962年, pp.171-177
- 149) 「声明 今や日本は政治、経済、藝術の各部門に於て、新しき體制のもとに果敢なる再出發を爲さんとしてゐる。この重大時期に當つて、吾が美術界も亦舊體の現状維持的な態度を一擲、新たなる國家體制に順應、協力せねばならぬことは言ふを俟たない。(中略)茲に吾が三社は、剛健質實なる國民藝術精神を確立し、美術家の指標たるべく、指導的ジャーナリズムの役割を積極的に果さんとするものである。右聲明す。紀元二千六百年十月 造形藝術、アトリエ、みづゑ(イロハ順)」(「巻頭聲明」『造形藝術』2巻10号, 1940年10月)
- 150) 「許可された八種のみが九月より全然新しい美術雑誌として創刊されることになった」(『美術雑誌八種に限定』『朝日新聞』1941年8月14日)
- 151) 猪熊弦一郎「戦禍とバリの美術界」『読売新聞』1940年8月28日(夕刊)
- 152) 関口が参照する『朝日新聞』の記事は未詳だが、1941年8月23日の同紙の夕刊(東京版及び大阪版)に「パリで反政府分子検挙」「独軍司令部パリ市民に警告」という記事のなかで、パリではユダヤ人を中心に六千名が検挙され、多数の外国系ユダヤ人が逮捕されたと事件が報道されている。
- 153) 関口俊吾「独逸占領下に於けるフランス文化一ヶ年の回顧」『新美術』1号(『みづゑ』no.443), 1941年, p.37
- 154) 前掲註147, p.6
- 155) 「ピカソは、母が、イタリア系ユダヤ人であつた。」(前掲註147, 成田重郎「戦争とピカソ芸術」, p.9)
- 156) 伊原宇三郎「大東亜戦争と美術家」『新美術』6号, (『みづゑ』no.448), 1942年, p.4
- 157) 前掲註5, pp.360-369
- 158) 前掲註56, pp.284-286
- 159) グリーンバーグはピカソの1926年以降の油彩に傑作と呼べるものが殆どないと批評した。(クレメント・グリーンバーグ、瀬木慎一訳「パリの芸術 七十五歳のピカソ」『近代芸術と文化』紀伊國屋書店, 1965年, p.68 / C. グリーンバーグ、藤枝晃雄編訳「芸術家 七十五歳のピカソ」『グリーンバーグ批評選集』勁草書房, 2005年, p.204 / 初出: "Picasso at Seventy-five", *Art Magazine*, October, 1957)
- 160) 前掲註159, 「ピカソが追いかけて捕らえられなかつ

- た野兎を何匹か捕らえようとして、ある程度は捕らえたのだ(少なくともボロックは捕えた)。(「アメリカ合衆国における美術 「アメリカ型」 絵画」『近代芸術と文化』, p.246) / 「ピカソが狩り出したが捕えられることのなかった野兎の幾羽かを捕えようとし、そして実際ある程度捕えたのである (少なくともボロックは捕えた)。(「「アメリカ型」 絵画」『グリーンバーグ批評選集』, 2005年, p.116) / 初出: “American-Type” Painting, *Partisan Review*, Spring 1955)
- 161) 「ピカソとアメリカ美術」展の会場と会期は次の通りである。ホイットニー・アメリカ美術館: 2006/9/28-2007/1/28, サンフランシスコ近代美術館: 2007/2/25-5/28, ウォーカー・アート・センター: 2007/6/17-9/9
- 162) 前掲註56, p.287

*・本文中の「 」は原文のまま引用した。

・作品名《 》後の()内は、制作年、現在の所蔵先、ピカソ作品総目録番号(Christian Zervos, *Pablo Picasso*, vol.1-33, Paris, Cahiers d'Art, 1932-1978. ギリシャ数字は巻数, アラビア数字は目録番号を指す)の順である。

Copyrights

©2008-Succession Pablo Picasso-SPDA (JAPAN): fig.2, fig.3, fig.9

©財団法人ミモカ美術振興財団:fig.11

日本におけるピカソの受容略年表(1925－1945年)

年代	月	日本人のピカソ言及、関連事項 ◇は出典先 ○は日本近現代美術関連 ◎は一般事項	ピカソ関連事項 ○は西洋美術関連 ◎は一般事項
1925-27年 (大正14-昭和2)		伊原宇三郎 1925-27年頃パリで、ピカソの《生木と枯木のある静物》やピカソのキュビズム、シュルレアリスム風の作品14点の模写をする。◇江川佳秀「伊原宇三郎作ピカソ作品の模写をめぐって」『徳島県立近代美術館研究紀要』第1号、1993年	1925年、春、《3人の踊り手(ダンス)》を制作。7月、『シュルレアリスム革命』第4号に《アヴィニヨンの娘たち》と《ダンス》の図版が掲載される。11月、パリのピエール画廊で開催された第1回シュルレアリスム絵画展にキュビズム作品を出品する。 1926年、雑誌『カイエ・ダール』が創刊し、創刊者クリスティアン・ゼルヴォスとピカソとの交流が始まる。
1927年 (昭和2)	秋以降	中野和高 中山巍、高島達四郎とパリ7区(Av.de la Bourdonnais)にある福島繁太郎の家で福島コレクションを見る。ピカソの《泉》を世界に誇る作品の一つであると述べる。◇中野和高「福島コレクションの記憶」『美術新論』4巻2号、1929年 佐分眞 パリ16区の福島繁太郎宅(Av.Vion Whitcomb 8)を訪問し、福島コレクションを見る。◇「福島氏コレクション小感」『美術新論』4巻2号、1929年	1月、マリー＝テレーズ・ワルテルと知り合う。冬、画商ヴォラールの依頼でオノレ・ド・バルザックの『知られざる傑作』の挿絵を制作する。
1928年 (昭和3)	4～11月 11月	熊岡美彦 『美術新論』の福島コレクション特集を編集するため、福島所蔵作品の複製写真の印刷を手配する。◇「編集後記」『美術新論』4巻2号、1929年 伊原宇三郎 福島コレクションのピカソ《泉》をはじめとするピカソ作品の材質や技法などを分析する。◇「ピカソの La Fontaine」『美術新論』4巻2号、1929年	1月、ミノタウロスを主題とした作品を初めて制作する。3月、彫刻家フリオ・ゴンサーレスと彫刻作品を制作する。
1929年 (昭和4)	2月 〃 9月 〃 9月以降 10月 〃	福島コレクション特集 ピカソの《女の顔》《生木と枯木のある風景》の図版を含む83点が『美術新論』に紹介される。◇「美術新論』4巻2号 鈴木千久馬 福島コレクションのピカソの《泉》に感銘したことを述べる。◇鈴木千久馬「ピカソの裸女」『美術新論』4巻2号 第十六回二科展 川口軌外の滞欧作品が展示される。古賀春江、中川紀元、東郷青児、阿部金剛らのシュルレアリスムの傾向の作品が出品される。(東京府美術館) カメレオニズム展 峰岸義一はピカソの豹変主義を称賛し、「三科造形美術協会」の渋谷於寒(修)や玉村方久斗(善之助)と一緒に「カメレオニズム展」(銀座・松坂屋)を開催する。◇峰岸義一「カメレオニズムへの自轉」、『美術界消息』『アトリエ』6巻8号 藤田嗣治 母校でピカソをはじめ当時フランスで活躍する画家たちの話をする。◇藤田嗣治『巴里の横顔』実業之日本社 伊原宇三郎 ピカソの新古典主義の影響を受けた滞欧作《椅子によれる》が第十回帝展の特選となる。 佐藤敬 《若き男の像》(モデルは中村鉄)が第十回帝展に初入選する。	冬、ゴンサーレスのアトリエで制作を続ける。大きな金属彫刻《庭の女》の制作に着手する。2月、《女の胸像と自画像》を描く。ピカソの横顔の上に、歯をむき出した狂暴な女性像が描かれるのは、オルガとの結婚生活が危機に瀕していることを反映している。5月、《肘掛け椅子の裸婦》を制作する。夏、休暇のために、ブルターニュ地方のディナールを訪れる。 ○ニューヨーク近代美術館開館 ◎10月24日ニューヨーク株式市場大暴落で世界恐慌始まる。
1930年 (昭和5)	4月 〃	第七回槐樹社展覧会 熊岡美彦のピカソの《赤い帽子の女》の模写やその他の模写作品が特別陳列される。(東京府美術館) ◇田辺至「熊岡君の滞欧作品と模写画に就いて」『美術新論』5巻4号 武者小路実篤 熊岡のピカソの模写を見て感心し、ピカソを見直す。◇「槐樹社展覧会を見て」『美術新論』5巻4号	冬から年末にかけて、彫刻家フリオ・ゴンサーレスのアトリエで制作し、金属彫刻《頭部》とブロンズ《庭の女》を完成する。1月、ニューヨーク近代美術館の「第1回パリの絵画展」でピカソの14点の作品が展示される。同月、ニューヨークのラインハート画廊で、ピカソとドランの油彩画の回顧展が開

	<p>＊ 里見勝蔵 現代のバリ新画壇で、ピカソの奇怪な機械主義が流行の様に祭られると批評する。◇「静物画の変遷」『みつゑ』no.302</p> <p>＊ 伊原宇三郎 ピカソがモンマルトルの絵具屋で安物の画布を買っているのを目撃し、その感想を述べる。◇「滞欧日記抄」『みつゑ』no.303</p> <p>6月 瀧口修造 アンドレ・ブルトンの『超現実主義と絵画』を翻訳し出版する。ピカソのキュビズムからシュルレアリスムの傾向の作品8点が挿図に載る。◇「超現実主義と絵画」厚生閣書店</p> <p>＊ 児島善三郎 「帝展の新進 中野和高、鈴木千久馬、伊原宇三郎氏のピカソ、さて日本は銀座の三越、松屋、松坂屋」と揶揄する。◇「聖徳太子展批評」『アトリエ』7巻5号</p> <p>9月 第十七回二科展 海老原喜之助によりピカソの彫刻《道化師》が出品される。(東京府美術館)</p> <p>＊ 峰岸義一 ピカソと会って、日本の俳諧についての話などを聞いたことを述べる。◇「ピカソの記」『みつゑ』no.307</p> <p>10月 福島繁太郎 二科展評のなかで「御手本をアングルをピカソに置きかえた所で、魂のぬけていることには変りがない。」と批評する。◇「二科漫談」『美術新論』5巻10号</p> <p>＊ 北園克衛 ピカソ評論を断片的な言葉で表現する。◇「PABLO PICASSO」『アトリエ』7巻10号(『天の手袋』春秋書房、1933年に所収)</p> <p>11月 田邊至 「ピカソが流行すると、誰でもがピカソ」と批判する。◇「帝展洋畫座談記」『美術新論』5巻11号</p>	<p>かれ、ピカソの1901～1928年の作品18点が展示される。2月、《キリストの磔刑》を完成。6月、パリ北西ジブールに近い田舎町ボワジュルーの小さな城を購入。秋、マリー=テレーズを自宅に近いラ・ボエシー街44番地に住まわせる。版画集『ヴォアラールのための連作』(～1937年)の制作を始める。</p>
1931年 (昭和6)	<p>1月 第一回独立美術協会展 福沢一郎の滞欧作品でエルンストのデペイズマン手法で制作したコラージュ作品を出品する。(東京府美術館)</p> <p>＊ 荒城季夫 新興美術はピカソ系とマティス系の二つに分かれると論じる。◇「ピカソ以後」『みつゑ』no.311</p> <p>2月 伊原宇三郎 ピカソとマティスのモチーフと手法についての違いを論じる。◇「ピカソとマチスのモチーフについて」『美術新論』6巻3号</p> <p>3月 中野和高 ピカソの新古典主義時代の作品《泉》などのエトルリアや古代ギリシア彫刻の影響を論じる。◇「ピカソのモチーフに就いて(1925年頃迄の)」『美術新論』6巻3号</p> <p>4月 藤島武二 ピカソやマティス、ドランのモダンアートを容認する。◇「偶感—我が美術界に望む」『美術新論』6巻4号</p> <p>9月 阿部金剛 『阿部金剛画集』に収録された作品の数点に、オザンファンの著書『Art』(1929年刊)の「ピカシズム」などの項から文章を引用して、解題をつける。◇阿部金剛『阿部金剛画集』第一書房</p>	<p>2月、『カイエ・ダール』誌(第6巻2号)にピカソのバビエ・コレについてトリスタン・ツァラの批評が載る。《水差しと果物皿》と《円テーブルの上の静物》を制作する。5月、ボワジュルーの城を彫刻のアトリエに改造する。夏、ジュアン=レ=パンで休暇を過ごし、マリー=テレーズとの情事に誘発されて、一連の銅版画を制作し、それらは『ヴォアラールのための連作』に使用される。12月、マリー=テレーズの彫像や《彫刻家》、顔の二重表現のモチーフを用いたマリー=テレーズの肖像《赤い肘掛け椅子》を制作する。</p>
1932年 (昭和7)	<p>1月 斉藤与里 ピカソが新興絵画の先駆者でも、理由なしには認めないと述べる。◇「古美術と現代美術 古画の新しい研究」『美術新論』7巻1号</p> <p>＊ 高村光太郎 ピカソの制作態度についてドランと比較して述べる。◇「正と謫と」『アトリエ』9巻1号</p>	<p>1～3月、マリー=テレーズをモデルに眠る女のシリーズを描く。6月、パリのジョルジュ・プティ画廊でピカソの個展を開催する。ピカソ自らが作品を選定する。この回顧展への批評家たちの反応は賛否両論で、ジェルマン・パザンは、「ピカソは過去の人…」と『ラムール・ド・ラルール』誌に批評し、ジャック=エミール・ブランシュは、「バガニーニにも比すべき超絶的技巧」</p>

年代	月	日本人のピカソ言及、関連事項 ◇は出典先 ○は日本近現代美術関連 ◎は一般事項	ピカソ関連事項 ○は西洋美術関連 ◎は一般事項
	5月	川島理一郎 ピカソが未だモンパルナスのアトリエに住んでいた頃、訪問し、ピカソにマティスについて尋ねたことを回想する。◇「マチスとピカソの見識」『アトリエ』9巻5号	と評する。クリスチャン・ゼルヴォースがこの回顧展を『カイエ・ダール』誌(第7巻3-5号)で特集する。精神分析学者のC.G.ユングはピカソのエッセイを発表し、ピカソの様式的特性は、精神分裂病の徴候と合致すると述べる。10月、ゼルヴォースがピカソの作品総目録の第1巻(1895～1906年)を刊行する。秋、グリユーネヴァルトのイーゼンハイム祭壇画のキリストの磔刑を変容したシリーズを描く。
	6月	川路柳虹 マティスとピカソを比較し、ピカソのキュビズムを考察する。◇「奇才ピカソと立体派の分化」『マチス以後 仏蘭西繪畫の新世紀』アトリエ社	
	6月15日	富永惣一 パリのジュルジュ・ブティ画廊で開かれたピカソ個展のレセプションに出席し、ピカソの1925、6年頃からの作風に圧倒される。ピカソ芸術の行き詰まりを懸念する。◇富永惣一「ピカソ展の思ひ出」『アトリエ』11巻2号、1934年	
	々	福島慶子、松尾邦之助他 同上のピカソ個展のレセプションに出席するが、主賓のピカソは欠席したと伝える。◇福島慶子『巴里の藝術家たち』創藝社、1950年 / 松尾邦之助「巴里通信 ピカソは単なるカメレオンか?」『美術新論』7巻9号 / 田中忠雄「ピカソ展雑記」『みづゑ』no.335、1933年	
	夏	岡本太郎 パリのローザンベール画廊でピカソの抽象作品《水差しと果物皿》を見て、抽象画の道を決意する。◇「絵の前に泣く」『アトリエ・生活美術』1巻2号、1941年	
	11月	伊原宇三郎 原色版図版6点、写真版30点からなるピカソの画集を編集刊行する。ピカソが紹介されてから何年になるが、未だに代表作らしいものが将来されていないのは、ピカソの絵が高すぎるからだと述べる。◇『ピカソ画集』アトリエ社	
	12月	外山卯三郎 福沢一郎の滞欧作品にピカソ的な作品があると批評する。◇「福沢一郎の藝術」『独立美術 福沢一郎特集』第3号、建設社	
	々	巴里東京新興美術展 アンドレ・サルモン、アンドレ・ブルトンと小城基、川路柳虹、峰岸義一らによる企画で、ピカソに始まる同時代の前衛絵画の展覧会が開催される。ピカソの作品は《カップとスプーン》《頭》《小さい頭》が出品される。	
	々	川路柳虹、峰岸義一 上記展覧会に出品されたピカソの《カップとスプーン》《首》を解説する。◇『巴里新興美術展覧会目録』	
1933年 (昭和8)	1月	伊原宇三郎 ピカソ論を執筆する。◇「ピカソ画集」『みづゑ』no.335	3～6月、「彫刻家のアトリエ」を主題にしたエッチングを制作する。画商ヴォラールは、1930～37年の時期のエッチングの銅版を含む100点の銅版を買い取り、刷りの名手ロジェ・ラクリエールに刷らせる。それは『ヴォラールのための連作』と知られるようになる。秋、フェルナンド・オリヴィエが、1900年代初めのピカソとの同棲生活を回想した『ピカソとその友だち』(パリ、ストック刊)を出版する。ピカソが1899～1931年に制作した銅版画とリトグラフが、ベルンハルト・ゲイゼル監修による『ピカソ、画家＝版画家』(ベルン、私家版)として出版される。
	々	森口多里 1932年の巴里東京新興美術展《カップとスプーン》について批評する。◇『巴里新興繪畫選集』平凡社	
	2月	福田平八郎 ピカソの制作態度に共感する。◇「ルッソからピカソへ」『塔影』9巻2号	
	8～9月	須田國太郎 須田によるラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナの「ピカソ及立体派に関する完全にして真実なる物語」の翻訳の梗概が掲載される。◇「ピカソ論」『洋画研究』第5号/第6号	
	12月23日	福島コレクションの名品到着 福島繁太郎の収集品が日本に到着し、来春2月に一般公開すると告知される。ピカソの《海辺母子像》の図版が載る。◇「ピカソの海辺母子像 福島コレクションの逸品到着」『報知新聞』12月23日 ○岡本太郎、この頃アブストラクション・クレアシオンに参加する。	
1934年 (昭和9)	2月	福島コレクション展 福島繁太郎蒐集品の45点が一般公開される。そのうちピカソの作品は《海辺の母子》《女の顔》《馬》《裸婦》が出品される。(有楽町日本劇場5階大ホール)	2～3月、ウォズワース・アセニウム(コネティカット州ハートフォード)で「ピカソ展」(ジェイムズ・スロー・ソ

1934-35年 (昭和9-10)		◇『アトリエ』11巻2号	ビーが監修)が開催される。6～9月、油彩、デッサン、エッチングで闘牛シリーズを制作する。8月末、オルガとパウロを伴ってスペインを訪れ、サン・セバスティアン、ブルゴス、マドリッド各地で開催される闘牛を見学する。さらにトレド、サラゴサ、バルセロナまで旅をする。9月中旬、家族とともにパリに戻る。9～11月、『少女に導かれる盲目のミノタウロス』をテーマにした版画4点が『ヴォアラールのための連作』に入る。
	〃	梅原龍三郎 福島コレクションのうちピカソ、マティス、ルオーを取り上げ、ピカソの新古典主義時代の作品《海辺の母子》を称賛する。◇「現代フランス画展」『東京朝日新聞』2月4日	
	〃	宮坂勝 福島コレクションのピカソの《馬》にバヴロバが踊った「白鳥の死」のイメージを重ねて、作品を論じる。◇「トーンとムウヴマンの美しさ 福島コレクションを見て」『みづゑ』no.348	
	3月	松本竣介 福島コレクションを二度見て、ピカソの実作品に感銘する。◇「近頃の感激 ピカソの事など」『岩手日報』3月16日 / 「ピカソ、マチス等の作品を見て」『生命の藝術』2巻3号	
	〃	石井柏亭 ピカソの《闘牛場の馬》を「ねっとりしたいいいマチエールに好感をもつ」と批評をする。◇「彙報」『中央美術』8号	
	〃	谷川徹三 福島コレクションを見て、ピカソの《海辺の母子》に感動する。◇『アトリエ』11巻3号	
	〃	廣島晃甫 福島コレクションを見て、ピカソの古典的傾向に不満を持つ。◇「福島コレクションを見る」『美之園』10巻3号	
	4月	ピカソ研究展覧会 ピカソの原画、模写、複製などが出品された展覧会を開催する。(銀座・青樹社)	
	8月	『ピカソと友達』ピカソのモンマルトル時代の恋人フェルナンド・オリヴィエの『ピカソと友達』(税所篤二訳)が全17回(1937年迄)、連載される。◇「ピカソと友達」『みづゑ』no.354～385	
	9月	福島コレクション展(大阪) 東京と同様に大阪でも開催される。(大阪朝日会館)	
1935年 (昭和10)	4月	豊田一男 ピカソについて詩作する。◇「ピカソについて」『日本詩』9号	6月、マリー=テレーズの妊娠が発覚し、オルガと別居する。10月マリー=テレーズがマヤ(早世したピカソの妹マリア・デ・ラ・コンセプションと同名)を出産する。ピカソは、絵画制作を止め、挿絵入りで“自動記述”による詩を書く。詩の何篇かは『カイエ・ダール』誌の特集号(第10巻7-10号)に掲載される。
	10月	小島島水 ピカソ《マンドリンを持つ女》を図版とともに紹介する。◇「マンドリンを持つ女」『エッチング』第36号	
		○5月、松田源治帝展改組	
1936年 (昭和11)	4～5月	福沢一郎 《牛》を第六回独立美術協会展に出品。(東京府美術館)	1月、シュルレアリストの詩人ポール・エリュアールの肖像デッサンを描く。3月、アルフレッド・H・バー・ジュニアによる「キュビズムと抽象絵画展」(ニューヨーク近代美術館)が開催され、ピカソの油彩画、コラージュ、立体作品(1913年制作)の写真、ブロンズ等、1907～29年迄の作品32点が展示される。8月、カンヌの北にあるムージャンに滞在し、ゼルヴォス夫妻、イ
	5月	植村鷹千代 ピカソの大衆化を例に現代日本絵画を論じ、日本絵画に於ける画期的な存在として瑛九を批評する。◇「意識の絵画の発足 瑛九のレエゾン・デエトル」『みづゑ』no.375	
	6月	佐藤敬 ピカソの素描集を編纂する。未発表のデッサン収集に藤島武二が関与する。◇『アトリエ』臨時増刊号13巻7号	
	8月	香月泰男 スケッチブックにピカソの《ミノタウロマキア》の複製が掛けられた香月のアトリエ風景や、ピカソの青の時	

年代	月	日本人のピカソ言及、関連事項 ◇は出典先 ○は日本近現代美術関連 ◎は一般事項	ピカソ関連事項 ○は西洋美術関連 ◎は一般事項
	9月	代やキュビズム風で描かれた人物画が描かれる。◇香月泰男のスケッチブック(1936年8月前後)	ギリス人美術評論家ローランド・ベンローズ、マン・レイ、ポール・ローザンベール、エリュアール一家、以前エリュアールから紹介された写真家ドラ・マールがピカソを訪ねる。9月、プラド美術館館長に任命される。秋、
	10月	小松秀雄 日本画壇のピカソ追従に対し、ピカソのマンネリズムを主張する。◇「忙しくなってきた画壇」『エコール・ド・東京』1号	ドラ・マールの肖像を描き、マン・レイに教わったフォトグラムの作品を制作する。11月、武者小路実篤らの訪問を受け、《ミノタウロマキア》を贈る。
	11月1日	瀧口修造 ピカソを含めた七人のシュルレアリストのための詩を書く。◇「七つの詩」『L'ÉCHANGE SURREALISTE』山中散生編、ボン書店	
	11月	武者小路実篤 高田博厚らとピカソを訪問し、エッチング《ミノタウロマキア》をもらう。ピカソの絵の持つ不思議な力強さに感心する。◇「マチス・ルオー・ドラ・ピカソ訪問記」『中央公論』第52号3月号, 1937年	
	12月	竹中郁 洋画家の小磯が貸してくれたベルナール・ゲゼルの自家版『ピカソ』の内容について述べる。◇「ピカソ」『文藝汎論』6巻11号	
		豊藤勇 ピカソ以後のネオ・ロマンティシズムの若手作家を紹介する。◇「ピカソ以後(1)」『アトリエ』13巻12号	○12月、ニューヨーク近代美術館で「幻想美術、ダダ、シュルレアリズム展」開催。
		○猪熊弦一郎ら新制作派協会結成。長谷川三郎による最初の抽象絵画の解説「アブストラクト・アート」が『みづゑ』(no.374)に載る。	◎スペイン内乱(～39年)
1937年 (昭和12)	1月	豊藤勇 シュルレアリスムの概説とシュルレアリストを紹介する。◇「ピカソ以後(2)」『アトリエ』14巻1号	1月、銅版画《フランコの夢と嘘》を制作し、作品に添える詩を書く。この
	2月	福沢一郎 ピカソを擁護するゼルヴォスの文章から、ピカソ芸術の限界を指摘する。◇「ピカソ」『アトリエ』14巻2号	2枚の版画と1枚の詩は、スペイン共和国救助のために売られた。グラン＝
	々	西田武雄 武者小路実篤がピカソから貰ったエッチング《ミノタウロマキア》を図版とともに紹介する。◇「ピカソの『闘牛』」『エッチング』第52号	ゾーギュスタン街7番地にアトリエを見つける。4月26日、フランコ軍を支援するドイツ空軍がバスク地方の小都市
	3月	瀧口修造 詩を書くピカソを紹介し、『カイエ・ダール』(10巻7-10号)のピカソ特集に発表されたピカソの詩とアンドレ・ブルトンの批評を評価する。◇「詩を書くピカソ」『みづゑ』no.385	ゲルニカを無差別爆撃する。5月1日、ピカソは新しいアトリエで《ゲルニカ》のための習作に着手し、全部で50
	4月	第12回国画会展 武者小路実篤所蔵のピカソのエッチング1点を展示。	点ほどの素描が準備される。5月11日頃からカンヴァスでの制作が始まる。
	4～6月	佐波甫 ドイツの美術史家マックス・ラファエルの研究を紹介し、最近のピカソに将来の見通しがついたと述べている。「ピカソ論」(中)に、《アヴィニヨンの娘たち》の図版が初めて掲載される。◇「ピカソ論」『みづゑ』no.386～389	ドラ・マールはその制作過程を写真に撮る。完成した《ゲルニカ》は、6月中
	6月	キュビズムと抽象絵画展図録 1936年、ニューヨーク近代美術館のアルフレッド・H・バー・ジュニアが企画した展覧会カタログの翻訳と美術史チャートが『アトリエ』に掲載される。◇寺田竹雄「印象派より抽象絵画へ」『アトリエ』14巻6号	旬、パリ万国博覧会のスペイン館に搬入されて展示される。7月12日、ルイス・ラカーサとホセ・ルイス・セント
	夏	吉井忠 パリ万国博覧会スペイン館でピカソの《ゲルニカ》を見て、「休火山」にたとえて回想する。◇「《ゲルニカ》を見た時」『美術運動』no.116, 1987年	設計によるパリ万国博覧会のスペイン館の開会式が行われる。ゼルヴォスによる《ゲルニカ》特集が『カイエ・
	7月	齊藤英一 ピカソの近作を例に出し、日本青年画家の制作意欲を駆り立てている。◇「ピカソ近作論」『美術』12巻7号	ダール』誌(第12巻4-5号)に載る。夏、
	11月	現代フランス絵画展(東京資生堂) ピカソのエッチング2点を展示。	ドラ・マールとミュージシャンへ行く。9月、パリに戻る。10月中旬、スイスへ
	12月	猪熊弦一郎 第二回新制作派展に出品した三部作《昼》《黄昏》《夜》にピカソの影響が見られる。	出かけ、重病のパウル・クレーを見舞う。
		吉岡堅二 ピカソの《ゲルニカ》のために描かれた一連の馬	

		<p>の習作を模写する。◇『吉岡堅二展』山種美術館, 1988年</p> <p>○長谷川三郎ら自由美術家協会結成</p> <p>◎7月, 盧溝橋事件, 日中戦争開始</p>	
1938年 (昭和13)	<p>1月</p> <p>4月</p> <p>5月以降</p> <p>6月</p> <p>8月</p> <p>9月</p> <p>10月</p> <p>11~12月</p>	<p>《ゲルニカ》の紹介 クリスティアン・ゼルヴォスの解説と《ゲルニカ》の制作過程の写真, デッサン, アトリエで制作中のピカソの写真が掲載される。◇「ピカソの作品 「ゲルニカ」に就て」『アトリエ』15巻1号</p> <p>長谷川三郎 ピカソの《ゲルニカ》や写真作品の表現方法を一世代前と感ずるが, ピカソの努力を認める。◇「ピカソの光畫と或る學術写真」『みづゑ』no.398</p> <p>猪熊弦一郎 5月, フランスへ留学。同年, ニースのマティスを訪問し, 以後, マティスに何度か絵の助言を受けるうちに, 「おまえはピカソが好きだろう」と指摘される。◇『私の履歴書 文化人8』日本経済新聞社, 1984年</p> <p>伊原宇三郎 伊原の四度目のピカソ論のなかで, 《ゲルニカ》の主題について批評する。◇「ピカソ論」『みづゑ 6月臨時増刊ピカソ』no.400</p> <p>《ゲルニカ》について オーザンファン¹⁾の1937年パリ万国博覧会の観賞ノートにスペイン館の《ゲルニカ》に関する文章が載る。◇アメデ・オーザンファン「巴里博覧會ノート」『アトリエ』15巻10号</p> <p>瀧口修造 《ゲルニカ》について『マリアヌス』紙のポール・シャドールヌの記事を挙げて, 批評する。◇『近代藝術』三笠書房</p> <p>仲田定之助 原色版1点と写真版48点が掲載されたピカソの画集を編集刊行し, 《アヴィニヨンの娘たち》, 《ゲルニカ》の他, 《女の顔》(当時福島繁太郎の収集品で, 現在ブリヂストン美術館所蔵)等の図版と解説が載っている。◇『西洋美術文庫第18巻 ピカソ』アトリエ社</p> <p>佐藤敬 第三回新作派展に《月》《雪》を出品する。(東京府美術館)</p> <p>○吉原治良ら九室会結成。岡本太郎, 国際超現実主義展(パリ)に《傷ましき腕》を出品。</p> <p>◎4月, 国家総動員法発令</p>	<p>春, カンヴァスに壁紙と油彩を用いた壁画サイズのコラージュ作品《化粧をする女たち》を制作する。夏, ドラ・マールとともにミュージアンへ行き, 9月末パリに戻る。10月, ロンドンのニュー・バーリントン画廊で《ゲルニカ》と関連作品が展示される。作品は, ロンドンのイースト・エンドのホワイトチャペル画廊でも公開される。その後, リーズとリヴァプールでも展示される。</p>
1939年 (昭和14)	<p>1月</p> <p>〃</p> <p>6月</p> <p>7月</p> <p>11月以降</p>	<p>関口俊吾, 猪熊弦一郎, 岡本太郎 日本人留学生に話題のローザンベール画廊でピカソの個展を見る。猪熊弦一郎は愛犬を連れたピカソと出会う。◇関口俊吾「烏か鳩か?」『文藝春秋』1949年8月号 / 猪熊弦一郎「ピカソの人と作品」『美術新報』45号, 1942年 / ◇岡本太郎「巴里画壇のたそがれ」『みづゑ』no.440, 1941年</p> <p>宮本三郎 ピカソのデッサン展(セヌ河岸の小画商)でピカソと画商のやりとりを見る。◇「パブロ・ピカソ 個展で会った彼の風貌」『読売新聞』1940年3月8日</p> <p>植村鷹千代 ピカソ評論の中で, 《ゲルニカ》を「激情と慎ましみの中和」と批評する。◇「ピカソと現代絵画の諸問題」『アトリエ』16巻6号</p> <p>『びかそ』高見澤木版社による限定500部, 木版3葉, 図版260点という豪華な書物が刊行される。◇『びかそ』高見澤木版社</p> <p>川端実 ニューヨーク近代美術館で「ピカソ芸術の40年」を見学し, 感動する。◇島田康寛「川端実の歩み」『川端実展』</p>	<p>1月13日, ピカソの母マリアがバルセロナで死去する。1月~2月, ポール・ローザンベール画廊でピカソ33点の近作展が開かれる。5月, ニューヨークのヴァランティン画廊で《ゲルニカ》と関連作品が展示され, その後アメリカ各地を巡回する。7月初旬, ドラ・マールとアンティープへ行く。7月22日, 画商ヴォラールが自動車事故で死亡し, ピカソは葬儀に参列するためパリに戻る。南仏に戻る際に, サバルテスを誘い, 南仏海岸沿いの町を案内する。8月25日, ピカソはサバルテス, ドラとともに列車でパリに戻る。9月, 戦争が始まると大西洋岸のロワイヤンに移居する。11月から翌年1月まで ニューヨーク近代美術館でアルフレッ</p>

年代	月	日本人のピカソ言及、関連事項 ◇は出典先 ○は日本近現代美術関連 ◎は一般事項	ピカソ関連事項 ○は西洋美術関連 ◎は一般事項
		京都国立近代美術館, 1992年 ○第1回「聖戦美術展」(東京府美術館)	ド・H. バー・ジュニア監修の「ピカソ芸術の40年」展が開催する。 ◎第二次世界大戦勃発
1940年 (昭和15)	8月 9月	猪熊弦一郎 白山丸から戦禍のバリ美術界やピカソの近況について伝える。◇「戦禍とバリの美術界」『読売新聞』8月28日 佐藤敬 第五回新制作派展にピカソの《ゲルニカ》に描かれた馬を思わせる《暁》を出品する。(東京府美術館) ○藤田嗣治、猪熊弦一郎、岡本太郎らが戒厳令下のバリを脱出し相次いで帰国する。紀元二千六百年奉祝美術展覧会(東京府美術館)。「造形芸術」「アトリエ」「みづゑ」三誌の共同声明	5月12日、ドイツ軍がフランス国境へ迫り、バリ侵攻を日前にして5月16日、ドラとロワイヤンへ帰る。6月14日、ドイツ軍がパリに侵攻し、ペタン政権がドイツと休戦条約を結ぶ。ドイツ軍がロワイヤンへ入ると、8月25日、ピカソはパリに戻る。秋、ラ・ボエシー街のアパートを放棄し、グラン＝ゾーギュスタン街のアトリエへ移る。 ○ドイツ軍の侵攻で、多くの画家がフランスを脱する。モンドリアンはニューヨークへ、レジェ、ダリはアメリカへ亡命。 ◎ドイツ軍、フランスに侵攻、6月にパリを占領。
1941年 (昭和16)	5月 6月 9月	新古典美術協会第六回展 ピカソ作品を特別展示(東京府美術館) 岡本太郎 《ゲルニカ》を見た印象やローザンペール画廊でのピカソ個展(1939年)の感想を述べる。◇「巴里画壇のたそがれ」『みづゑ』no.440 関口俊吾 ピカソの消息について推測する。◇「独逸占領下に於けるフランス文化一ヶ月の回顧」『新美術』1号(『みづゑ』no.443) ○4月、瀧口修造、福沢一郎ら検挙。美術雑誌第一次統制 ◎太平洋戦争が始まる。	1月、戯曲「尻尾を捕まえられた欲望」を書く。 ○エルンスト、ブルトン、シャガール、デュシャンら渡米。
1942年 (昭和17)	2月	伊原宇三郎 ピカソの消息と《ゲルニカ》のテーマの政治問題を取り上げる。◇「大東亜戦争と美術家」『新美術』6号(『みづゑ』no.448) 成田重郎 ピカソの母はイタリア系のユダヤ人であったと述べる。◇「戦争とピカソ」『美術新報』45号 ○第一回大東亜戦争美術展(東京府美術館)	3月27日、フリオ・ゴンサーレスが死去し、葬儀に参列する。4月、《牡牛の頭蓋骨のある静物》など同テーマで一連の作品を制作する。
1943年 (昭和18)	5月	○松本竣介ら新人画会を結成。日本美術報国会と日本美術及工芸統制協会が結成される。	5月、フランソワーズ・ジローと出会う。
1944年 (昭和19)		 ○10月、二科会解散	3月、戯曲「尻尾を捕まえられた欲望」の朗読会が開かれる。10月、フランス共産党に入党。 ◎8月中旬、ドイツ軍の撤退、連合国軍のバリ進攻で市街戦が始まり、8月25日、パリが解放される。
1945年 (昭和20)		 ◎第二次世界大戦終結	《納骨堂》を描く。9月、サロン・ドートンヌに《頭蓋骨、葦、陶器のある静物》他を出品する。

*「日本におけるピカソの受容略年表」は章立ての都合により1925年から始めた。

*ピカソについては主に William Rubin (ed.): *Pablo Picasso. A Retrospective*, The Museum of Modern Art, New York (W. ルービン編集 山田智三郎・瀬木慎一監修『パブロ・ピカソ 天才の生涯と芸術』旺文社, 1981年)を参考にした。

筑後洋画の系譜 補遺

植野健造

石橋美術館では、2002(平成14)年11月16日から翌2003年3月16日にかけて、「筑後洋画の系譜」展を開催した。この展覧会はサブタイトルを「青木繁・坂本繁二郎生誕120年記念」としたように、福岡県久留米市に生まれ日本近代美術史に大きな足跡を残した二人の洋画家、青木繁と坂本繁二郎の生誕120年を記念した展覧会であり、かれら二人を中心としてその前後に連なる、久留米を中心としてその周辺地域を含めた筑後地方の洋画の系譜を眺望しようとするものであった。内容としては、石橋美術館のコレクションを中心として、一部の作品を他の美術館や個人所蔵家の協力をえて19人の作家の作品と関連資料で構成した。とりあげた作家は以下のとおりである。

森三美(1872-1913)、吉田博(1876-1950)、青木繁(1882-1911)、坂本繁二郎(1882-1969)、松田諦品(1886-1961)、高島野十郎(1890-1975)、小松清次(1892-1998)、古賀春江(1895-1933)、山村秀一(1896-1989)、豊田勝秋(1897-1972)、田崎廣助(1898-1984)、井上三綱(1899-1981)、高田力蔵(1900-1992)、伊東静尾(1902-1971)、坂宗一(1902-1990)、鷹尾和敏(1911-1997)、内野秀美(1911-1998)、古沢岩美(1912-2000)、藤田吉香(1929-1999)

この展覧会は地域の美術館としての役割をも担ってきた石橋美術館の、開館以来の美術に関する収集、展示、保存、研究活動の一つの成果として、来館者にもおおむね好評を博し反響も大きかった展覧会であった。展覧会の会期中あるいはそれ以後に、出品作家、あるいはさまざまな事情により本展でとりあげることでできなかった作家やその作品に関する情報がよせられ、作品や資料の寄贈を受けた場合もあった。そのこともまた展覧会の成果であったと考えている。本稿では、この展覧会を補足する意味から、「筑後洋画の系譜」に位置づけることのできる作家に関する情報を報告したい。なお、以下にとりあげる作家は、坂宗一のみこの展覧会に出品された作家であるが、それ以外は展覧会でとりあげることでできなかった作家である。情報をいただいた多くの方々にお礼申しあげるとともに、今後も継続的に情報の蓄積と報告につとめてゆきたいと考えている。

(参考)

・『青木繁・坂本繁二郎生誕120年記念 筑後洋画の系譜』展図録、石橋財団石橋美術館、2002年11月

□坂 宗一(さか そういち 1902-1990)

1902年5月23日、福岡県犬塚村福光(現・久留米市三潴町福光)に父坂富太郎、母マサの子として生まれる。1919年同郷の先輩画家坂本繁二郎を頼って上京し師事する。一時期川端画学校で素描を学んだ他は油彩画はほとんど独学といってよく、坂本や同じく同郷の古賀春江に制作を見てもらう。1922年実家の破産によって送金が途絶えたため、やむなく帰郷する。同年10月久留米の第7回来目会展に初出品し、来目会関係の知人ができる。1923年頃、久留米の松田諦品宅で古賀春江に初めて会う。1927年知人を頼って朝鮮に渡り、半年を費やし釜山から京城へ向かう。1929年夏筑後に帰り、二科展出品作を携えて上京、同年9月の第16回二科展に初入選する。1930年再び京城に行き、さらにハルビン(満州)に滞在の後、東京にもどる。1933年9月、古賀春江の葬儀の後、再び筑後に帰る。以後戦後まで上京せず。1934年福岡日日新聞に連載小説「大友宗麟」(田中純作)の挿絵を描く。1937年の第24回二科展では《農具》で二科特待賞を受賞した。1940年福岡県美術協会の創立に参加。1941年二科会会友となる。1942年、福岡日日新聞社特派記者並びに陸軍省従軍画家として上海、武漢、湖南省、北京などを廻る。1944年1月7日、植田久子と結婚、戦後は郷里に近い筑後市西牟田に居を構える。1947年1月16日長男の翁介誕生。前後に一女一男をもうけたがともに幼くして亡くなった。1947年創立の第二紀会(のちの二紀会)に参加、1954年の第8回展と1958年の第12回展で二紀同人賞を受賞し、1960年の二紀展の九州進出(大牟田・松屋デパート)に尽力する。1961年二紀会委員となる。同年、フォルム画廊(大阪、福岡)、フジカワ画廊(東京、大阪、福岡)で個展を開催する。その後はおもに二紀会展に制作発表を続けた。1970年にインド、ネパールを、1972年にネパール、ヒマラヤを旅行する。1979年福岡県文化会館において「坂宗一 墨絵の世界」展を開催。1982年カナダ・ロッキー山脈へ旅行。1984年筑後市勤労婦人センターで「坂宗一回顧展」開催。1990年4月9

日、福岡県三輪町の朝倉記念病院で死去する。1996年「坂宗一展」がサザンクス筑後で開催される。少年時の心象風景を思わせるようなユーモアとボエジーの漂う作風に特色があり、晩年手がけた水墨画も高い評価をえた。

(註)

- ・石橋美術館ではご遺族の坂翁介氏より、2003年に坂宗一《脱穀》(油彩・カンヴァス)、《久住(晩秋)》(油彩・カンヴァス)の2点の作品を、2007年に坂宗一旧蔵資料一式の寄贈を受けた。さらに本稿執筆に際して坂翁介氏より多くのご教示いただいた。
- ・また他に、中村一氏より、2003年に《船三艘》(墨、水彩・紙)、《赤絵皿》(墨、水彩・紙)の2点の作品の寄贈を受けた。
- ・坂宗一が1937年の第24回二科展で二科特待賞を受賞した《農具》は、現在、神奈川県立近代美術館に所蔵される。同作品については、2008年6月25日、神奈川県立近代美術館の伊藤由美氏にご配慮をたまわり作品を実見する機会をえた。この作品は、坂宗一自身によって1975年に同館に寄贈されたとのことである。また本作品は修復されて2008年3月29日から5月18日まで神奈川県立近代美術館で開催された「コレクション全館展示ー10,000点からの精華400点 百花繚乱の絵画」展に展示されたとのことである。



fig. 1 坂宗一の旧アトリエ
福岡県筑後市西牟田
2007年4月11日撮影

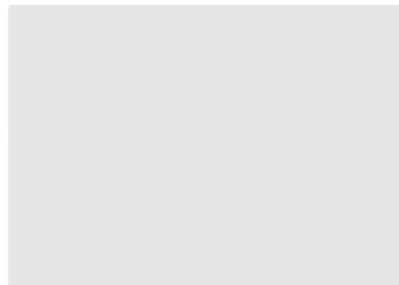


fig. 2 坂宗一《農具》
1937年、油彩・カンヴァス
112.5×145.5cm、神奈川県立近代美術館

(参考)

- ・『坂宗一 水墨画展』展図録、福岡県文化会館、1979年6月
- ・『日本美術年鑑』(平成3年版)、東京国立文化財研究所、1992年3月
- ・「新収蔵作品」『ブリヂストン美術館 石橋美術館 館報』第52号(2003年度)、2004年12月
- ・「坂宗一 WEB 美術館」<http://www.saka-sou-ichi.com>

□早川銈太郎(はやかわ けいたろう 1871-1905)
1871年、久留米市日吉町に生まれる。1875年一家で東京に転住する。初め芝、後に四谷に住む。四谷小学校より独逸協会(現在の独協大学)に進む。同協会在学中、体操の授業中に鉄棒より落ち胸部を強打する。これが原因となって肺を病み同協会を中退し、数年の療養生活を送る。1888年中丸精十郎の画塾に入門する。1889年東京美術学校に入学。1892年3月父親とともに帰郷し、福岡県大川市若津に住む。同年5月再上京し、長姉ムラのもとに寄寓する。1894年福岡県豊津の豊津中学校の図画教員となる。1897年福岡市の中学修猷館の教員となり、図画、書道を担当する。1901年、肺病の再発により修猷館を退職、久留米市荘島町の実家に帰り療養生活にはいる。1905年4月28日、久留米市荘島町にて死去する。久留米市京町の法泉寺に葬られる。早川は、森三美とならび久留米生まれで洋画を学んだ最初期の人物である。ちなみに早川の妹である糸世(イトヨ)は青木繁が1908年に制作した《秋声》(福岡市美術館蔵)のモデルである。

(註)

石橋美術館ではご遺族の安元昭子氏より、2003年、早川銈太郎《風景》(水彩・紙)、《戦場の図》(油彩・カンヴァス)の2点の作品の寄贈を受けた。

(参考文献)

- ・篠原正一「早川銈太郎のこと」『久留米郷土研究会誌』第1号、1972年11月
- ・「筑後と九州の画家たちー新収蔵品紹介をかねてー」(展覧会リーフレット)、石橋美術館、2005年1月
- ・「新収蔵作品」『ブリヂストン美術館 石橋美術館 館報』第52号(2003年度)、2004年12月
- ・坂井史恵「修復記録」『ブリヂストン美術館 石橋美術館 館報』第53号(2004年度)、2005年11月

□松本豊太(松濤)

(まつもと とよた(しょうとう) 1874-1924)

1874年9月25日、福岡県久留米市津福本町に生ま

れる。1886年久留米中学明善校入学。その後同校を退学。この間、久留米在住の森三美に洋画を学ぶ。上京して、1896年から1898年まで松岡寿に師事したという。1898年3月久留米に帰る。1899年から長崎県五島中学校、広島市明道中学校、久留米市南筑中学校、久留米市明善中学校において美術教員をつとめる。1910年頃には久留米市立男子高等小学校の図画の教員も兼務していたようである。1906年、久留米の洋画研究団体である審美会の結成に名誉会員として名を連ねる。同会は、鹿毛屋蔵、武田弥一郎、松本豊太(松濤)、丸野豊、青木繁、坂本繁二郎、森三美を名誉会員とし、岡徳四郎、大野米次郎、太田勤、加藤勝、鹿児島彦次郎、垂見豊三郎ら久留米、浮羽、田主丸の洋画同好者の会員によって結成され、写生会、作品の互評会および機関誌『審美』を発行するなどしたが、その活動は1年ほどで終わったようである。1924年2月12日、久留米市において死去。松濤と号した。

(註)

石橋美術館ではご遺族の松本成一氏より、2007年に松本豊太《二人の少女》(1902年、油彩・カンヴァス)を、さらに資料として布地に油彩で描いた絵画5点の寄贈を受けた。ご遺族のもとには、他に《アトリエの二少女》(油彩)、《菊》(油彩)や二曲一隻屏風装の油彩画《棕櫚図》、《向日葵図》などが残されている。なお多くのご教示をいただいた松本成一氏は2007年12月12日にご逝去された。ご冥福をお祈りいたします。

(参考)

- ・「新収蔵作品」『ブリヂストン美術館 石橋美術館 館報』第55号(2006年度)、2007年12月
- ・「新収蔵作品」『ブリヂストン美術館 石橋美術館 館報』第56号(2007年度)(本号)

報』第56号(2007年度)(本号)

- ・『筑後洋画の先覚 森三美』展図録、石橋美術館、1997年9月
- ・松本一郎『松本一成遺稿集』私家版、1971年12月
- ・金子一夫『近代日本美術教育の研究』、中央公論美術出版、1992年2月

□大野米次郎(おおの よねじろう 1884-1920)

1884年1月6日、久留米市芋抜川町2丁目(現在の久留米市本町)に生まれる。莊島尋常小学校を卒業し、久留米高等小学校に進む。同校在学中から久留米在住の森三美に洋画の手ほどきを受ける。森三美塾の同門には、青木繁、坂本繁二郎らがいた。1906年、久留米の洋画仲間である東原経治らと審美会を結成する。同会の活動は翌年頃までで休止状態になったとみられる。1913年、松田実(諦晶)、東原経治らと来日会洋画会(後に来日会)を新たに結成。同会の展覧会に第1回から第5回まで出品した。一方で、1914年に創立された二科会の展覧会にも第1回から第3回まで連続して入選をはたした。1920年12月3日、36歳の若さで死去。1922年3月5日～7日、久留米商工会議所階上において、「大野米次郎氏遺作品 洋画展覧会」(出品点数約100点)が来目会の佐野敏一らによって開催された。

(註)

ご遺族の大野泰雄氏より、大野米次郎のこととその遺作に関する多くのご教示をいただいた。《山村風景》(1913年、油彩・カンヴァス)は大正初期の印象派風の好ましい作品である。

(参考)

- ・『近代洋画と福岡県』展図録、福岡県文化会館、1980年3月



fig. 3 松本豊太《アトリエの二少女》
1898年、油彩・カンヴァス
115.1×90.0cm、個人蔵

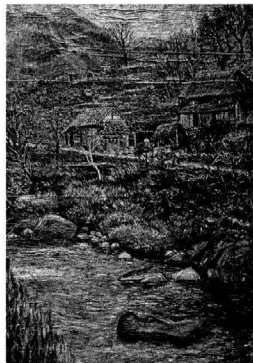


fig. 4 大野米次郎《山村風景》
1913年、油彩・カンヴァス
117.0×80.7cm、個人蔵

- ・篠原正一『久留米人物誌』菊竹金文堂，1981年10月
- ・『近代洋画と久留米』展図録，石橋美術館，1982年2月
- ・大野泰雄『なまずのたわごと』悠思考舎，2005年7月

□石原寿市(いしはら じゅいち 1914-1945)

1914年7月27日，福岡県久留米市に父石原百助，母イサコの子として生まれる。1932年3月福岡県立明善中学校を卒業，同校の同級生に美術評論家の河北倫明(1914-1995)がいた。1933年4月東京美術学校油画科予科入学，翌1934年4月同校油画科本科に入学，同校では南薫造教室に学ぶ。1934年同校の同級生であった萩原英雄，杉原正巳(石川正巳)と3人で版画研究会をつくる。1936年には南薫造教室の同級生たちと唾地社を結成，2回の展覧会を開催した。同年頃から同校の臨時版画教室で平塚運一に木版画を学ぶ。1937年国画会展と日本版画協会展で木版画が入選，後者では日本版画協会賞を受賞し，木版画家として将来を期待された。1938年3月同校卒業。同年の国画会展での入選が公募展での作品発表の最後となる。1938年12月10日出征，龍6739部隊野砲兵第56連隊(久留米)に所属する。1941年8月12日，豊国ミツエと結婚，同年長男修が生まれる。1945年3月22日，ビルマ，シャン州シボウで死去。1968年6月29日勲七等青色桐葉章を授与される。

(註)

石原寿市については，郡山市立美術館の菅野洋人氏のご教示をえた。

(参考)

- ・石原修氏による「石原寿市略歴」(戦没画学生慰霊美術館・無言館提出資料)
- ・『グループ〈貌〉とその時代』展図録，郡山市立美術館，2000年11月

□藤森静雄(ふじもり しずお 1891-1943)

1891年8月1日，福岡県久留米市に生まれる。同郷の青木繁に憧れ，1910年福岡県立中学明善校を卒業し上京，白馬会原町洋画研究所に通い，ここで田中恭吉を知る。1911年東京美術学校西洋画科予備科へ入学し，恩地孝四郎を知る。以後三人は友情を深め，1912年には三人でしばしば竹久夢二を訪ねる。1913年，恩地，田中と詩と版画による同人誌刊行を計画，1年後の刊行を期して木版画を習い始めた。1914年恩地を助け詩と版画誌『月映(つくばえ)』の編集に携わり，同年刊行する。1915年田中の計報を受け恩地らと遺作展を計画，同年日比谷美術館で開催した。1916年東京美術学校を

卒業，一時，台湾の中学校で教えたが，1922年まで福岡県立嘉穂中学校の教員をつとめる。1918年日本創作版画協会の創立に参加，以後同展に毎回出品する。1921年恩地らと総合芸術誌『内在』を創刊。1922年再上京し，1925年から春陽会展へも出品する。1929年から1932年まで恩地，平塚運一らと「新東京百景」を制作。1931年日本版画協会創立会員。1934年「大東京十二景」を完成。1935年には『福岡日日新聞』連載の近松秋江『紅雀荘』の挿絵を担当する。1940年福岡県飯塚市に転居し，1943年5月28日同地で死去。

(参考)

『近代日本美術事典』講談社，1989年9月

『刻まれた青春譜 藤森静雄版画展』図録，福岡市美術館，1982年1月

□石橋美三郎(いしばし びさぶろう 1893-1968)

1893年3月15日，福岡県山門郡瀬高町下庄(現・みやま市瀬高町下庄)に生まれる。福岡県立中学伝習館を中途退学し，1908年2月上京，太平洋美術研究所に学ぶ。大正後期から太平洋画会展を本拠とし，一方で並行して二科会展をも発表の場とした。太平洋画会では1931年に会友，1932年に同会



fig. 5 石橋美三郎《子供(石橋雪雄像)》
1929年，油彩・カンヴァス
73.3×61.0cm，福岡県立美術館



fig. 6 石橋美三郎《静物(花)》
油彩・カンヴァス
61.0×73.3cm，福岡県立美術館

無鑑査出品、1933年に会員に推挙され同会の幹部となっている。その後も同展を発表の場としたが、1937年からは石井柏亭、有島生馬、安井曾太郎らの発起になる一水会展にも参加した。1940年の二千六百年奉祝展覧会では指定出品者として《樺太の蟹》を出品。一方、1931年には福岡、1932年には柳河、1933年には福岡、久留米、大牟田、柳河、熊本、瀬高で、1934年には瀬高、1935年には大分、1936年には佐世保、島原、1937年には鹿児島など、九州での個展を毎年のように開催した。後には示現会展にも参加。1968年1月17日死去。

(註)

石橋美三郎については、ご遺族の石橋正雄氏より多くのご教示をえた。福岡県立美術館に2006年、石橋正雄氏より石橋美三郎《子供(石橋雪雄像)》が、石橋家(福岡県みやま市瀬高町)より《静物(花)》が寄贈された。《子供(石橋雪雄像)》の寄贈に際し、作品修復について石井亨氏の尽力をえた。

(参考)

- ・『瀬高町誌』、瀬高町、1974年
- ・植野健造「第五章 近代の洋画」『柳河新報』にみる柳川の近代美術年表 柳川市史編集委員会編『柳川文化資料集成 第三集 柳川の美術1』、柳川市、2005年2月
- ・植野健造「第四章第二項 洋画と彫刻」柳川市史編集委員会編『柳川文化資料集成 第三集—二 柳川の美術2』、柳川市、2007年3月

□溝江勘二(みぞえ かんじ 1909-2001)

1909年9月1日、福岡県三潁郡田口村大字三九一七九四番地の二(現・大川市)に、父溝江萬吉、母トリの長男として生まれる。1928年3月福岡県立中学校伝習館を卒業。同年12月上京し本郷洋画研究所に入所、翌1929年橋本八百二の書生となる。1930年第17回光風会展に《静物》が初入選。1931年の

第12回帝国美術院展覧会(帝展)において《蛙》が初入選する。《蛙》は1933年に柳川・立花家の買上げとなる。第二次大戦前は光風会展、帝展、新文部省美術展覧会(新文展)をおもな作品発表の舞台とし、その他にも第一美術協会展、主戦美術協会展などにも出品した。1933年には柳河京町の豊文堂において、1937年には柳河松屋デパートにおいて個展を開催している。戦後も東京に在住し、光風会会員として同展に作品を発表し続け、1958年に社団法人となった新日展にも出品を続けた。2001年1月1日死去。2002年と2005年に大川市立清力美術館において遺作展が開催された。

(参考)

- ・『溝江勘二画集』(溝江勘二画集刊行会、二〇〇一年三月)
- ・『溝江勘二先生を偲ぶ展』(リーフレット、二〇〇二年七月)
- ・『溝江勘二遺作展目録』(リーフレット、二〇〇六年八月)
- ・植野健造「第五章 近代の洋画」『柳河新報』にみる柳川の近代美術年表 柳川市史編集委員会編『柳川文化資料集成 第三集 柳川の美術1』、柳川市、2005年2月
- ・植野健造「第四章第二項 洋画と彫刻」柳川市史編集委員会編『柳川文化資料集成 第三集—二 柳川の美術2』、柳川市、2007年3月

□松本英一郎

(まつもと えいいちろう 1932-2001)

福岡県久留米市に生まれた松本英一郎は、東京芸術大学油画科および専攻科の林武教室に学んだ。同大学在学中の1957年の第25回独立展で初入選、翌1958年から3年続けて独立賞を受賞。1960年に独立美術協会会員となり、以後は独立展を中心に、個展や「新表現展」「十果会展」などのグループ展、「日本国際美術展」「日本秀作美術展」などの企画展を発表の場として活躍した。一方、1968年に多摩美術大学の講師となり、1972年助教授、1983年からは教授として美術教育にも力を注いだが、在職中の2001年に惜しくも死去した。初期の1950年代後半にはフォーヴィスムあるいは抽象表現主義的な作風を試みた時期もあったが、1960年代中期に紅白の幔幕と人物を描く「平均的肥満体」のシリーズで注目を浴び、1970年代からは茶畑や山並みを描く「退屈な風景」、さらに闘病体験を経た1987年以後は「さくら・うし」、そして1997年以降の晩年は「花と雲と牛」「花あかり」のシリーズの連作を、それぞれ飽くことなく描き続けた。旅先や日常で見つめた風景の中に、自らの心象や文明批評、世界観や時代観をユーモアに

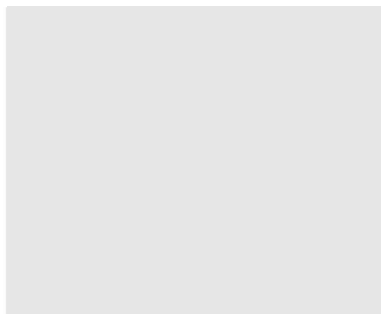


fig. 7 溝江勘二《蛙》
1931年、油彩・カンヴァス
72.4×90.8cm、柳川御花

包んでおりこんだ風景を描き続けた画家であった。

1932年7月8日、福岡県久留米市小頭町4丁目110番地の1に、父・松本大藏、母ハルの七男三女の四男として生まれる。1945年4月、福岡県立明善中学校に入学。1948年4月、福岡県立明善高等学校に入学。明善高校時代には美術部に所属した。1951年卒業。1953年4月東京芸術大学油画科に入学。1957年3月同大学油画科林武教室を卒業。大橋賞を受賞した。同年4月東京芸術大学林武教室専攻科に入学。同年10月第25回独立美術展に初出品し初入選する。以降、独立美術展には亡くなる2001年の第69回展まで毎年出品した。1959年3月東京芸術大学林武教室専攻科を卒業。1960年1月第4回新表現展に参加出品、以降第8回展まで連続出品する。同年10月第28回独立展において3年連続で独立賞を受賞。独立美術協会会員に推挙される。1968年5月多摩美術大学講師、1972年12月多摩美術大学助教授となる。1978年、心臓発作で倒れる。慶応病院において療養、精密検査の結果、肥大性心筋症の診断を受ける。同年、小平市たかの台から東京都八王子市絹ヶ丘3丁目34番3号(当時の地名は八王子市中山)に転居する。1979年5月、(第1回)十果会展に出品。以後毎年出品。1983年4月多摩美術大学教授となる。1986年1月、『月刊へら』に絵と文の連載を始める。1990年6月、「松本英一郎展」、青梅市立美術館で開催。1992年この年、東京都八王子市絹ヶ丘3丁目34番3号の自宅を建て替え新築し、新しいアトリエも完成する。1993年9月、「松本英一郎の世界—退屈な風景・さくら・うし—」展、池田20世紀美術館で開催。1999年5月28日、心筋症で倒れる。左半身麻痺の後遺症がのこった。神奈川県湯河原町の病院で療養、リハビリにつとめ、12月より多摩美術大学の勤務に復帰した。2001年6月17日、多摩美術大学の学生とのゼミ合宿で滞在していた山梨県富士吉田市の多摩美術大学セミナーハウスにおいて倒れ、病院に搬送されたが死去する。2003年6月、「松本英一郎 Works 1968-2001」展、多摩美術大学美術館で開催。

(註)

石橋美術館では、2007年9月24日から11月25日まで「退屈な風景 松本英一郎展」を開催した。展覧会開催にあたってはご遺族の松本泰子氏より多大なご協力をいただいた。展覧会終了後の2007年、松本泰子氏より松本英一郎《退屈な風景茶畑》(1974年、油彩・カンヴァス)を購入し、《平均的肥満体No.9-J》(1967年、油彩・カンヴァス)など11点の作品の寄贈を受けた。

(参考)

- ・多摩美術大学絵画学科油画研究室編『松本英一郎 Works 1968-2001』、多摩美術大学、2003年6月
- ・『退屈な風景 松本英一郎』展図録、石橋財団石橋美術館、2007年9月
- ・『プリダストン美術館 石橋美術館 館報』第56号(2007年度)(本号)

ブリヂストン美術館

Bridgestone Museum of Art

所在地 東京都中央区京橋1-10-1 (〒104-0031)
TEL (03) 3563-0241
URL <http://www.bridgestone-museum.gr.jp>
開館時間 午前10時～午後8時(火～土)
午前10時～午後6時(日・祝)
休館 毎月曜日 年末年始
入場料 個人：
一般 800円 シニア(65歳以上) 600円
大・高生 500円 中学生以下無料
団体(15名以上)：
一般 600円 シニア(65歳以上) 500円
大・高生 400円 中学生以下無料
なお、特別展の場合は変更することがある。

Address 1-10-1, Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo
104-0031, Japan
Phone +81 (3) 3563-0241
Hours 10:00 to 20:00 (Tuesday-Saturday)
10:00 to 18:00 (Sundays, national holidays)
Closed on Mondays, New Year holidays
Admission Individual :
Adults ¥800; Seniors 65 or over ¥600;
Students ¥500; Children under 15 free
Group (15 or more):
Adults ¥600; Seniors 65 or over ¥500;
Students ¥400; Children under 15 free
Different fees will be charged during special
exhibitions.

石橋美術館

Ishibashi Museum of Art

所在地 福岡県久留米市野中町1015 (〒839-0862)
TEL (0942) 39-1131
URL <http://www.ishibashi-museum.gr.jp>
開館時間 午前10時～午後5時
休館 毎月曜日 年末年始
入場料 個人：
一般 500円 シニア(65歳以上) 300円
大・高生 300円 中学生以下無料
団体(15名以上)：
一般 400円 シニア(65歳以上) 200円
大・高生 200円 中学生以下無料
なお、特別展の場合は変更することがある。

Address 1015, Nonaka-machi, Kurume-shi,
Fukuoka-ken 839-0862, Japan
Phone +81 (942) 39-1131
Hours 10:00 to 17:00
Closed on Mondays, New year holidays
Admission Individual :
Adults ¥500; Seniors 65 or older ¥300;
Students ¥300, Children under 15 free
Group (15 or more) :
Adults ¥400; Seniors 65 or older ¥200;
Students ¥200, Children under 15 free
Different fees will be charged during special
exhibitions.

(2007年12月現在)

石橋財団職員

常務理事 中山 暁

事務局

事務局長 遠藤 長夫
総務課 総務課長 森田麻利子
鈴木 弥生

ブリヂストン美術館

館長	島田 紀夫	学芸課	学芸課長(兼)	島田 紀夫
総務課 総務課長	新井 桂			貝塚 健
	金森 大輔			中村 節子
	塚田美香子			塩島 明美
	石川 久子			久野 朝子
	小原田鶴子			田所 夏子

石橋美術館

館長	平野 実	学芸課	学芸課長	森山 秀子
総務課 総務課長	後藤 純子			植野 健造
	富松 弘美			平間 理香
	原 朋子			
	河野 何奈			
	平島たか子			

2007年12月31日現在

